ゲットー?　蓬莱幻想

廣瀬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゲットー？　蓬莱幻想

【Ｎコード】
Ｎ５４５５Ｙ

【作者名】
廣瀬

【あらすじ】
時空軸の違う東京への集団遭難と、遺恨を残した友人たちの死から二年。平安ゲットーで高等部一年の春を迎えたリヒト、ミサビ、テッセン、そして、彼らと和解したミュー。リヒトは家族と再会の日を待ちながら、転生の理由となった京都でのできごとに悩んでいた。いっぽうテッセンは、留学した蓬莱ゲットーで、かつて自分が否定した“魔法”を現実にしようとする研究者と出会う。ゲットーの存在意義が問われる一年の幕開け。魔界へと変貌をとげはじめる世界で、隔離自治区と現世と天使たちの関係の、新たな局面は。

1　春雷

「ひとりの科学者の夢が、百万の無辜の民を殺す。ノーベルやライト兄弟、アインシュタインの轍を見よ。彼らの技術がもたらした、おそるべき結果を見よ。そこかしこ、無数に積み重ねられた民衆の死体――これこそが、彼らの夢の暗部が抱えた汚点である。これからのちの科学者たちよ、お前たちがもしも世にもあえかなる夢を見たとして、重々承知しておくことだ。もう一度、同じ道を通るわけにはいかない。人外よりもたらされた力を研究する以上、その危険の上に立つことを自覚しなければ。私たちの野放図な夢こそが、まさにこれから世界を滅ぼすのだから」

――L．S．VENESTROM“魔的粒子研究誌”より

＊

春が出会いと別れの季節である、という考えは、ここ、蓬莱市にはない。しかし、彼にとって、今年の春こそがまさにそれだった。いや、出会いと別れ、というよりも、それは別れでしかなく、別れというには、それはあまりに納得のいかないことであった。

「××××××！　×××××××！　×××ー×！！」

テーブルを叩いて罵詈雑言を吐き散らかす。それを聞いた周囲のひとびとが、あわてて慰めの言葉をかける。ここで彼が手にしているのに相応しいのは、ワイングラスかビールのジョッキか、というところである。背景が、薄汚れたパブならなおいっそう絵になっただろう。

しかし、残念ながら、そこは真昼間のカフェであった。周囲にいたのも、友人ではなく、迷惑そうに顔をしかめた店員たちだった。
「大丈夫かい」「ほどほどにしてくれよ」――彼らは、真昼間から、研究所の職員がここでくだをまいていることを不思議に思ったが、スチュアートのことを、まあまあよく知っているので、いつもの気晴らしの一種だろうと考えた。最後は「お静かにねえ」と、豊満なバストの女性店員に、軽く注意をさせるだけでほうっておくことにする。ほうっておかれたスチュアートは、さきほどよりいくぶん音量をおさえて、再び、上司をののしる。
「ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう……！」
もうすこしだったのに。
彼の頭をずっと駆け巡っているのは、その一文だった。
もうすこしだったのに。あとすこしで世界を変えられたのに。あと少しで。
いったい、何が悪かったのだろう？
コーヒーで酔うわけはないが、体内をかけめぐる激情が、それに似た効果をもたらして、すれに彼はぐでんぐでんである。酩酊のいきおいで頭をテーブルにぶつけながら、いつ終わるともない呪詛を吐き出す。
どのくらいたったころだろうか。春風が身にしみるほど寒くなってきたとき、ようやく、彼のもとへよく知った人物がやってきた。
「ハイ、老師。ゼンマラ（どうしたの）ー？」
元、後輩の女性である。今は、大学で事務をしている。仕事帰り、という格好の彼女――小麗は、彼の隣に腰掛けて、プーアール茶を注文すると、かわいらしく首をかしげた。彼女は、かつて米国へ亡命したチベット民族の子孫である。目の前の若い男が、かつて先祖を虐待した漢民族の末裔であると知っていたが、なんとなく憎めなかった。それは、この男が、過去を気にせず未来だけをみる科学者であったためかもしれないし、今見せるような、直情径行の様子が、

ひとを心配にさせないではおかないから、かもしれない。
それはそれとして、スチュアートはそれを聞くと、理解者を得たとばかりに、がばりと顔を起こして手をふりまわした。
「聞いてくれよ！」
しかし、その顔で、事務にしておくにはもったいない、と言われる小麗はすべてを悟ったらしかった。
「ああ――ついに潰されたの」
はっきりと他人から聞いて、スチュアートはまたテーブルにつっぷした。小麗はあわてて鞄をさぐり、
「老師。しっかりして。大丈夫よ。ねえ――あ、そうだ、クッキー食べる？　お好きでしょ、チョコチップのクッキー。私、昨日焼いたの」
「おお……ジーザス……」
彼の所属する魔的研究所蓬莱支部は、他の支部と同様、ソジ粒子発見にともなって続々と見つかった未知の粒子――総称して、それらを魔的物質と呼んだ――の、研究をしている。関わっただけで命を落としてしまうため、人間には扱えない。羽化転生した彼らだけが研究できる、いわば独占業務だった。研究の過程で副次的に得られる技術の応用が、それぞれのゲットーがあげる収益のうち、かなりの部分を占めたので、魔的研究所の各支部はいわば、それぞれのゲットーにおけるフラッグシップであった。
さて、彼らの在住するこの蓬莱市は、名前だけ見ると、アジア圏に存在するゲットーのように思われる。しかし、そうではない。蓬莱ゲットーは、米国在住のアジア系転生者のために設立された、米国にあるゲットーであった。特に、他国へ移住しても頑として自国の文化を保持し続けた、中華街、朝鮮街出身の住民が多い。そこに、わずかに日本やシンガポール、マレーシアなど東南アジア人種が、欧州アフリカ圏からも合流する。もっとも歴史の新しいゲットーとしても知られている。
上海とか、香港とか、広州とかマカオとかの地名がつけられた区

に、五千人程度が暮らしていた。所在地米国の属する大西洋連合（アトランティック・ユニオン）の、第六のゲットーとして数えられたりもする。

チャイニーズ・スピリッツとアメリカン・ドリームがキメラのごとく、一つの町の中に特徴をみせる。今、彼らがいるのはカフェであるが、その両翼には茶館もくっついて、カフェ・ラテやバドワイザーや烏龍茶や茉莉花茶、もうもうと湯気をたてる蒸篭の点心などがごっちゃになって売られていた。

「それで、今度はどこの部署に行くの」

「簡単に言わないでくれ。私は――私は、あきらめきれないんだ」

「でも、予算がもうもらえないでショ。それか、老師。老師なら、よそのゲットーの支部に移ったらいいじゃない。ヒクテアマタでしょう」

「駄目なんだ。くそ。所長が――所長さえそのままなら」

去年、蓬莱支部の所長に、新しく、スチュアート・ヒルガーという男が就任した。元、大手新聞社の会長を務めていた人物である。彼は、無駄な経費と人員を削減するために、金にならない研究からとっとと撤退することをはじめ、この春、ついに、その魔の手がスチュアート（いまいましいことに、彼は、所長とファーストネームが同じである）の部署にも及んだ。いわく、経費ばかりかさんで結果が出ていないから。実用化には程遠いから――たしかに、スチュアートの部署は金も人もよく食った。本当なら真っ先にきられていてもおかしくなかった、ともっぱらの、所内の噂である。しかし、部外者であっても彼らを必死にかばい、まもろうとした人間が多かった理由は、彼の部署が、この先の世界を変えるかもしれない、最先端の技術を研究していたからでもある。研究者にとって、世界初、とか、業界初、とかいうのは、命にもまさる名誉だった。ロマンだった。夢だった。結果が出ていない、と言われればそれまでだが、その結果まで、スチュアートのみるところ、あと一歩にも迫ろうとしていたところだったのである。もう少し待ってくれよと彼は言いたかった。だが、その声が届くことは無かった。

かくして、スチュアートは、コーヒーカップを手に酔っ払うのである。
「自費で――自費でできないことはない――」
「でも、次の新しい部署のトップになるんでしょ」
「私のやりたい研究ではないんだよ。惜しいところだけどね」
「でも、そっちのほうがお金になるんでしょ」
「最初からお金目当てで研究する科学者なぞ、科学者ではない。そんなものいるか！」
「ふうん。で――あと、何が足りなかったの？　もうちょっとだった、って」
「そりゃ――最後の実験に協力してくれる、人、だよ。動物実験は済んでいたからね。そうだなあ――気力体力ともに充実して口が堅く、うちのデータを持ってよそに逃げたりしない、誠実な――そうだな、軍人ならいい。一番いい。蓬莱ゲットーの軍人なら。そう思って、人選しようとしてたんだよ。その矢先のことだった――あのヒルガー、鼻持ちならないやつが」
「でも、申請書がいるわ。今となっちゃ、軍が許可してくれないと思う」
「連合ゲットーは？」
「もっと無理」
「蓬莱の学生」
「さらに無理」
小麗は、すましてプーアール茶のマグカップに口をつけ、スチュアートはがっくりと肩を落として、クッキーをほおばる。
「近い研究やってます、ってことで、こいつをデコイにするか――チーム自体が身売りされなかっただけまだましだった。しかし、そうすると月例発表をどうするか――」
もそもそと呟くスチュアートを、小麗は同情の目で見た。
ふと、彼女の脳裏に、奇術めいた策が浮かぶ。
「ねえ老師。なら、こんなのは？　要は、最後の実験に協力してく

れる人がいればいいわけよね。ちょっと危ないかもしれないけど」
「ん？」
「他国からの留学生はどうかなって。お金でなんとかなるかもよ」
「留学生――」
「大学で、誰か適当なのが見つかるかもしれないわよ。いや、大学じゃ、自分の租界の思想にどっぷりつかりすぎてるかしらね。高等部――まで範囲を広げるか――」
「あんまり頭がよくないほうが助かるね」
ぼんやりと、考え込みながらそう言ったスチュアートだったが、だんだん、小麗の言葉が脳裏に染み入るにつれて、希望がわいてきた。
――ありかもしれない。
彼は、すばやく計算をめぐらす。
今、彼はピンチにあった。元、同僚のなかには、彼らがこれまで蓄積してきたデータを持って、よその、同じ研究をしているところへ移籍する、というものもいる。もしもそのデータがわたったら、彼らがどこまで事を成していたか、どういったアプローチをしていたか、ほかの支部のライバルたちに、たちどころに分かってしまうに違いない。
ほんの一秒論文を出すのが遅れただけで、その功績が他人のものとなる、というシビアな事実は、２０世紀科学者のあいだに浸透して以来の常識だ。今、スチュアートは、誇りをかけてそこに立ち向かおうとしていた。
彼の故郷、中国――いわずとしれた古代中国は、羅針盤、紙、印刷術、火薬を生み出した、大いなる発明の国であった。それが、二千年のちには、他国の眉を曇らせる、模造品の最大産出国となっていた。そこから名誉を挽回するのに二百年、自国での研究体制を確立するのに五十年。いまや、中国は、アメリカ、インド、日本と肩を並べる科学の国である。生物学の範囲で、今回はイギリスとも並ぶかもしれない。

変化した、元、中国人の大きな野望は、今、散ったかに見えた翼を再び得ようとしていた。
「ようし、やってみるか。となれば、用意は周到にこしたことはない。そうだ……私が、最初に世に出す――見ていてくれ、小麗！私が、世界で最初の魔法使いだ。私が、科学を魔法に変える！　イッツアチャイニーズスピリット！」
「老師、がんばれえ」
たったひとりの拍手と協力のために、世界がコペルニクス的転回を迎える、ということも、やはり、奇跡の一端である。技術が飛躍するとき、たまには、こつこつとした実証の積み重ねではなく、まったくの偶然からなる、ということもあるのだ。曼荼羅のように複雑な人の動きと時間の流れが生み出す魔法が始まろうとしていた。
そして、そこにまきこまれてゆく留学生はというと、今――

1―2

春、平安市は、満開の花に埋もれていた。平安市、というこの場所に、もしも人格があったなら、あまりにも華やかに装った自分の姿にほほを染めるだろう。雪解けして久しいこの町でも、なんといっても、春の訪れをはっきりと感じさせるのは、やはり、花弁のひとつひとつがピンクの水晶に色づいて咲き誇る、桜であった。そして、それが終われば、新芽の芽吹く卯月の終わりから、すがすがしい皐月の晴天に、繁栄の緑が透かし模様をつくる。緑陰はまだ熱を持たず、静かな冷たい風がさわやかに駆け抜ける。

その、平安市にある平安学園高等部。近代的なつくりの建物のピロティには、ついさっき、試験を終えたばかりの学生たちが、ぞくぞくと現れて、立ち話をしていた。そのなかに、三人の男子学生と女子学生がいて、なにやら熱心に話し込んでいる。一人は、とびぬけて背の高い、体格のいい、ワイルドを絵に描いたような人物。二人目は、やや茶色がかった髪に秀麗な、優しげな顔立ちの少年。三人目は、身長も体格も、一人目と二人目の中間に値する、どことなくエキゾチックな雰囲気の少年である。香るような異国情緒以外に特筆すべき点はないが、闊達な様子が目をひいた。そして、彼のそばに静かに寄りそう少女はというと、あたるをさいわいなぎ倒す、どことなく恐ろしくなるような、人間離れした銀髪と美貌の持ち主だった。

「ぜんぜんわからなかったな」

べつに後悔するふうでもなく、乾いた声で呟いたのは、ワイルドを絵に描いたような――テッセンである。銀モールのついた学ランの襟をはずして、やれやれというように肩をまわした。ずいぶん伸

びた髪を、雑に後ろでひとまとめにしている。
「俺も、ぜんぜんわからなかった」
情けない調子で言ったのは、エキゾチックでいつも元気――リヒトである。幼さを抜けかかった青年の顔つきで、同じく、襟をはずす。
「身体髪膚これを父母に受く、あえて毀傷せざるは孝のはじめなり？　だったか。これを平安人の立場から反論せよ――ミサビ、なんて回答した？」
“一切衆生斉しく父母の恩のごとく深しと思いて、なす所の善根を法界にめぐらす。別して今生一世の父母に限らず”」
「なにそれ、どこからの引用？　どういう意味さ」
「正法眼蔵随聞記――すべての現象を、両親から受ける愛情のように深いと思って、行動を良くしなさい。孝恩とは、特に、生みの父や母に対してたてるものとは限らない。と」
「あ、私も」
ミサビの答えに、ミューもうなずく。
「課題図書だったね。一応、覚えておいたんだけど」
「これだから優等生は」
ねえ、とリヒトとテッセンは顔を見合わせた。テッセンは「けっ」と吐き捨てると、
「こちとら演習帰りだからな。ぐちゃぐちゃ引用だの暗記だのは性にあわねえや」
不勉強のいいわけをした。
「でも、書くことは書いたんでしょう。なんて反論したの？」
リヒトが尋ねると、興味深そうに、ミサビトミューも目をしばたかせる。
「俺は毀傷してないから関係ねえって」
あごをそらし、にやりと、自分の胸を親指でさす。
「あ、そう」
たしかに、彼は、生まれながらの平安人だ――テッセンは、四月

の半ばから二週間にわたって、類?、と呼ばれる区分の生徒の必修授業に参加していた。亜空間にとんで、仮想敵を倒す実践授業である。この類の授業が、特に、前衛と呼ばれる進路を希望するものは激増する。授業を終えてさらにひきしまった横顔を見ながら、いいなあ、と、正当な言い訳を持たないリヒトはため息をつく。彼は類?――医療、農業、芸術系に属する生徒である。後衛、後方支援組で、主に補給について学んでいる。同じく、類?に属するミューが

「大丈夫だって」と慰めるように肩を叩いた。

「補修になっても、私がいるからさ。ね――リヒト」

「ああ。頼むよギン」

「まかせて」

ちっ、と、あまり聞かない舌打ちがしたほうに二人が顔を向けると、ミサビはにこにこしている。

「僕も教えてあげるからさ。ね、テッセン」

「あー、うるさいうるさい」

テッセンは、しつこいハエをはらうように肩に置かれた手を払った。彼の眉間には、深いしわがいまだに刻まれている。ミサビは、それ以上深くは追求しなかった。

ふと、誰の口からも言葉が失われる瞬間。

四人が一度に集まるのは久しぶりだった――それこそ、共通テストでもなければ、あまりに授業の内容が違うので、話も合わない。

あの事故から、一年と半年がたつ。

「このあと、どうする」

「ミューは?　このあと、用事があるって言ってだろう」

「女子寮で、寮内会議なの」

目をきらめかせた彼女の襟にもまた、高等部一年の学年章がある。結局、あの事故からまる一年、彼女は眠り続け、宣言どおり、リヒトたちの同級生となってしまった。はからずも同級生となった元・下級生たちの驚きはいうまでもないが、目覚めたあとの激変ぶりが、まして彼らを絶句させた。鬼の銀色と呼ばれた少女のとげとげしさ

はすっかり消え、今では、本当に人が変わったのでは、とまことしやかに言われる。なるほど、つつましくリヒトに寄り添うさまは、はかなく、内気にも見えた。しかし、
「そういえばあんたたちは、職員室に呼ばれてるんじゃないの？」
はっきりとした物言いはそのままである。ミサビとテッセンは「ああ」と顔を見合わせた。
「そうだったな。面倒くせえなあ」
「じゃ、ちょっと行こうか。どうせ夜には会えるんだから、結果はそのとき。――二人とも、寮に戻るの？」
「うん。じゃあミュー、会議は夕方だろ？――どっか、二人で甘いものでも行こうか？」
「行く」
二人が仲良く去っていったのを見送りながら、テッセンはため息をついた。彼らの後姿は、ただの友人には見えない。当人たちがどう思っているのかはともかく、その甘やかな雰囲気は、恋人のものである。
「あいつがあんな軟派になるとは思わんかったなあ」
テッセンがぼやくと、
「まあねえ」
ミサビが苦笑する。彼もまた、茶色い髪をやや長めに伸ばして、後ろでひとつに結んでいる。彼が通り過ぎる女子に手をふると、歓声があがった。「お前もか」と呆れて、テッセンは大きく鼻から息をもらす。
「まあ――外部生なら、あのくらい普通だと思うけどね。君が固すぎるんじゃない。封建主義的っていうんだよ、そういうの」
「封建主義おおいに結構。俺は、こうはなりたくねえな」
じろじろと、中性的なミサビの容姿をためすがめつして、テッセンは腕組みした。
ミューが同級生になってからというもの、いつのまにリヒトとそんな仲になったのか、女子のあいだでもちょっとした騒動が巻き起

こった。シンが現在留学中のため、代替としてリヒトの庇護を受けているのでは、という噂だったが、リヒトのどこにも、彼女をひきつけてしかるべき魅力がみあたらないので、みんな、困惑している。幼馴染であることを知るのは、ミサビ、テッセン、今はいないが、クラスメイトのシルル、三人だけである。

ミサビにしても、誰にでも愛想がいいものの、やはり、ときどきこそこそとどこかに出かけていく姿を、テッセンは見ている。女関係だろうと探りをいれても、リヒトのようにあっさり吐かないのが癪だった――しかし、今は、リヒトとミューである。

二人がどうなっているのか、テッセンにも図りがたい。このごろリヒトが何を考えているのか、テッセンにもわからなくなっている。

「そういや、素面で愛してるっていえるやつだったか。うーん、平安も変わった。隔世の感があるな」

「古くさいなあ。じゃあ、君は、好きな人ができたらどうやって伝えるわけ。まさか――和歌でも詠むなんて、天地がひっくりかえったってないだろう」

「俺は決まってる。一言、月が綺麗ですね――男ならこれできまり」

「新月だったら？」

「星が綺麗ですね」

「曇りだったら？」

「街の――明かりが……」

「昭和区限定だね、それ」

「――やめよう」

「そうだね」

ため息をつくと、二人は、再び、校舎の中へ戻った。彼らにとって、この一年の予定を決める大事な申し渡しが、担任からあるはずだった。

「通っただろうか」

歩きながら、いくぶん心配そうなテッセンに、ミサビは一言「なぜ」と、不思議そうでもなく言う。

「君以外に誰が行く？」
「――あの一件がある。俺たちは、いわば、あいつの身代わりでもあるはずだ。それを――出すかな」
「憶測が乱れ飛ぶのは承知の上だろうね。それでも、国家百年の計を崩すわけにはいかない。どのみち、誰かは行かなくちゃ。かえって不自然だ」
「ああ」
「行こう」
職員室のドアノブに手をかけると、ミサビは一気に開いた。

＊

一方、ミューとリヒトは、学園を出て、大正区にある喫茶店へ向かっていた。
歩いていると、じぶんの隣にいるミューに、通行人の視線が集中する。それが、面映く、奇妙に照れて、リヒトは知らずのうちに早足になっていた。
「待ってよ。早いよ」
「ごめん」
あわてて立ち止まり、ミューが追いつくのを待つ。小走りにやってくる彼女の、最近ばっさりと切って短くなった前髪が、ふわりと風に舞って、かたちのいい額をあらわにする。どの一瞬を切り取っても絵になる少女である。元、男だとは思えない、と、そのたびにリヒトは思い、もう女の子なのだから、と思い直す。
店であんみつなどつつきながら、食欲全開のリヒトを前に、ミューは思案顔だった。
「ねえ、昨日」
「ん？」
「シンから……、手紙が、来たんだけど」
「ああ」

「あとね。今度、私の――検査があるの。マテ研に、一緒に行ってくれない？」
「いいよ」
あっさりと言う。同級生になって、ようやく一緒にいられるようになってから、いつもこうだ、とミューは思い、ふと、知らないあいだに増えた彼の癖に気付いてどきりとする。彼女が眠っているあいだ、リヒトはずいぶん成長していた。すっかり背も伸びたし、横幅も増えて、以前のように子どもっぽいところが少ない。再会したとき、ずいぶんな変わりように面食らったことが、昨日のように思い出される。
彼ののんびりとした様子にも不安を隠せなかった――ほんとうにわかっているのだろうか？　一年と少しのあいだ、何事も無かった。だからといって、これからも何も無いとは限らない。
彼はサンプルだ。天使たちの干渉を受ける身だ。
「夜はどうするの？」
「同窓会」
これも信じられないことに、リヒトは、見かけによらずずいぶんな甘党だった。器の底に残った黒蜜まで残さず飲み干す。ミューの残したものまでさらって同様に飲み干し、ごちそうさま、と丁寧に手をあわせてお茶を飲んだ。
「シンさん、なんて？」
「え？」
「他には」
「他……ええと――」
いつか草間士郎に、籌のようだと評された目が、ミューを見ていた。特有の、どこか遠くを見るような視線の向けかた。こんなとき、ミューは、リヒトのことがよくわからなくなる。
「向こうの情勢と――気をつけろ、って」
「気をつけろ？」
「おとなしくしてろって。――そればっかり」

「そう」
彼は、珍しく声を低くうなずいて、それきり、ふと何かを考え込む。
――何か、変だ。
ミューは、最近、リヒトが妙によそよそしく感じられてならない。忙しい高等部の授業が始まって、進路をはからずも変更させられたことを思い出して腐っているのかもしれないし、ミューと同じ学年になったのが嫌なのかもしれない。いや、こうやってまとわりつかれるのがいやなのかも――
ほうっておくと、どんどん思考がマイナスになる。それを、リヒトは敏感に感じ取ったのか、顔をあげると「ちょっと」と、するどく声をあげた。
「ギン、ストップ――今、なに考えてた」
「なに、って……」
答えに詰まる。こういうとき、うまく言い逃れる術を、彼女は持たない。こういうことにならないように、今までは、人をよせつけずに生活していた。しかし、すでにこの幼馴染の前で、無防備でいることに慣れている。リヒトは、ミューの緊張を見抜いて、表情を和らげた。
「的外れもいいところだよ。違うよ――俺が考えてたのは、別のこと」
「別？」
「最近、思うんだよ。ようやく、今になって、冷めてきた、ということだろう。昨日、夢を見た。修学旅行の夢を。俺が変化した日の夢」
「ああ……」
彼が、京都で修学旅行中に粒子を浴びたという話なら、すでにミューも聞いている。「どういうこと」と尋ねると、リヒトは「本当に俺であるべきだったのか、と――」
と、あごに手を当てる。これも、最近になって出てきた癖である。

そうすると、どことなく、老人めいた雰囲気を彼は帯びた。

1―3

その夜。
彼がようやく暖簾をくぐったときには、座はすっかりできあがっていた。
「遅れました、先生。このたびは、ご結婚おめでとうございます」
座敷に上がると、リヒトはまず上座へむかい、この宴の主役である恩師に、膝をついて頭を下げる。ざわめきのなかで「よしてくれよ」と相手は言った。
「いまさら先生でもないよ――それにしても久しぶりだ」
笑ったのは、キョウタローである。一年半前、平安学園の社会科教師の職を辞してから、今は、町で剣道場と塾の師範をして暮らしている。彼が結婚するにあたって、同窓会を企画したのはミサビだ。彼も今、ここへ向かっているはずである。
先に来ていた面々は、すっかり楽しくなっているようだった。さすがに素肌を出すことはしないが、だらしなく、着物やシャツの襟をくつろげて、酔ったようになって騒いでいる。
「リヒト、何飲む？」
席についたところで品書きをおしてよこしたのは、ワンピース姿のマチコである。少しでも華やかにしようというのだろう、髪に、綺麗なデイジーの飾りをつけている。女子は打ち合わせたのか、皆、髪や胸に生花をさしていた。
「会津中将」
そう決めて彼が店主を呼ぶと、
「俺もお――親父い！　赤霧島！」
「越乃寒梅。いや、冬玲を」
「京山水」
「オリオンビール」

それぞれのお里がばれそうな酒の名を、めいめいが注文する。
彼らの体は、アルコールを分解しない。分解しないかわりに、吸収もしないので、飲酒の行為は単純に味をみるだけだが、酒の持つ力は、座そのものを酔わせる、という効果を、ここではもたらした。アルコールの影響を受けないので、未成年でも、高等部から飲酒が許可されている。この春待ちわびた特権を得たばかりの彼らは、なにかというと酒を飲む機会を探していた。今日と決めて解禁を待っていたものもいて、苦い、だの変な味、だの、初心者まるだしの感想を漏らしつつ、それでも楽しげに杯を重ねている。
しかし、酒が飲める、ということは、慶事でもある――そう、文字通り今回は慶事だった。キョウタローの結婚。ようやく彼に訪れた春を祝う場である。
しかし、そこでただひとり、テッセンだけが浮かない顔だった。
「どうしたの。あれは、合格だったんだろう。――また、タエコさんに怒られる？」
「ん？　いや……ああ、まあな」
長年、藤原家に仕えてきた家政婦の女ボスであるタエコは、もろもろの集まりでテッセンが居酒屋へ行くことを快く思っていなかった。いわく、居酒屋などは下男の行くところだから、であるらしい。藤原家の御曹司が行っていい場所ではない、という。
しかし、テッセンの悩みは、べつにある。酒が来て、一献傾けたあと、リヒトは口を開いた。
「あらためまして。こんな場で……ご愁傷様――というのも他人行儀だけど。俺も、本当にテッセンの母上が好きだった。残念だ」
「いや。――ありがとう」
「どういたしまして」
テッセンの母、藤原緑が亡くなったのは、彼らが高等部に入学してすぐ、卯月初旬、桜舞い散る春の日のことだった。つい一ヶ月ほど前になる。葬儀はしめやかに行われた。テッセンを宿したために生きながらえていた女の最期が穏やかだったことが、一家のただひ

とつの救いだった。すでに、リヒトは、藤原家の内部の様子も知っている。最期の日まで、“火宅”にテッセンの友人として出入りしてきたし、彼から、家庭内の事情も聞いていた。テッセン自身は、葬儀後すぐに突入した実践授業のおかげで、母を失ったショックから遠ざかっていたが、最近、ようやく、心がそちらに向いていたところだった。

「それで。母上が亡くなってから、あの家をどうするつもり。タエコさんは」

「本宅には、いまさら、俺は戻る気はないんだ。また、国に帰るなんて、タエコもいまさら思っちゃいないだろう。俺も、はいさようなら、と家から追い出すほど冷淡にもなれん。俺が生まれてから――いや、生まれる前からか。タエコはずっと母に仕えてきた。ぼんくらの末息子の面倒まで引き受けて、今じゃそれが、あいつの生きがいみたいなもんだ。今までどおり、二人であの家で暮らすさ」

「家族は、それで？」

「まあ、反対されてるな。親父が特に――」

「そう」

リヒトはため息をつく。テッセンは、うんざりと、落ちてきた髪を後ろにかきおくる。

「俺の留学に関するあれやこれやが出てきてから、姉や兄まで巻き込んで、ちょっとした騒動だ。どのみち、今日はまた、本宅に帰らねえと」

彼の留学先は、米国にある蓬莱ゲットーである。彼はそこに、武術の研鑽を積みに留学する――というのが、昼間、彼とミサビが職員室に呼ばれていた理由だった。リヒトがせがむと、テッセンは、「選考結果通知書」という、簡素な書類を見せてくれた。

「ミサビは？　あいつもそれで遅れてるんだろうけどな」

「あ、うん。一度寮で会ったけど、用事みたいだ」

ミサビもまた、秋から他ゲットーへ留学することが、さきほど決まった。フランスにあるイース・ゲットーで、彼は語学留学である。

あいついで決まった親友二人の留学が、しかし、リヒトは心配だった。

あの事故から二年が経とうとしている。

まずまず、何事も無く過ぎた。あれ以来、妙なことも起こっていない。天使からの干渉もない。嘘のように平和だ。ときおり、彼は、自分がサンプルであるということを忘れそうになる。

逆に平和でないのは、外の世界だ。

「気をつけてね。最近物騒だって――もっぱらの噂だ」

「わかってるよ」

平和を絵に描いたような彼らの生活と異なって、いまや、世の情勢は多難のように見えた。アフリカのゲットーでは、地域住民との間に、ついに武力衝突が起きた。きっかけは些細だ。子どもが変化したためにゲットーに連れて行かれた、という親が、他の同様の親と武器を手に、政府に乗り込んでいき、子どもを返せと直談判をした。変化したとはいえ、わが子は手元で育てたい、その権利があるはずだ、というのだ。口論のすえ、そこの担当部署にいたゲットーの高官五人が殺され、容疑者の身柄を引き渡す、渡さない、で、ゲットーと現世の政府のあいだで熾烈なやりとりがされた。その後、母親に同情し、政府の対応に激昂した住民が、ゲットーを包囲した。自国の軍隊までが出動して騒動を押さえ込もうとしたが、不満を爆発させた国民を前になすすべもない。最終的に、彼らに対抗すべく出動したのは、アフリカ・ゲットー軍である。そして、ついに戦端が開かれ、あっという間に戦闘は終了した。

あらかたの予想通り、敗れたのは、包囲したほうだった。死傷者は幸いにも出なかった。しかし、それこそがもっともまずいことであった。時間を操るゲットーの住民に、物理的攻撃が効かないことがあらためてわかり、それは、全世界の人間を絶望させ、震え上がらせた。

結局、ゲットー側が寛大にならざるを得なかった。もとより、高官五人の賠償金は法律により放棄せざるを得ない。痛みわけ、とい

うように現世では見た。しかし、どうみても、ゲットー側に不満が残る決着である。何もしていないのに五人が殺され、包囲され、正当防衛で対抗すれば恨み言を言われ、賠償金まで放棄させられたのである。かくして、ゲットー内に、人間たちへの嫌悪感が広がるのであった。

「やめてほしいな。今まで平和でいたものを。いまさら戦って何になる？　そう思わねえか？」

「平和では、世界は一歩も進まない、ってギンが言っていたけど」

「そうだ。しかし、なんか、きな臭い雰囲気なんだよな、最近。それがらみ、ってわけじゃないだろうが――上のほうがばたばたしてるの、知ってるか？」

「それもギンが言ってた。近々、人間側が何かしそうだって」

「ああ。そういえば……お前さ、今、ミューとは――」

「すみません、遅れまして」

歓声があがって、そちらを見ると、ミサビが到着したところだった。彼は、型どおり、元担任に祝辞と挨拶をのべると、二人のもとにやってくる。

「シルルを連れてこようとしてたんだけど、駄目だった。――また、頭痛がするって」

困ったように、肩をすくめた。

「そう。大丈夫かな」

同じく、サンプルの秘密の共有者であるシルルは、あれから、頻繁に体調を崩すようになった。以前は明るかった性格も、今ではどこか歪んで、そのギャップに自分でも恐怖を感じているようだ。シルルだけが、あの東京で別のチームにいた。彼らには分からない苦しみが刻まれているのかもしれなかった。

「お前は、秋からだっけ」

ミサビにむかって、テッセンが、留学の開始時期について尋ねる。

「そう。テッセンは来月すぐ？」

「ああ。でも、夏に一度帰って来るよ。で、次がどこかは、まだ未

定。お前らは？」
「変わらず。でも、夏は、僕らは、仕事かな。去年と一緒。別荘のついでに、遊びにきてよ――でも、今年は、向こうでの小遣いくらい稼がないと。遊んでる暇ないかも」
「私も留学だよ！」
横から声をかけてきたのは、マチコだった。いつの間にジャスミンティーをやめたのか、ワインを手に、頬を赤くして、声がいつもより大きい。
「ロンドン！　ロンドン橋渡るんだよ！　短期なのが惜しいよ！」
「被服だっけ。ますます腕があがるんじゃない――あ、カレン。マチコを引き取ってくれる」
「お騒がせいたしましたわ」
キョウタローのせっかくの祝いの席だから、ということで呼ばれていた、現在高等部三年生のカレンは、今年、とうとう、籍を平安市に定め、これからはずっと平安市民である。「今度は私がマチコを待つのねえ」と喋る――彼女は、印僑であった父親と、アメリカと日本の混血の母を持つため、インドにあるゲットーと平安ゲットーの、現世なら二重国籍であった。すでに、舞踊家として、平安市以外でも名高い。彼女とマチコが、女子たちの群れに消えたあと、テッセンが、
「夏ね」
と、彼には珍しい、アンニュイな声色で言った。
「なに――どうしたの」
「何か不安でも？　いまさら？」
「いや、ちょっとな。ちょっと、相談したいことがあったんだが」
「なに？」
「来たんだよな。あれが――」
「あれってなに」
やけに口ごもり、言い渋るテッセンに、いらいらとミサビが言った。テッセンは「ここに来る前、決まったって報告しに――実は一

度本宅に行ったんだが。とうとう、来た。母が亡くなったからだろうな。早いところ、俺を縛り付けておきたいんだろう――縁談が」
「縁――」
さすがにミサビも絶句した。リヒトも言葉を失ったが、いち早く回復して「結婚するのかテッセン！？」と、枡になみなみと注がれていた酒をこぼした。
「しいっ」
あわてて、テッセンが彼を押さえつける。幸い、他に気付いているものはいない。
「あ、相手は……？」
気の毒な女子もいたもんだ、と、友人に対してまことに失礼なことを思いながらおそるおそる尋ねると、テッセンはますます表情を厳しくして、ぼそりと言った。
「何、きこえない。誰？」
「――ヨラ」
「ああ、」
なんとか聞き取ったミサビが声をあげた。しかし、すぐに、その声は、どこか、不安を帯びたものになった。
「それは……、懐かしいね」
不思議な調子でうなずき、困ったようにひっそりと笑う。からかいの言葉は出ず、二人とも、顔を見合わせて黙った。首をひねるリヒトだったが、次の瞬間、彼もため息をついた。
「サヨラさん、というひとはね。君は知らないだろうけど有名だよ。通称、虫愛ずる姫君、という――」
「ミサオの妹だよ」
「ミサ――オ、の、」
一時期、リヒトと寄宿舎の同室だった少年。妹がいたのか、とリヒトは驚いた。もちろん、ここは平安市なので、血のつながりの無い義理の妹なのであろうが、まさか、そんなひととの縁談がテッセンにくるとは。

本人も「晴天の霹靂もいいところだよな」と呟きながら、手にした杯を干す。どうやら、気の毒なのはテッセンのほうらしい、と悟って、リヒトはまばたきをくりかえす。いつもの不遜さは影をひそめ、信じられないくらい苦りきった顔である。

彼は言った。

「たしか、何度か会ったことがあるはずなんだよ。親父の会社がらみのパーティーやらで。でも、俺が本宅を出てからは、そういう集まりにも無縁だったし……もう、顔も忘れちまってたな。それが、円城寺家から、俺が今どうなってるかっていう探りがあったんだと、去年の春ごろ。で、親父同士が乗り気になったらしくてな。今度、俺が留学するっていうのを、あちらさん、いち早くどっからか聞き込んできたんだろう。そりゃ、将来有望なんだ、と、どうも勘違いして、で、数ある候補者の中から俺に絞ったってわけだ。娘とどうか、ってな。その話が、ついさっきだよ。そりゃ、こんな顔にもなるわ」

テッセンは、うんざりと頭に手をやった。

「ミサオと同級生だった、ってのも、妙に向こうの両親の気になってたみたいだな。あの日なくした息子のかわりに、なんて思ってたら、面倒だぜ。そう思うと、今から気が重い」

「お察しするよ。また、それは――光栄な、といっていいのかどうかねえ」

「光栄なもんか。あのこまっしゃくれたマセガキだぞ。どこをどうとったらそんなセリフが出るんだよ」

「光栄って？」

リヒトが尋ねると、

「ミサオの妹っていうとね――リヒト、彼女に会ったことないでしょう。不思議だと思わない？」

「というより、今いくつなの。中等部にはいなかったよな、そんな子」

「そう、いないの。というのも、彼女、すごくてね。ある意味、シ

ンよりすごいかな。粒子操作力に関してはからっきしなんだけど、学業全般においては、六歳で初等部の全課程を修了、八歳で中等部卒業資格、十になるときには、もうすでに高等部も出てた。それで、たしか今は、十三になるはずだよ。十六のテッセンと――と、先方が考えても、まあ、おかしくない」

「簡単に言うなよ」

テッセンは、口をへの字にした。ここまで弱っているテッセンは珍しい。

「ふうん。すごい秀才なんだなあ」

「いわゆる、そう。才媛ってやつだよ。で、今は――」

「虫愛ずる姫君」

ぼそりとテッセンが言う。

「虫めずる、……虫が好きなの」

「ちょっと変わってるんだよねえ、彼女」

ミサビが首をひねった。

「今だから言えるけど、それで、ミサオが寄宿舎に入っていた、というのもあるかもね――ああ、カレン、ありがとう」

ロゼワインのグラスを受け取って、ミサビが笑う。彼の笑顔にまったく無反応なのはカレンくらいで、悪魔的でさえある妖艶な笑みを浮かべて「どういたしまして」と下がった。

「それで、だ。親父がな。留学する前に、本人と一度会って来いっていうんだよ。先方も、本式に決めたわけでもないし、うちだって、この先どうなるかは、まだ決めかねてる、というんだ。だからとにかく一度会ってみろ、と。俺だって、ふざけるな、くらいは言ったわけよ。でも、そしたらあの野郎。会ったうえで、双方が、あまりにも気にそまないようなら、白紙に戻してもいい、という――そのくらいの柔軟さはあるわけだ、一応。ふん、だったらはいそうですかって、素直に会うと思ったら大間違いだがよ。そしたらさ」

テッセンは、懐から紙切れをだして、二人の前のテーブルに置いた。何か、字が書かれている。

「兄の最期についてお聞きしたいことがあります、だと。会いにいらっしゃい、だそうだ。その、サヨラ嬢本人から――ここに来る途中、アルリシャがとっつかまえた虫が持っていた、その文を。向こうは、どうやらまんざらでもないのかもしれん」
「電光石火だねえ。ふうん。で？」
「行ってくるよ――一応な。兄の死に様をだしに、人のツラを拝もうなんて根性の女は、死んでもごめんだが」
ミサビとリヒトは顔を見合わせる。テッセンは、心の底から腹をたてているようだった。どん、と杯をテーブルに置いて、険しい顔で、騒ぐ同級生たちをじろりと見た。
いちだんと騒がしくなった座敷。
キョウタローの新妻であるルリが登場したためであった。拍手のなかで嬉しそうなキョウタローを見つつ、「おめでたいこった」とテッセンは肩をすくめた。彼にとっては、慶事もあてつけのように、今日は思えたようだった。
とにかく、これがこの年の春だったのである。

1―4

六月、ミサビとリヒト、ミューは、壮行会を開いてテッセンを送り出した。「手紙をくれよ」と言えば、「さっさと相棒を見つけりゃよかったんだ」と、別れを惜しむというより形式美として「姐さまあ」「ああ、ひゅうがちゃん」「お姉ちゃま、お元気でね」と言い合う彼らの使い魔を横目に毒づかれる。彼らがいれば、かくりよを介して、ただちにメッセージをやりとりできる。たしかに、と思ったが、リヒトは苦笑いを浮かべるばかりだった。

使い魔について、彼は思うところがあった。ミサビから「楽しいよ」、ミューから「寮の閉門後にだって、これでおしゃべりできるのに」といわれても、いまだ、探す気になれないのも、つきつめればそのせいである。

かつて退院したばかりの頃のこと――サツキの相棒であった政宗に、新しい主に、と懇願されたこと――その、黒狐の憔悴した様子が、彼の記憶に強烈だった。どうして自分に、とおそるおそる尋ねると「せめて、あるじの友人だったひとと縁を結ぼうと思ってな」と政宗は告げた。魂と魂で契約を結んだ主従が、突然に引き裂かれる悲しみが、その声にはあふれていた。

「なア、ご友人殿。お受けしてはいただけまいか？」

だけど、とリヒトは答えた。自分はけして故人の代わりにはなれない。「お互い、あとで苦しいだけだよ」――やんわりとお断りすると、彼は一声さびしげに啼いて、鎮守の森へと去っていく――その後姿に、そうか、俺が死んだら、そいつはどうするんだろう、と感じた。

これ以上、他の誰かの人生を狂わせられない。

「いいよ――今のところ、いなくても不自由は感じていないから。しばらく独り身でいる」

テッセンは、ちえ、と言って、頭をかいた。
「しょうがねえなあ。月に一回くらいなら、書く気にもなれるかもな。報告書のコピーでよければ送るけど」
「それはいらない」
それが、最後の言葉になった。総府の人間に連れられて、彼は、マチコたち他の留学生とともに去っていった。夏まで、しばしのお別れである。
リヒトは、彼を四月から悩ませていた胸の内を、ミューにだけ打ち明けて、あとの二人には黙り込んでいた。テッセンもミサビも、ときどき妙に静かになるリヒトを不思議に思っていたが、友人の留学を前にさびしくなっているのだろうと思って、特に気にしなかった。
男の友人だから打ち明けられないことだってある。
その日、風呂からあがって、部屋に戻った彼は、男子寄宿舎の高等部伊棟――中等部のときにいた羽棟より、二畳ぶん広くなった部屋で、鏡に自分の姿を映して、見入っていた。
この目。この体。
今なら、はっきり言える。
世界に一つだけ――ではない。
彼が変化したのは、おそらく、そう、あのときだ。
脳裏に、ある場面がよみがえる。
三年前、京都、夏。
金魚のように赤い帯の端をゆらめかせて、小路を走っていった少女。同じようにたむろする学校の生徒たちのなかで、なぜ、彼らにだけ、それが起こったのか。そのむこうにいたグループだって、同じように、班のみんなであつまっていた。
そして、その、生徒たちのなかに、自分はたしかに――
そして、
「――あのニュース」
鏡の中の顔が険しくなる。

じぶんの魂が、がイチカのハクに定着したというのなら、あるいは？

ふと、ドアが開いて、同室のグエンが入ってきた。帽子を壁のフックにひっかけると、無表情にリヒトを見る。「ただいま」と挨拶をして、屏風で区切られたスペースへ入っていく。

グエンは静かだ――ほとんど、自分のことについては話そうとしない。彼もまた、リヒトがサンプルであることを知っているはずだが、今まで一度も口にしない。

鏡に見入っていたことを見られた気まずさがあったが、思い切って話しかけると、

「グエン、さあ」

答はしばらくしてから返ってきた。

「なに」

衣擦れの音。彼は、授業終了のあと、どこぞへ出かけているようで、毎日帰りが遅い。やがて、浴衣になって姿を現した。

「なにか用か」

「いや。変化したとき、どうだったか、と思って。いやじゃなければ知りたい」

「俺の家は貧乏だった」

唐突に彼は言った。

「養子に出されたが、そこが寺の住職のところだった。その親父殿が、ゲットーに招待されたので、手伝いで、ここの東北の――修行場に行った。それで」

「感染した？」

「そうだ」

うなずいて、グエンはそのまま、クローゼットから写真を出した。促されて見てみると、そこには、小さい頃のグエンが、今の彼のミニチュア版といった坊主頭で写っていた。場所は、どこかの寺院のようだ。平安市にはさまざまな宗派の寺社があるが「曹洞宗」とグエンはつけたした。

「初日だった、と記憶している。これを撮った夜に、担ぎ込まれた、マテ研に」
「あ――そう」
「不思議なもんだな」
「不思議って」
「ここで暮らしてる普通の人間は多い。技術を伝えに来るもの、医療関係、政府関係。そのなかで、制御装置をつけてれば平気だ、と、長年無事に暮らしてるやつもいれば、ここに来た途端に、羽化転生の憂き目を見るものもいる。その差が、不思議」
「そうだね……」
藤原家のタエコなど、その筆頭だろう。彼女はそもそも看護士で、平安大学付属の看護学校に講師として招かれ、病院で指導を行ううちに、藤原緑と知り合って、家政婦として藤原家に雇われた。それで、今もピンピンしている。
大工など、職人たちを筆頭に、無事なものはたしかに多い。
「似たようなこと、ミサビも言ってたな……」
「それで」
「ん？」
「お前が鏡を見てた理由は」
「ああ――」
口ごもっていると、グエンは「そういえば、お前あての手紙が来てた」と、写真をしまいながら言った。
「手紙？」
「総府だな、あの形は」
「ああ。ありがとう。行ってみる」
理由を話さずにすんでほっとした。グエンは追求しなかった。二語文以上話したのは初めてだな、と思いながら、彼が事務室前の在籍板の前に来ると、たしかに、手紙が届いていた。名札の下にあるメイルボックスからはみ出した封書を取りだし、その場で開く。書かれていたのは、なんというタイムリーな、という通知だった。

インヴィテーション、と呼ばれるものである。平安市の住民に与えられた、家族との再会のチャンスだった。毎年、抽選で選ばれたものが、平安市へ家族を招待できる。学生への割り当ては七月から八月の夏季休暇で、そのあいだは、武道も補習授業も免除される。

『

親族招待許可について

抽選の結果、貴殿の親族を、今夏、平安市に招待することを許可します。

希望者は以下の欄に、四親等以内の招待したい親族の氏名を記し、誓約書に署名捺印のうえ、同封の返信用封筒で返送願います。

総府より先方に確認のうえ、おって滞在施設、日時などお知らせいたします。

』

夕食の席で、それを聞いたミサビは「良かったね」と言ってくれた。話題はそこから、異国の地にいるテッセンやマチコの話になる。

食事が終わると「足りないでしょ」とミサビは笑い、リヒトはうなずいた。

「何か、ある？」

「厨房から、野菜屑をもらってね。いいスープができてる。リゾットは？」

「いいねえ」

育ち盛りの食欲が、食物を要求してやまない。夕食のあと、デザ

ートがわりにミサビの手料理のご相伴に預かるのが、ここ半年の習慣だ。共同スペースにある丸テーブルで、チーズを散らした刻み野菜のリゾットを食べていると、下級生や同級生が次々とやってきて、うらやましそうな表情で通り過ぎていく。料理人志望だったミサビの腕は、寮の生徒じゅうに知られているのだ。「今日は二人分しかないから」と、のぞきにくる生徒たちに断りながら、ミサビは、自分のぶんには手をつけず、リヒトの食べっぷりをじっと見ていた。

「それだけ食べてもらえたら、野菜屑も本望だろうねえ」

彼は笑った。

「で、味は？」

「俺は、もっと塩がきいていてもいいな」

「ふむ。なるほど」

メモをとりながら、ミサビは何を思いついたのか、薄い唇を、ふ、と綺麗な半月にする。がつがつとつめこんだあと、リヒトは顔をあげ、

「ミサビは食べないの」

「ああ、これは、僕のじゃないから。――それより、気になることがあってね」

「ん？」

「何か、考え事してるでしょ」

「どうして」

「君はすぐに顔に出るから」

「ええ？　そ、そうかな……」

「ミューとばかり喋ってるから、それも妙だって、最近気になってた。テッセンにも、君については、気をつけるように言われてるし」

「なにそれ。まだ保護者きどり？」

「自分が居ない間に何かあったら、と思ってるんだよ」

「そう……」

潮時かもしれない。

よりによって、インヴィテーションまで来てしまったのだ。それ

に、彼らは夏の間、別荘地でのアルバイトを予定している。家族の逗留場所は、別荘地近くのホテルに決まっていたから、どちらにしろ、ミサビには知られる運命だったのだろう。
　食後のお茶を飲みながら、
「もし、俺と同じ魂をもつものがいたら、そいつも、このハクに馴染んだだろうか。ねえ、ミサビ。ミサビはどう思う」
「――ん？」
　ミサビは怪訝そうな顔をした。
「インヴィテーション。すごく嬉しいけど、迷ってる」
「どうして。ご両親に、会いたくない？」
「会いたいさ、すごく。会いたい――弟にも。でも、俺ね。双子だったんだ」
「双子？――双子、……ってことは、」
「そう。テッセンには、言えなかったけど――もしかしたらね」
　リヒトは、満腹の腹をさすりながら、天井に吊るされたランプの炎を見上げる。
「ここにいるのは、本当は、俺の弟だったかもしれない」
　これが、今年の彼の夏の引き金になるとは、彼らは露ほども知らなかった。

1―5

平安市から時差九時間の場所では、暗い空に、毒々しい色をした雲が広がっていた。もともと、天候の変わりやすい地域として有名である。ねっとりとした夜気につつまれた町の様子は、この時期には珍しくないが、くわえて春の嵐が都市を襲ったため、往来にはすでに人の姿が無い。瓦斯灯から火が消える瞬間を目にして、

「マラルメが描いた夜だな」

ふと、昔読んだ詩の一節を思い出し、その男は、窓の外を見て呟いた。もうひとりは「あの雲がもしもその詩の一遍なら」と応じた。

「友よ、ここにいるわれわれは何になる？」

「決まってる。偽りの薔薇色の理想だよ」

「そう、だろうか。――残念ながら、薔薇ならば、しかもそれが偽りとなれば、何色もの同類を生むものだよ。われわれが一つではないように、理想もまた一つではないのだ」

窓の外は雷鳴だった。風は、狼の吐息となって煉瓦の壁を揺さぶっている。うずまく風の模様を木々のざわめく形によって想像しながら、ロンディニウム・ゲットー――イギリスはロンドンにある大西洋連合第二のゲットー――の市長、リチャード・ブラックは「たしかに」と重々しく言った。相手は、イース・ゲットーの魔的研究所イース支部所長、ジャン・ラロンドである。二人は友人同士であったが、多くの権力者の使う“友人”がそうであるように、それは彼らにとって、子どものように純粋な意味ではない。

「その話は本当か？」

まわり道を経て、ようやく本題へ入り込む。

「らしいよ。最近、うちに来たものの話によるとね」

「この間の発表では、まだまだ――だったのにか」
「ダミーだった、と見るべきだろうな」
彼らの口調は、ともすると、独白のようにも受け取れる。向かい合っていながら、けして視線を合わせようとしない――というのも、ラロンドのほうは、政治家を馬鹿にしきっているし、ブラックのほうは、研究者など国の飾りだと思っている。勲章が多いほど自国のレベルの高さを誇示するのに役立つ、というわけだ。しかしとにかく、イース・ゲットーとロンディニウム・ゲットーは、同じアトランティック・ユニオンに共存する、いわば兄弟なのだし、マテ研支部同士も、現在はほとんど、二つで一つといっていいほど技術と施設が提携している。
「蓬莱か。まさか、あそこが一歩ぬきんでるとは思いもしなかったね。生物学の分野においてはロンディニウムの右に出るものはいないし、物理学においては、イースの研究者たちが最高だと思っていた」
「最近は、どこも馬鹿にできないよ。われわれの独壇場は終わった。第一――魂魄、幽界といったものを説明するのには、東洋思想のほうがすぐれていたからね。生物地球学、というものを打ち出したのは、人種でフルコースができるほどの、自称、自由の国――だったし」
「呪術、錬金術、医術、音楽。そして虚構。それらが、歴史上ついにひとつになるときは近い、とな」
「この、スチュアート・チャンという奴は、間違いなく、現世で子供のころ、夢想家だったに違いないよ。ゲーム好きのオタクだった。賭けてもいい」
「君も人の事は言えないだろう」
「お互いさまだ」
陰険な笑みが唇から漏れていたが、これも、お互い、自分だけは高尚な笑みを浮かべていると思い込んでいる。
それはそうとして、問題は、スチュアート・チャン――蓬莱の一

人の科学者だった。引き抜くにも蓬莱市が離さず、止めても無駄なタイプだ、というのは、彼らが手にした報告書からも知れる。
「やっかいだねえ」
「ああ……」
「彼をどうにかすれば、チームは解散するかね？」
「ヒルガーが彼ごと売ってくれなかったのは痛い。何しろ、特許の問題がある。実現には、絶対に彼をこちらに引き入れることが必要だった。だからといって、もう、消すことも無理だ。ここまで抜きん出てしまっている――天才、というものはね。望むと望まざるに関わらず、彼もそれこそ、サンプルに匹敵するよ。あの、フェアシュミット――最初に粒子を発見したものや――ヴェネストロム、若さと生をすべてマテキに捧げて死んだものたちと同じ。まったく……」
「先に出せる見込みはない、というわけか？」
「ゼロとはいわないよ。アプローチの仕方は、いくつもある。もっとも有力なものが欠けているというだけで」
「そうか。しかし、それで地位を確立しても、やはりどうしても、頭を下げて売ってもらわなければならないわけだ。それには違いないだろう？」
「そう……、ふっかけられるに違いないな」
「だが、入り込める余地はある」
　市長は、閃光と雷鳴のあいだに、その暗い緑色の瞳に希望の光を宿して、ラロンドを見た。ラロンドは、内心の疑問を隠して、無表情に首をかしげた。市長は低く笑い、手にした資料を机に投げ置いた。
「よくよく調べたところ、彼は、最後の実験に必要な人材を探している。それが、こちらの人間なら、たとえばどうかね」
「こちらの人間？」
「うまくいけば、裁判に持ち込める」
「裁判」

ラロンドは驚嘆した。自分には考えもつかなかった案である。法廷での決着など、この件に関しては念頭に置かなかった。彼もまた、最先端の技術は綺麗なままで世界に公開したい、と思っている人物だ。何にもまして、彼の気持ちをこの方法に向けさせなかった理由は、彼にも残っている科学者の誇りだ。これだけは、ただひとつの傷も許せない。きれいなままで世に出したい。これは、そういう種類の夢だった。あっさりと打ち壊してくれた市長に鼻白んでいると、市長は、おかまいなしに「どうかね」と、高圧的な態度で迫る。

「よく考えたまえ。これしかないのではないかね」

「そう、ですねえ――」

たしかに、もっとも有効そうな手ではある。灰色の決着、といわれても、後世に名が残せるのならいいのではないか、と思われた。

「では、人選をしませんと」

「それはもうすんでいる。すでに、現地に向かわせた」

「何ですって。誰ですか」

「ミシェル・マクミラン――ハイラム・モリズロウ、それから、エレナ・ウェールズ。年齢は、十八、十七、十五。あちらが留学生をご所望らしいのでね。うちのとっておきを行かせた。ミシェルは、君のところとの二重国籍だから、その子が選ばれれば僥倖。イース市長にも話は通してあるからね」

「そうですか。では……」

「われわれの、最初の魔法使いに乾杯といこう」

市長は、机の上のベルを鳴らす。すぐに、使用人が、バケツに冷えたシャンパンを運んでくる。黄金にプラチナの泡を散らす液体がグラスに注がれる。ふせぎようのない心中の不協和音を響かせたまま、二人は静かに乾杯した。

「ところで、アフリカはどうなっているかね。あそこはまた、思いきった行為に出た。君の意見を聞きたいね」

「アピールでしょうね」

ラロンドはゆっくりと言った。

「われわれは歓迎しましたよ。五人は尊い犠牲だが、あれで、間違いなく、ゲットーというものが、ちゃんとご近所に存在する、と世界にアピールできましたから。まあ――クサマは大喜びしたでしょうな」
「ああ、それはそうだな。まあ、うちも移行は済んだからね――対岸の出来事だと笑っていられるのが嬉しいね。平安は思い切ったことをやると思ったがね。まあ、国土の問題もあるからねえ――それを思うと、平安ほど、魔法を切望しているゲットーはないだろうねえ」
「日本、か。相変わらずあの国もよくわかりませんからねえ」
「まあいいさ。それより、もしも魔法というものが現実になった場合、法整備をどうするか、というところがまた、厄介だね」
「で、それが済んだら、いよいよ戦争ですか。しかし、例のは……」
「たいしたことはないに決まっている」
「そうですかねえ」
「そうだ。君は心配性すぎるよ」
「はあ、そういわれると、言葉もないですな」
くく、と二人は笑った。
両方とも、まったく愛着を覚えない顔を見合わせていたので、雷光に混じって、別の光が窓を横切ったのに、気付かなかった。

2　留学生

一方、蓬莱市。

とはいえ、簡単にはいかないものである――と、スチュアート・チャンは、自分の思考に字幕をつけながら、構内を歩いていた。彼は、週に数回、大学の講義を聴きに行くことを息抜きとしていて、それを理由に、大学と隣接する蓬莱ジュニアハイスクール、ハイスクールのなかも自由にうろつく権利を得ていたが、彼の欲しい人材はというと、なかなか簡単には見つからないのだった。

学生たちが走り回っている。懐かしい光景に目を細めながら、彼は、手にしたジュースの紙コップに口をつける。

「他校の校章、他校の校章、他校の校章――」

留学生はさまざまいたが、いまだに、意中の人物とはぶつからず。しかも、その人物と出会ったとしても、厳しい条件をクリアしてくれるかどうかはわからない。

彼が掲げる条件は五つある。ひとつ、留学生であること。ふたつ、金で言うことを聞くこと。みっつ、出身ゲットーのナショナリズムに染まりきっていないこと。よっつ、強い、ということに重きを置いて疑問を持たないこと。いつつ、口がとんでもなく固いこと。

とりわけ、最後の条件は重要である。友人などに不用意にもらされては困るし、国元への報告書に書かれても困る。見る目が厳しくなるのは当然だった。

四月、五月、六月と日が経つにつれて、もうそろそろ決めなくては、という時期にきていた。小麗が、これがどうかと持ちかけてきた留学生が数人いる。とりあえずキープしておいて、彼はしかし、自分でも協力者を見つけるのだ、と意気込んでいた。なにしろ、自分の人生がかかっているのである。彼自身も忙しいが、ここで手を

抜いては絶対にいけない気がする。しかし、
――今日も駄目か。
散歩のタイムリミットが迫っていた。
『燃えよドラゴン』のテーマを口笛で吹きつつ、何気なく彼が、駐輪場へ向かうコーナーを回ったところだった。
ふと、彼の視界に、道着姿の一団が映る。オレンジをベースにした生地に、蓬莱、と白い縫い取りがされたユニフォーム。そのなかにひとつだけ、『平安祖界』の四文字を背中にしょった、白い道着姿がいた。平安ねえ、友好都市ではあるけどねえ、とそちらを見たスチュアートは、おやと思った。
――なかなか、頑丈そうな体をしている。
高等部の一年生、というのだけは分かった。口が堅そうだ、というのが、遠目に見たその少年――というには、ごつごつしすぎているし、老け顔だが――の次の印象である。彼はその一団をやり過ごしたあと、あとからやってきた同じ道着姿の一人をつかまえる。
「ちょっと」
自分がマテ研の人間であることをアピールしつつ「君たちのところに、ハイスクール一年生の、平安市からの留学生っている」
「ああ」と相手はうなずいた。
「テッセンのことでしょうか」
「テッセン？」
「平安市からの留学生ですよ。今月初めから、武術を学びに来てるんです。テコンドーは一週間で初段までいったみたいですが、うちじゃあそうはいきませんから、もんでやるつもりです」
に、っと笑って、少年は胸を張った。少林寺、とそこには書かれている。
「あ、そう。ありがとう」
「どういたしまして」
一礼すると、少年は、あっというまに走り去っていってしまった。テッセン、テッセン、とその不思議な響きを口の中で繰り返しなが

ら、スチュアートは大学の事務室に引き返した。
「小麗！　シャーオーリーイー！」
「わっ、びっくりした。なあに、老師。まだ何か？」
小麗は、事務机の前でひっくりかえりそうになりながら、スチュアートに顔をむけた。事務室と廊下を隔てる窓ガラスを、スチュアートが叩くと、おっくうそうに立ち上がり、埃を払うしぐさで、両手を体の前で叩きながらやってくる。お菓子をつまみぐいしているところだったな、と彼は思ったが、小言はさておき、目当ての人物についてである。事務室の隅にある応接スペースに入り込むと、ソファに座る間も惜しく、スチュアートは、先ほど見かけた留学生について話した。
「テッセン？　テッセンテッセン、T――ちょっと待ってね」
吐き出されたデータを持って小麗がやってくると、スチュアートはその紙をむしりとるようにして、一秒で目を通す。
「平安市は、はたちまで姓を非公開にしているところがやっかいだな。しかし、いいところのおぼっちゃんには見えなかった。おそらく孤児だろう。成績は――うーむ、文武不両道もいいところだな」
「え、老師。この子にするの？」
「ちょっといいなと思ってね。体力馬鹿そうだったし。とにかく、声をかけてみようと思う」
「え、ぜんぜんかわいくないよ、この子」
「なんで女ときたら、見た目ですべてを決めようとするんだ」
「綺麗なほうがいいに決まっているじゃない。ねえ、こっちのほうがいいんじゃない？」
「一人というわけにはいかないから、君のご推薦の四人だか五人のなかからも、何人か選ばせてもらいますよ。とにかく――」
スチュアートの目が眼鏡の奥で光る。
「時間が惜しい。この生徒の詳しいデータを、できる限りとってくれるかい。蓬莱市での住所と連絡先と」
「イエスボース」

小麗は敬礼すると、言われたことをメモしはじめる。ふと、スチュアートは、履歴の年号に目を通しながら、胸騒ぎを感じた。それが何か気付いたのは、

「二年前、二年前――平安人。学生――あっ」

あの、遭難事件。

新聞記事が脳内を横切って、急ブレーキでとまる。

驚きを飲み込んで、スチュアートは、短い髪を細い指でかきまわした。

「もしかしたら……？」

テッセンというあの少年が、サンプルという可能性はないか？

いや、もしそうなら、平安が留学生にはしない？

しかし、あの事故でかなり死んだから――逆のパターン、つまり、留学しない生徒こそサンプルである、と思わせないために、あえて放出してみる、というのもあるかもしれない――

彼は、サンプルに対しての予備知識があった。平安にそれがあるらしいということも知っている。二年前の事故の真相が、それがらみでかもしれない、ということも。

もしもテッセンという少年がサンプルならば――そうでなくてもかまいはしないのだが――うってつけだ。

武者震いに、のどの奥からうめき声がもれる。

ふと気付くと、何も知らない小麗が、不気味そうに彼を見つめていた。

「やっとツキがまわってきたぞお」

年齢に似合わない俊敏さで、五百メートル先のマテキ研究所へと走っていくスチュアートを見送った小麗は、玄関でやれやれと肩をすくめた。

「つまんないわあ。美少年のほうがいいのに」

＊

さて、この一幕をまったく知らない留学生であるテッセンは、一キロ先の道場で寒気を感じていた。くしゃみまではしなかったが、道着から出た腕をこすって「蓬莱は空気が乾燥して、春なのに冷えるなあ」と、つたない英語でクラスメイトにもらす。それを聞いて、ジム・リーという、褐色の肌に亜麻色の髪を持つ、大柄な少年は笑った。留学中、彼を担当しているバディでもある。日常会話程度の日本語と広東語、英語を解した。

二人一組で柔軟体操をしながら、

「そりゃあニホンのほうが異常なんだよ。夏の京都に滞在経験のあるオレのひいひいばあちゃんが、オレがまだ小さいころ、思い出を話してくれたよ。印象に残っているのは、カビ！――だそうだ。赤、黒、黄色、緑、と。ニホンじゃ、カビがアニメーションになるほどなんだろう？」

母音を強調した英語で話してくれる。

「ふうん」

相槌をもらして、テッセンは、続けて友人がお手本として演じる型をまねした。

「カビとバイキンか。どっちも、まあ、たちが悪いところは一緒だもんな。たしかに、俺もごめんこうむるね」

「ごちゃごちゃうるさいぞ！　留学生！」

「イエース、ソーリーィ」

師範の怒声に肩をすくめつつ、リーと笑いあったテッセンだが、もっとたちの悪いものが自分に近づいているとは、このときの彼は、思いもしていなかった。

2―2

平安学園高等部にも、多数の留学生が来ている。特筆すべきは一年生で、この年は、平安出身の生徒が特に少なかったため、クラスの過半数を留学生が占めていた。原因はもちろん、一年半前の事故によるものだ。さらにつけくわえると、彼らのクラスは、上と下の学年が2つの組にわけられているのと違い、1つの組に、学年の全員がそろっていた。

また、この年は、一部のものにとっては、名前だけ知ってはいた生徒との初対面となった。中学のあいだ留学していた生徒が、帰国してきたためである。リョウヤとツキヨ、という二人の姉と弟か、兄と妹か――。年が同じで、まったく似ていない以上、やはり、彼らも義理のきょうだいであるのだが、その二人に、ちゃんと話しかけられたのは、リヒトは、その日がはじめてだった。

「ちょっといいかな」

リョウヤがまずやってきた。前衛類？の生徒らしく、はりつめた大きな体をしている。

「あの子のことなんだけど」

「あの子――ああ、」

リョウヤが一瞬目配せをした先に、光る銀色を見つけて、リヒトは目をすがめる。

「ミューね。……なに」

「連中がね――お前とあの子の関係を気にしている。どうかな」

さらに視線を送った先に、留学生たちがいた。癖のある金や亜麻色や赤い髪の彼らは、リョウヤと見るとにっこりと笑って手をあげた。リョウヤが手を振りかえす。そこへ、ツキヨがやってきた。

「女子からは、君に用事はないみたいだけどね」

二人は、そろってリヒトのわきに並ぶと、左右対称に分けた前髪を揺らして首をかしげた。

「それはまあ、そうだろうね」
リョウヤ自身がギンを気にしているわけではない、ということがわかって、多少、リヒトはほっとする。また、彼は、自分が目をひく容姿でも、これという特技の持ち主でもないことをじゅうぶん理解していた。
しかし、ああまた例のか、と思いながら黙ってあごに手を当てていると、
「で？　あの子とは、どういう？」
控えめに首をかしげたツキヨは、女子たちからの密命を帯びているな、とリヒトは見て取った。
「何度も言うとおり、友達だけどね」
彼も首をかしげながら言うと、
「本当？　あんなに一緒にいるのに。選択の授業も一緒、休み時間も一緒、帰るのも一緒。気になる証言がぞくぞくなのだけれどもね」
「まあ、仲はいいかな。ミサビやテッセンやシルルと同じだよ」
「本当？」
リョウヤが背後をふりむいて何かを言った。すると、留学生――ジョヴァンニ、アーネスト、ヨンニの三人がゆっくりと近づいてくる。リョウヤの通訳をきくと、ジョヴァンニが小さく口笛を吹いた。彼は、空いていたリヒトの前の席に座ると、振り向きざまに顔を近づけて「ガールフレンドじゃない？」と首をかしげた。空と宇宙の境目の青い瞳が、好奇心をたたえている。
「本当？」
「本当だけど」
「じゃあ、いいのかな」
「何が」
「声をかけても、ってこと」
「かけたかったら、かけたらいい。自由だよ」
「そう？」
「そうさ」

彼女が相手にするかは別だけど、と小さく呟いたが、ジョヴァンニには聴こえなかったようだ。彼は、金髪を指にからませて離すしぐさを一度すると、す、と視線をすべらせる。そこでは、ミューが、文庫本を読んでいた。

「あんな子は、よそのゲットーでもお目にかかったことがない。美しい、美しい――としか言いようがない。それに、頭もいいし、いいところのお嬢さんだって？　それと、天涯孤独の君が特に親しい、と――ミサビではなく、君と、と。どうにも、見た目も中身もつりあいが取れないのが、ひっかかるんだけどね」

「そのままひっかかってれば？」

「面白いひとだね、君は」

「そりゃどうも。褒め言葉だと受け取るよ。しかし、だよ……ジョヴァンニ。彼女は君の思い通りになる子じゃない、ということだけは言っておく。怖いお兄さんが後ろについているしね」

「怖いオニイサン。それが君？」

だったらいいとは思う、とは、リヒトは言わなかった。

「――見ればきっと、わかる」

それはもちろん、シンのことである。不思議そうに首をかしげたジョヴァンニをよそ目に、リヒトは軽くため息をついた。

誰も知らないが、リヒトはこの春、留学前のシンに呼び出され、忠告されていた。内容は、もちろん、ミューについてだ。退院後、徐々に接近しつつあった二人を、この、義理の兄が快く思っていない、ということをリヒトは感じていたが、あらためて思い知ったかたちである。開口一番言われた言葉は「馬鹿な真似はよしてくれよ」であった。松岡邸の広い一室で、荷造りを待つ小物や刀が、寝台に並べられていた。

「あの子は、サンプルなぞよりもっと、この先、重くなる存在だ」

凄みを増した美貌の男が、本気の声で告げたので、リヒトは黙ってうなずかざるをえなかった。彼はなぜか、病院で、リヒトがギンにした約束のことを知っていた。

「あれはまだ教育の途中だ。精神面のもろさが目立つので、そこをうまく君がなんとかして、一人前にしてくれたら、とは思う。だが、やりすぎは困る。下手に未来に希望を持たせるのも、あやまちを犯すこともだ。なにしろ、あの容姿だからね。僕ら変化したものは、人が生身に備えているような質感を捨てざるをえないし、人工のハクに入っている以上、ある程度の肉体の汚れや、個性的な醜さなどと無縁になる。救いようのない不細工、というのがここにいないということは、君も気付いているだろう」

「はあ、まあ……」

「僕にしても、自慢ではなく、人並み以上の容姿であるといえるだろう。しかし、あれは、そんなものの規格からも外れている。いつだったか、さる高官は、あれを、この世のセラフィムと称したよ。だから僕は、とても心配しているのだ」

にらまれて、リヒトは背に汗をかいた。しかし、

「そんなに心配なら、留学をおやめになっては？」

精一杯胸をはって嫌味を言うと、

「悪いが、できの悪い義理の妹のために、自分の将来を投げられないのでね」

彼は肩をすくめた。

「じゃあ、一つだけ教えてください。貴方が必要とする、彼女の素質、とは何ですか」

その瞬間、シンの表情が固まった。すぐに元通りになったが、粒子をすさまじい速さで動かしながら“見る”ことに全力を注いぐと――彼の、義妹にかけるなみなみならない思いが伝わってきた。

「あれは兵器になりかねない」

シンは低く言った。

「兵器？」

「いろいろなものを壊す。取り扱いに、細心の注意が必要な類の、人間であり、魂であり、力だ。君には、そんな心配は無い。ただの駒だからね、世界にとっては。しかし、ミューは違う――あれは、

本当に、突然変異体（ミュータント）のようなものでね」
絶対に傷つけたり失ったりしてはいけない――とシンは続けて言い、
「だが、君が、あくまであれにまとわりつくトラブルの避雷針になる、というのなら、幼馴染として仲良くするのも大目にみよう」
最後に、譲歩した。
要するに、ボディガードとしてなら、仲良くしてもかまわない、ということだ。
――ずいぶんまだるっこしい言い方をする。これが金持ちのやりかたかあ。
貧乏人根性を覚えたリヒトだったが、本人いわく「自分を守ってくれた」「とても尊敬できる」と言わしめた幼馴染の兄である。誓約書までは書かないにしても、「けして馬鹿なことはしません」と約束しなければならなかった。それに、今、この状況になってみると、自分があやまちを犯すかどうかはさておき、彼女が並外れて美しいから、という部分は、やはり肝に銘じておく必要があるように感じる。
ギンの周囲は、まったく、トラブルの火種で満ちていた。
留学生でなくとも、彼女を見つめる男たちの視線の多く熱いことといったら、毎日、呆れるばかりだった。
シンが留学してからというもの、ほとんど毎日、下駄箱の前で固まるギンの途方に暮れた顔。頻繁に送られてくる、差出人不明の花や菓子。通り過ぎるものはすべて、男だけでなく同性でも彼女を振り向いた。きけば、案の定、同性からも言い寄られたことがあるという。花街の近くでは、これが、熱烈なスカウトに変わる。兄不在の最初の一週間は、授業中以外、一秒たりとも目を離しておけなかった。
授業終了の鐘が鳴る。ジョヴァンニより先に立ち上がり、リヒトはミューに「行こう」と声をかけた。
「それとも――ミュー、彼らが話があるみたいだけど」

ジョヴァンニたちをさすと、少女は顔をしかめた。周囲にいるすべてのものに、あからさまに「いやだ」というようなものだった。すばやく文庫本をしまうと、立ち上がって身支度を整える。彼女は武道芸術のどの部活にも入っていないので、放課後はフリーだ。いつも、リヒトの部活についてくるか、ミサビが今年立ち上げた、食餌研究部という、要するに調理部だが、そちらで料理や、留学する前はマチコに裁縫を習っていた。

「お先に失礼いたします。ごきげんよう」

形だけは穏やかに、ミューはお辞儀をする。やれやれ、と、リヒトも、鞄を持って外に出た。

「ちっ」

リョウヤは、聞こえてきた舌打ちに、ぎょっとしてジョヴァンニを見た。嫉妬、というには強すぎる炎が、彼らの淡い瞳に輝いていた。

＊

弓道部の顧問であるシュウは、リヒトから留学生たちの話を聞くと、おかしそうに笑った。

「笑いごとじゃないですよ。毎日、毎日……それに、あの毛唐の連中まで加わるなんて、思ってもみませんでした」

「毛唐！　言いますねえ、君も。立派に、毛唐の国の血をひいているのに」

「何代前の話ですか。俺は最初から日本国籍でした」

毛唐、とは、外国人をさす差別用語である。しかし、現世ではその意味が失われて久しく、ここでは、軽い冗談で使われる。実戦用の弓と和弓を使い分けながら、リヒトは、手にはめたカケの感触を確かめる。

背後では、文机にむかって、ミューが暇そうにノートを広げてい

る。彼が部活をしているあいだ、ここで宿題をするのが日課なのだ。
「力が入ってるよ。違う――力でひかない。震えるのはそのせいだ。弓をひくのに力はいらない。骨だ。骨でひく」
「はい」
「スエタケ！　指導を」
「はい」
シュウは、高等部でも相変わらずの昼行灯ぶりを発揮していたが、今年から、正式にソジ粒子操作実践応用の講師として採用されたので、多少、顔つきが厳しくなっていた。カエデ亡き後、リヒトのよき相談相手でもある。いつか市長から言われたシュウの「含むところ」が気にならないではなかったが、今のところ、全面的に信頼して、なんでも話すようになっていた。
休憩の合間に、彼は「そういえば、テッセンから聞いたんですけど」と、ふと、気になっていたことを口にする。
「最近、現世とゲットーは危ないんでしょうか？」
「ああ。あの発表ね」
彼が呟くと、そばで竹筒に口をつけていたスエタケも顔をあげた。
「重大発表、でしたっけ。もうすぐですよね」
「うん。人間側の新兵器らしいねえ」
彼は時計を見た。このところ、世間の話題はそれでもちきりだった。ここ二、三日のいつか、といわれていて、まだ速報は入ってこない。準軍属である教師たちの焦燥に、生徒も浮かれ気味である。ジョヴァンニたちの、突然のギンへのアプローチも、ある意味では、浮き足立った雰囲気の反動、と思えなくもなかった。
ゲットーじゅうが、六月半ばのこの時期――雨と雲が空を埋める前の、繊細な一週間に怯えるようだった。
リヒト自身も、そわそわしている。しかし、江戸や明治や大正や昭和の町並みのなかで、外の現実世界とかけ離れた生活をしているので、人間側の兵器といっても、どこか遠い場所のことのように聞こえる。身に迫ってこないのだ。

「兵器って――」
「どんなふうでしょう？」
「中露（中国とロシア）の共同開発だってね。それだけでじゅうぶん、穏やかじゃない。あちらさん、今回はなかなか強気に出て、歴史を変える武力、とか打ち上げていただけども――」
そのとき、鐘が鳴った。時間外の鐘で、連続して鳴り響くのが、時報とは違う。いよいよかな、と、いつも、のんきらしいシュウは、やはりのんびりと呟く。彼もまた、腑におちない顔をしていたが、教師らしく顔をひきしめて道場の中に入ると、大きなラジオを持ち出してきた。
はっきりいって、彼らはたかをくくっていた。
先のアフリカでの衝突も、人間側は、結局何もできなかったのである。
ところが、その日は違った。

2―3

官界に広がった衝撃を、何と表現していいか、とっさには彼女にはわからなかった。彼女――藤原菫は、新聞社に勤め、いつもはマテ研、ときどき政府の両方に張り付いている、うら若い美人（自分びいきを五割増しにすれば、そう呼べなくもないと思う）記者である。年は二十歳過ぎ、ばっさり首筋で切りそろえられた男勝りの断髪と、生々しい皮膚の様子が、人間である、ということを現している。

その時刻、菫は、ゲットーには十数台しかないといわれるテレビモニターに釘付けになりながら、ざわめく同僚たちの緊張と、つばを飲み込む音を、遠くに聞いていた。

政府内の記者クラブである。他の新聞社の部屋からも、あわただしい動きが伝わってきた。彼女のまわりでも、足の速い同僚の数人が、ばたばたと羽織やジャケットに袖を通し、大きなボストンバッグを抱えて飛び出していく。彼女は電話番を任されていたので、その場を動くこともできず、ただじっとモニターに見入った。

「どこが渡した」

深刻な表情で腕組みし、呟いたのは、上司である。いつもは温厚な――変化した人間らしく、きめ細かな首の肌を見せた男だが、その横顔からは、怒りと苦渋が感じられた。

「なんだこれは」

彼がそういうのも無理はなかった。

公開されたテスト画像――

「ペトルーシュカ」

「ペトルーシュカ？」

菫は首をかしげる。

「愛称だそうだ」

吐き捨てるように、ロシア語に堪能な男が答えた。聞き覚えのある名前である。すぐに菫は、いつか父親に連れられて行った演奏会のことを思い出した。

ストラヴィンスキーのバレエ音楽。複雑なリズムと旋律にのせて、人形の目覚めと恋と破滅が繰り広げられる。ペトルーシュカは、人間の情熱と苦悩を持つ、主人公の、魔法をかけられた操り人形の名前である。

「操り人形……」

しかし、ペトルーシュカ、と呼ばれ、目の前の画面で縦横無尽に動き回るそれは、夢や叙情のかけらもなかった。

二メートル近い体幹に、太い手足が四本。その体には無数の銃眼がついていた。そこから飛び出した弾丸が、五百メートル先、一センチ四方の的を、正確に銃で打ち抜いた。さらに、その四本の手足にはそれぞれ刃物や銃を持ち、命令に応じて、人間の標本の首や急所を、次々に切り、突き、えぐる。滑らかで無駄の無い動きからも、最新型ＡＩを搭載している、という言葉に間違いはないだろう。しかし、その、ベースとなっているのはまさしく――

「俺たちの、ハクだ」

上司は、椅子に座り込んでモニターを見つめ続ける。

「非人道的ってなあ、このことを言うんだよ！」

英語のナレーションを聞き取って、菫も、全身の力がぬけた。なんとか椅子の上に着地したものの、体がふわふわと浮き上がるような感覚は消えない。

『ペトルーシュカ』は、すべての武器を体内に収納すると、くるりと振り向いて、その顔や体を視聴者に披露した。均整の取れた、生々しく艶のある体は、すさまじい熱を発するのか、汗をかいているようにも見える。そのせいで余計にリアルな皮膚は、柔らかそうに見えたが、先ほどの映像で、千五百度の熱にも、氷点下にも、戦車で轢かれても無傷である、という頑丈さは周知だった。その後、映像は途切れる。しばらくして画面に現れたペトルーシュカには、

豪華な衣装を着せられて、椅子におとなしく座っていた。服を着ると、本当に、羽化転生した人々の外見に似ていた。さらに、ペトルーシュカには仲間もいた。チャイナドレスをまとった、アジア人の容貌をした少女と、褐色の肌に、毛皮の外套の、筋骨隆々たる大男だ。

「こういうのがどんどん増えるんだろうな」

「大西洋連合も、ほかも、追従しないわけがない。次は何だろう。ピノキオか？　ル・プペ（お人形）か？」

「人間様は、ついに、自分たち自身で戦うのをやめるつもりだな。映画みたいだなあ。機械同士の戦争、か」

「軍隊までオートメイションとなると、金のない貧困層の子弟の就職先がなくなるなあ。なにしろ、軍隊ってやつは、兵隊になれば衣食住がただだ。かえって犯罪が増えそうだな」

「――蓬莱のマテ研から、実験用のハクが紛失したって事件があったな」

　ぽつりと誰かが言った。それぞれ喋っていたひとびとは、いっせいに顔を見合わせる。

「こいつに流れてたってことか？」

「――かもしれん。医療用に、部品だけは現世へ提供する場合があるが――まるまる、一体は渡せないはずだ。それを、とうとう、やりやがった。アフリカの件があったから、今、公開したんだろう。たいした牽制だよ。この性能は、明らかに、対人用じゃないからな。対、俺たちだよ。実験ではいかにもに見せているが、こいつらにもし、粒子を操作する力でも備わっていてみろ」

「あ、とうとう言ったな。せっかく考えないようにしてたのに」

「ジャーナリストのくせに目を背けるなよ」

「うるさい、仕方ないだろ。俺は悲しいよ――本当に。馬鹿みたいだ……こいつらと、俺たちが戦う日がくるなんて、考えたくもないよ」

「世界が原始的になっていく気がするな」

静かに言ったのは、最年長の上司だった。
「原始的……ですか？」
菫の斜め前に座る、ロシア語の男が首をかしげる。菫も不思議だった。機械人形の兵士が戦い、生身の人間の血が一滴も流れなくなる、というのが、どこか未来的に思えたのだ。しかし、上司は首を振った。
「ミサイルも戦車も核も、もう意味をなさないとわかったんだろう。武器、というものの限界が、とうとう訪れたんだ。とすると、最後は初心に帰るしかない。肉体と肉体、一対一の戦い。これは、そうだよ。俺たちと、フェアにやろうぜ、って、あいつらは言ってるんだ。同じ体で、同じ能力を駆使して――いや、同じ、かどうかはまだわからんが」
「たちの悪い冗談ですぜ。ゲットーに渡されている兵器といったら、昔っからの刀や、古臭い型落ちの銃や、そんなもんだけだ。核だって戦車だって持ってない。何にもしてないんだ。なのに、なんで、こんなもの作って見せびらかされなきゃならん！　こいつらともし戦になったら、戦わされる連中はなんて思う？　俺たち自身と戦うのかって思うぜ……こいつらに、銃や刀を向けられるか？　うちにだって、有事のとき徴収されるやつだっているのに」
彼の怒りはもっともだった。
画面に映っていたのは、彼らと生き写しの――まるで、ドッペルゲンガー。
鏡の中の自分と戦えるか？
菫は唇を噛んだ。肩身が狭すぎて頬が熱くなる。
「やりきれんだろうな。もうすでに、やる気を殺ぐって部分では、大成功だよ。これに街を包囲されたら、戦う前から絶望的な気分になること、間違いなしだ」
菫はそこでうつむいてしまった。人間であることが申し訳なくなる――すると、ふと、隣の席の同僚が「お前、今日は歩いて帰るなよ。車呼んでもらえ」と、心配げに囁いた。

「え……？」
「念のためだよ。平安の人間にゃあ、間違っても変な気起こすやつなんかいないだろうが、万一ってことがある。もしくは――たしか、弟がいたろう。多少無理を言ってでも、迎えに来てもらえ」
そんなことまで考えなくちゃならないのか、と菫は思ったが、つくづく甘すぎる自分に愕然としながら、なんとか首を振った。
「弟は――今、留学しておりまして」
「そうか。そうだったな」
同僚は、難しい顔でうなずく。
あの子は大丈夫かしら――ふと、菫の脳裏には、弟の姿がよぎった。胎児のときに変化する、という稀有な状態で生まれてきた彼女の末弟は、今、たった一人で、蓬莱ゲットーにいる。そうでなくても、彼は父親と衝突して、連絡が途絶えがちだ。もし何かあったら、亡くなった母に申し訳がたたない、と、菫は、次々に鳴りはじめた電話に応対しながら、
「キャップ、さっきの話――蓬莱から盗まれたハクが、ってやつですけど――もし本当だったら、蓬莱やよそでは、どう受け止めるでしょうか。ハクを渡したのが、もし、そこだと本当にわかったら――問題になりますよね」
菫が、上司の席へと顔をむけると、
「今ごろ、あっちの公安が出てるんじゃないかな。ゲットー同士で制裁は、ないと思うがなあ」
と、上司は、窓をあけて、使い魔を迎え入れながら言った。
「市長の記者会見、１９００から」
「他ゲットーへのパス申請を――」
「往来が途絶えたりしないでしょうか」
騒音の合間に、上司に尋ねる。
「どうだろう」
鳥たちの足からメモを外すのに忙しい上司の頭の中は、すでに、記事のことで埋まっているようだった。

応対に口を動かす菫は、ふと、窓から入り込んできたモンシロチョウの群れが、彼女の机の上にいっせいに止まったのに目を見開く。彼らは、羽から落ちた燐粉を、細い足でかき乱した。

「あ――ありがとう……」

オムカエニマイリマス、という文字列が読み取れた。菫は、机のひきだしから角砂糖を置き、湯飲み茶碗の水を落とす。ほろりと崩れた砂糖水に蝶は群がり、しばらくすると、いっせいに飛び立って消えた。

「サヨラちゃん」

＊

一方、蓬莱市。その日は、彼がこの地に留学して、ちょうど二週間めにあたる日だった。テッセンは、彼には珍しく、やや疲れを感じながら、中庭の道を急いでいた。すでに夕暮れで、次が、最後のレッスンだった。

とちゅう、妙なサイレンが鳴り響いたのが気にはなったものの、少林寺のレッスンはそのまま続行された。そのため、彼はまだ、ゲットーじゅうが受けた衝撃を知らない。

「疲れるもんだな」

カリキュラムは、おおよそ平安学園と変わらなかったが、彼を戸惑わせたのは、やはり、風習の違いであった。それはまるで、はじめて平安学園に来たリヒトのような気分である。

とはいえ、それは、馴染めないかもしれないという恐れではない。あまりにもフランクすぎる、蓬莱市の学生たちの態度が、この、ある意味では平安市の純粋培養――江戸から続く旧日本の気風を大いに反映した生活をしてきた――彼を、最初の恐慌に陥れつつあったのだ。建物も、行きかう人の様子も、いちいち、彼の目をくらませ

た。あの東京とも明らかに違う、別の異様な空気。
最初の一週間、彼は呆けたように、そのなかを必死で泳いだ。そのあとは、異邦人につきものの、異国を踏んだ興奮から冷めたときに忍び寄る疲労と倦怠感が、どっと襲ってくる時期に突入していた。ことに、二日前から、彼に異様に接近してきたひとりの男が、その不安をあおっている。
――ああ、リヒト。お前の気持ちがよくわかる。
それに、ミサビの作るおにぎりはうまかったなあ……
空腹をおぼえつつ先を急いでいると、いやな予感が脳裏をかすめる。それを見計らったかのように、
「ハイ！　テッセン！」
「またお前か」
独特の甲高い声に、うんざりと振り返ると、その男、スチュアート・チャンが駆け寄ってくるところだった。彼は、テッセンに追いつくと、彼の肩に手をおき、その感触をたしかめるようにして、眼鏡の奥の目を光らせる。
「――頑丈だね」
「だからなんだよ」
とても、三十近いように見えない男の手を肩から振り払って、テッセンはずんずんと歩く。
ふだんならそこであきらめるのだが、今日のスチュアートは違った。
「君は武術を学びに来たんだよね？」
「そう見えないか？」
テッセンは、いつもの道着姿である。これから、太極拳の指導を受けにいくところだった。隣に並びながら、スチュアートは、学者めいた表情で（事実学者なのだが）まじめに告げる。
「君は、あのイエルシャロムの事故に遭ったんだよね？　ちょっと、調べたんだ」
「だからなんだよ。そのときの話なら、なにも、話すことなんかな

いぞ」
　そもそも、彼が話しかけてきたのは、あの事故について聞きたいからだとテッセンは思っていたので、さらにつっけんどんに「帰れよ、話すことは無い」と手をふる。
「お前はブンヤか？　でなくても、しつこい男は、俺は好かん」
「わかってるよ。口外できないってこと、知ってる。で、それでさ、君は、武術を学びに来たんだよね」
「だから……。いい加減にしろ。なにがいいたいんだ？」
　テッセンは立ち止まって、スチュアートをいらいらとにらみつけた。
「何度同じことを聞くんだ？」
　君は強いの、君は武術を学びに来たの、強いということにどれだけ価値をおくの。それは、初対面のときから繰り返されてきた質問だった。
「今日、事務で、君がショートステイで、ここから帰ったあとまた戻ってくるかどうか、わからないって聞いたんだ。だから」
「だから忙しいってのは、見てわからねえか。俺には時間がねえんだよ。早くどこかにいっちまえ、このやろう」
　短い期間で、太極拳、少林寺、棒術など、アジアの武術をすべて学ぶつもりである。同級生にはしごく穏やかに、平安学園の評判をおとさぬように気をつけていたテッセンだが、スチュアートに対しては、口調がぞんざいになった。マテ研の職員らしいということは聞いていたが、ならばなおさら、この男に付きまとわれる筋合いはない。これっきりにしてくれ、といおうとしたとき、とうとうこの日、スチュアートは、意外な行動にでた。
「おい――おい！」
　突然、テッセンは腕をつかまれ、そのまま、ずんずんとひっぱられる。広大な敷地の隅にある花壇のところまで来ると、スチュアートはようやく腕を放した。細いのに意外にも力強かった、とテッセンが呆然としていると「私だって一応、蓬莱でショウリンジをやっ

てたよ」と彼は弁解し、あたりを見渡して、ずりおちた眼鏡をひきあげた。
　至れり尽くせりのハクを使用していても、まれに、視力が低下するものがいる。ミサオのような、大人に見せるための伊達眼鏡ではなく、それが本物の眼鏡であることに、テッセンは今、初めて気付く。
　ふと、妙な感じを覚えた。
　マテ研の職員がなぜここまでして自分につきまとうのか、その意図は何なのか――
「一度だけ言うよ」
「……なんだよ」
「君は頑丈だ。体力がある。武術に意欲がある生徒だ。口が堅い」
「だから？」
「強い、ということに対して興味があるはずだ。だよね」
「まあな」
　改めてたしかめるまでもない。彼は、自分の体の頑健さも、武術向きであることも重々承知している。力、というものを頼りにすることを、公言してはばからない。しかし、それがなぜ、蓬莱ゲットーの、このマテ研の研究者にとって重要なのか理解できない。
　早くしろ、とどなりそうになったとき、スチュアートは勢い込んで、
「魔法に、興味がないかい？」
「はーあ？」
「魔法というものが現実にあったら、素敵だと思わないかい？」
　きらきら光る目でテッセンを見る。よく言葉の意味を吟味するのに時間がかかった。そして、理解した瞬間、テッセンを襲ったのは、途方も無いばかばかしさだった。蓬莱ゲットーという場所は、よくよく、平安市とはまるで違う。『自由の国のアジア』の懐の深さに、我知らず、イッツアファンタジー、というううめきを、彼は漏らした。
　だまってきびすを返そうとすると、スチュアートがあせったよう

に「待ってくれ、待ってくれ」と、つたない日本語で引き止める。
驚いて振り向くと「君のために覚えた」と彼はにやりと笑った。
「話を聞いてくれ。頼む。もう君しかいないんだ。みんな、私の話をまじめに聞かない。私の仲間だけだ。でも、仲間はみんな解散させられた。チームはつぶされた。あの、くそいまいましい、技術は金で買えると思ってるジャーナリストあがりの所長なんぞに――テッセン――そうだ！　魔法、魔法という言い方が悪いか？　浮ついて聴こえる？　だったら、そう――粒子の、まったく新しい活用方法だ」
「粒子の？」
「最近、マテ研各支部では、その技術を確立しようと躍起になってるんだ。だけど、ここで蓬莱が真っ先に抜けるとは、ありえない。私が一番進んでるんだ。進んでたんだ。あともう少しで――なのに、つぶされた。仲間は、それぞれ、他の支部に移ったりしている。私の技術を持って。彼らはいまやライバルだ――このままでは先を越される。その前に――いまあきらめるわけにはいかないんだ。頼む、協力してくれ」
「それで何で俺に声をかける」
「あのニュース聞いてないの」
そこで、スチュアートは不思議そうに首をかしげた。
「あのニュース？」
「聞いたら、君だって、そんなふうにしてはいられないと思うけどね」
そのとき、スチュアートの顔に現れたのは、敬虔ともいうべき表情だった。
「そう、聞いてくれたまえ。このままでは、ゲットーは、人間たちにつぶされるよ」
「はあ？」
テッセンが抱いた感慨は、何を馬鹿なことを、である。彼はなにしろ、自分たちが人間よりすぐれている、と信じて疑わない人物だ

った。アフリカの件も念頭にある。核も戦車もミサイルもないが、ゲットーの優位性は、彼の中で揺らがなかった。時間を操ることができれば、変化した強い肉体があれば、神霊を許容する柔軟な精神があれば。まず、人間などに負けることはないはずだ。

スチュアートはしかし、彼がそう言うと、静かに笑った。

「いつまでも人間が人間のままでいると思ったら大間違いだよ。彼らから僕らが生まれたように。彼らは僕らから、新たなものを生み出す。粒子が、霊魂の世界をこの世に結び付けてから――すでに世界は、ファンタジーと同化をはじめているのだ」

ナウ、ディスワールドチェンジドイントゥファンタジー、とスチュアートは呟いた。

「君が、馬鹿にしようと、しまいと、そうなんだよ」

「そんなことは……」

「いや、している。君は、馬鹿にしてるよ。科学を。そのおかげで、君のハクと魂はこの世に存在しているのに。君に、その強さを与え、健康な精神を与えたのが私たちだというのに、君はその事実を無視している。まあ、無視してくれてかまわない。そのくらい些細なことだと思えるほど、私たちの技術が、君の生活になくてはならないものとして在る、ということなのだから。よくいえば、とても現実的だ。しかし――聞きたまえ。脳で科学を追う時代はとうに終わった。いまや、魂で科学を追う時代だ。科学は心霊と魔的になった。魔性なるものになった。そして、それらが一体となって向かうこれからの未来、それは魔術――そして、魔法だ」

そう言い切って、うつむきがちにテッセンを見る眼鏡の奥の目に、なぜか、彼はぞっとした。けして大きくはないスチュアートの体が、夕日の中で何倍にも膨らんで、存在を大きくしたような錯覚に陥る。

茜さす小道で、テッセンは、これから自分がどこへ行こうとしていたのか、すっかり忘れていた。

スチュアートは手をさしのべた。

「悪いようにはしない。君に、新しい力を人類が手にする、その最

前線を見てもらいたい。強さを追い求めて異国にまでやってきた少年には、たまらない申し出ではないかい？　もしもそれに危険が伴うとしても、だ。かえって腕が鳴るというもの。サムライの国から来た君なら、難なく切り抜けてくれるんじゃないか、と、私はとても期待している。だから、再三再四、声をかけた。君ならばやってくれるだろうと――私がスカウトするだけの価値があると思ってね。それに、もし、途中で離脱したいというのならそれもかまわない。わざわざおとのうた客人である君に、蓬莱の土産話の一つ、二つ差し上げるのに、やぶさかではないんだから」

「途中で離脱？」

テッセンは、ひくりと眉をあげた。

「俺が？」

「ああ――君ならば、そんなことは考えないだろうとは思うがね。他の、候補者たちと違って」

その言葉は、テッセンが普段押さえつけている好奇心と、虚栄心をくすぐった。

どうやら、少年の心が動いた、と見て取って、スチュアートは笑みを隠す。彼にとって、テッセンは、これまで熾烈なポスト争いや順位争いを繰り広げてきた相手とは、くらべものにならない相手だった。

――だいたい、こういう腕力にものを言わせるタイプは、持ち上げて落として、持ち上げればいい。

そう思った次の瞬間には、スチュアートの頭はもう、別のことを考えている。

「夜、ここで」

彼が差し出した名刺の裏には、馴染みのカフェの住所が書かれている。

テッセンはそれを、黙って、おとなしく受け取った。

あるいは、受け取ってしまったのかもしれない。結局、彼は、こういった押しの強い人物には、本当はとても弱かった。

2―4

外は、今にも降り出しそうだ。

中庭で、紫陽花の手入れをする園芸部の部員は、頭に笠をかぶって作業をしている。脚絆に手甲をはめたその姿が、ミサビには、戦国時代の足軽たちを思い出させた。半円祠堂のまわりでは、色づきかけた薔薇が、可憐なつぼみをつけている。天候に左右される彼らの仕事に親しみを感じて、しばらく見ていたが、隣にいた少女の声で我にかえる。

手を柔らかく押し返す、弾力のある塊を成型して、型におさめると、部屋の隅の、一段低くなった土間に下りた。

平安学園高等部の調理室には、古いかまどがある。

煮炊きをするたびに熱い風に吹かれてめくれ上がる神札を手でおさえつけて、ミサビは、はぜる火の粉にもひるまず、火の加減を見る。留学生の一人が、熱心にメモをとりながら、一緒になってのぞきこんだ。

今日のかまどは石窯になっている。遠火にかけられた鉄板の上では、小麦粉と塩と水と酵母の混合物が、ふくらみはじめたところだった。蓋をしめてしばらくすると、香ばしい匂いがたちはじめる。

「電気オーブンがなかった時代を思い出します。アジアの台所は、土と鉄ですね。ヨーロッパともまた、違います」

「そうだねえ。うちは、電気の供給が満足じゃないから、煮炊きの基本は、いまだにかまどだね」

彼のそばについているのは、地中海ゲットーからの女子留学生で、名前を、ベアトリーチェ・カタクラと言った。後衛類？に属し、補給について学んでいるが、本当に興味があって学びたかったのは、各国の郷土料理だという。軍人志望ではなかったのだが、家族の仕送りなしで進学を希望する、となればこの道しかなく、やむをえず

高等部まできてしまった。父方に日本の血が混じっているので、特に、平安に来るのを楽しみにしていた、と、来校初日からあけすけによく喋り、語学が堪能なミサビにくっついて、熱心に質問をくりだした。

試食を終えて、全員で片づけをし、調理室の鍵を顧問に返却して、その日の部活は終わった。

「ずいぶん遅くなってしまったね」

途中、彼らもやはり、ラジオの緊急放送を聞いていた。そのぶんの時間がおして、学校を出る頃には、ほぼ、日が暮れかけていた。寮に向かう道すがら、どこかに立ち寄ることもできない時間だ。

ミサビは、ペトルーシュカについて誰かと話をしたかったが、食餌研究部の部員は、そういったことに興味の無い生徒が多い。

「お先に」と、ファサードで部員たちの群れを追い抜き、暗くなりはじめた道でひとり足を速めていると、後ろから足音がする。ベアトリーチェだった。

彼女は、竹林の一本坂道でミサビに追いついた。一気に距離を縮めると、彼の横に並ぶ。

「どうかした？」

次のメニューについてならまだ未定だよ、と言おうとしたとき、

「少し、話があったのです」

ベアトリーチェは、唇にひとさし指をあてた。内緒話のジェスチュア。それが、ずいぶん魅力的だったので、がらにもなくどきりとしながら、ミサビは首をかしげる。

「僕に？」

告白はないだろう、と、その程度の客観性は持っている。では、なぜ――学業上の相談なら、特に内緒にしなくても、いつでも受け付けている。

「何か、クラスメイトと問題があった？」

「Ｓｉ――ミサビさん、あの子と仲いい、違います？」

「あの子？」

「ミューさんと。それから、あの黒い髪の、類？の男の子も」
「ああ」
リヒトね、とミサビがうなずくと、彼女は「そう」と顔をほころばせ、
「気をつけてほしいです」
早口でそう言った。
「え？」
ミサビは立ち止まりかけたが、ベアトリーチェは「普通にしてください」と、茶色がちの緑の目を、そっと左右にすべらせた。警戒している、とわかって、ミサビは言うとおりにする。あたりには、彼ら以外の気配はない。通学路となっている、真ん中にゆるい坂となった竹林は静かだった。ベアトリーチェはほっと息を吐く。
「他の人に聞かれたくないです」
普通の相談ではない、と見て取って、ミサビも表情を引き締めてうなずく。
「リヒトさんと貴方、親しい。彼に伝えてください。ミューさんのこと、目、離さないでって。うちのクラスの、私やアブドラたちと違う、あの、ジョヴァンニたち。あの子達、ちょっと、変わってます。彼ら、同じよその学校から来ているけど、目的、だいぶ違う。そんな気、する。あの子たち、ミューさんと近づきたいの、別の理由あります」
「ええと……」
ミサビも、放課後、彼らがミューに接近しようとしていた現場を見ている。それが、純粋に恋愛上のことではないと聞いて、驚いた。
「どういうこと？」
「私もよくわからない。ええと……でも、たぶんあれ。そう——貴方たち、事故にあった。たぶん、それ」
「ああ——ひょっとして」
「ええ、そうです——あの噂……サンプル？」
最後の四文字だけ、風の音とほとんど同じヴォリュームになった。

「そう」
そうだったのか――
ようやく合点がいった。リョウヤがしきりと首をかしげていたので、なんとなくひっかかりを覚えていた。
「スパイ、ということだね」
ベアトリーチェの返事は、しかし、あいまいなものだった。
「諜報課の生徒は、授業とってる、そのこと、言わない。私にも、本当はよくわからないけど」
「いや、じゅうぶんだよ」
表向きは単なる留学生だが、実は、ということは、ここではよくあった。ジョヴァンニらの目的が、事故の真相や、サンプルの存在について探ることだったとしても、驚く理由はない。彼らは、それぞれ、地中海、イース、ロンディニウムの出身で、そこは、ゲットー連合の首脳にあたる。そこからの留学生といえば聞こえはいいが、そのなかに、純粋に学業目的ではない何かが混じっていてもおかしくない。
まして高等部ともなれば、彼らは半分、大人の領域に片足をつっこんでいた。
しかし、ベアトリーチェは、ジョヴァンニと同じ地中海の出身だ。君が教えてくれたのはなぜ、とミサビが尋ねると、少女は少し考えて、
「友達だったから」
「友達？」
「はい。彼から手紙、もらいました。貴方のこと、書いてあった。私、フリオの友達だったです。覚えてますか。フリオ・カーデ」
「フリオ――フリオ。もちろん、よく、」
あの事故で亡くなった留学生のひとり。同じく、地中海ゲットーの出身者。突然、胸の中を風が吹き抜けていった感覚をおぼえながら、「すまなかったね」と思わず彼が謝ると、ベアトリーチェは「いえ」と長いまつげを伏せ、首をふる。

「いいえ。そのこと、私、気にしてない。不幸な事故と思います。貴方、とても彼によくしてくれたときいた。私、感謝しています。でも、そうでない人もいる。彼ら――ジョヴァンニ、フリオとそんなに親しくなかった。でも、あの事故が平安の陰謀だといって、敵討ちする、思っているひともいます。だから、気をつけて。彼ら、ミューさん気にしてます。あの銀髪のひと、あまりに綺麗すぎる。他と違う。だから彼ら、サンプルが彼女だと疑ってる。あのひと、そのくらいすごいです。なんというか……まるで――」

ベアトリーチェは、同性として複雑でもあるけれど、というようなことをイタリア語で呟き、その後、雨の降り出しそうな暗い空を見上げて、

「天使みたい。そう言ってます。私たち――よそからきたひとたち」

と言った。

なるほど、天使か、とミサビは内心で、第三者からいわれて気付いた発見をかみしめる。

紫陽花の生い茂る小道を抜けた。

――彼女が、そうだと……？

ミューがあの事故の当事者ではないことを、ジョヴァンニたちはとっくに知っているはずだ。もともと一つ上の学年にいたことは有名だし、あのときの入院には、別の理由がつけられている。なのに、なぜ、ミューをサンプルだと思っているのだろうか。綺麗だからという理由は、あまりに単純すぎるのでは？

どこで誤解したのだろう、とミサビは考えたが、容易に結論は出ない。

女子寮の前に来ると、ベアトリーチェは「じゃあ」とほっとしたように笑って、門の中に入っていった。ミサビも、反対側の通りにある男子寄宿舎へ入る。在籍板に在寮札を掛け、早足で部屋に向かった。

「ただいま」

部屋は、窓が全開にされ、湿度とつめたい風が頬にふきつけた。

屏風の向こうで「おかえり」と、ものうい声があがった。
「雨、降らなかったか？」
「まだだよ。なんとか」
着替えて、屏風の向こうに「いい」と声をかけると、「いいよ」と返ってくる。風呂敷包みを手に入り込むと、シルルは、ベッドの上に座って、ぼんやりと宙を見ている。そばには、書きかけのノート――今日、休んだぶんの課題をこなしていたのだ。
「調子は」
「だいぶいい。出席日数が、やばいな。明日はちゃんと行くから」
頭をかきながらそう言った。のばしたままの、癖のある髪がくしゃくしゃになっている。ミサビを見ると、緩慢な動作で髪と服をなおしはじめた。
「そう。ご飯は？　食べられる？　部活でパンを焼いたから、持ってきたよ。夕食前だけど、いいでしょう？　お茶いれるよ」
ポットを机の上に探したミサビは、そこに、綺麗な菓子の包みを見つける。
「これは？」
「なんとかってやつ。留学生の。お隣にいる――そいつが、郷里のなんとかって。もらったよ、お前のぶんも」
「そう。ありがとう」
ヨンニか、とミサビは納得する。北欧出身の、細身の少年。ジョヴァンニと仲がいい。
彼もか――
ひっかかったが、病床にある友人に、余計な心配をさせたくなかったので、シルルには、黙っていることに決めた。
シルルは、窓のほうを見ている。血の気のない、能面のような表情だ。
「ラジオ、聞いた？」
ミサビは、お茶のカップを手渡す。シルルはパンを食べ始めていた。こうして、ものを食べているところを見るのは久しぶりだ。「

うまい」と呟いて、微笑をみせたシルルにほっとしながら、自分も湯呑みに口をつける。
「聞いた。大変……なんだよな。こうしてるぶんには、とても、現実とは思えないが」
「そうだね。どうするのかな、上は」
「もうじき市長の記者会見だってよ。ラジオ、聞かなきゃな。リヒトとグエンも呼んでさ。テッセンはどうしてるかな。あいつ、蓬莱で、うまくやってるのかな」
「元気みたいだけどね――ひゅうが、ひゅうが！」
呼ぶと、ミサビの相棒である三毛猫が、赤いモスリンのリボンを翻して、窓からやってきた。
「なあにい、お二人さん。しけたツラねえ」
彼は、人間くさい動作で首をかしげると、前足で、湿った顔とひげをなでる。笑っているシルルをみると、ミサビにだけ分かる、かすかな表情の変化を見せた。そのまま、スフィンクスのポーズで、机の上を陣取る。
「いいからさ。ねえ、テッセンから、なんか言ってきてない？」
「元気よ。アルリシャいわく」
「今日は？　テッセンなら、絶対、ペトルーシュカについて何か言ってると思うんだけど」
「今日はまだだわね。ねえ、ぺと――ナントカ、って、それのせい？　街じゅう、なんだかざわっとしてるのは」
「ああ。感じる？」
「ええ。なんだかねえ。魂の模様がめまぐるしいの。ヒトの形がおかしいの。人心惑うときは我らもまた――あんたたちと契約する時代になってから、私たちだって、ちょっとは変化してんのよ。お偉方も、久しぶりに集会に顔を出したし」
「ん？　誰のこと」
「舶来の賓客がいらっしゃるのよう。でもこれは、あんたたちには関係ないわ」

あっさりと言って、ひゅうがは、パンのかけらを要求した。
「夏が来る前には梅雨があるものよねえ」
彼が、桃色の鼻先を向けた窓の外で、雨が降り始める。宵闇に銀糸が垂れ下がるように、行灯の明かりに雨は光る。
雨音は不規則だった。
ひゅうがは、尻尾を振りながら屏風の外へ出た。シルルがパンを食べ終わって、着替える、と言ったので、ミサビも、茶器を片付ける。続いて出ようとすると、背後で「そういえば」とシルルが声をあげた。
「せっかくなのに、今年も出さないのか」
「――ああ」
自分のスペースへ入り込んだミサビは、足元に目をおとした。くずかごには、封を切られないままのインヴィテーション。
「いいんだ」
なぜか、声には微笑が混じった。シルルは「そう」と低く呟き、そのまま、どさりとベッドに倒れこんだらしい音がした。
「お前がいいなら、いいんだけど。――リヒトはつくづく、幸せだよ、な」
「そう？」
「そうだよ」
声に色があるとしたら、このシルルの声は透明だった。何の感情も無い。
嫉妬すら。
それが、妙にミサビの背筋をぞっとさせた。彼は、あわてて言う。
「明日は、晴れるってさ――それで、ちゃんと太陽の光をあびて、ご飯を食べたら、シルル。元気になる。前向きに、考えることができるよ。大丈夫。明日、行くんでしょう。たたき起こすからね」
シルルは答えなかった。
ミサビは、くずかごからインヴィテーションを拾い上げ、それがなにか分からないほど、静かに、びりびりに引き裂いた。

2―5

その日、蓬莱市はあわただしかった。朝から、ものものしい雰囲気の制服の男たちが出入りするのを、マテ研の職員たちはいぶかしく思っていた。しかし、あの放送後、彼らはようやく納得した。と、同時に、窮地に立たされることになった。

「うちから盗まれたものがなぜ、今になって」

“ペトルーシュカ”の原型が、蓬莱から盗まれたものであることは、まだ発表はされていないものの、彼らだけには明らかだった。製作や細工や保管に携わっていたものは真っ青になって「駄目だ、駄目だ」を繰り返し、事務方は、鳴り響く電話の応対に追われた。

しかし、

「ついに、軍事利用されたか」

一種の諦めが、彼らの間にはあった。魔的研究所は、設立当初から、人間側の諜報活動の対象だった。研究所が生み出すハクは、外界で使われる作業用アンドロイドの技術にも一役買っていて、この特許は莫大な利益をあげていたから、製作の全過程を刻まれた設計図でもあるオリジナルのハク一体をまるごと手に入れる機会を、人間側は虎視眈々と狙っていたのだ。作り方さえわかれば、あとは、法律でなんとかなる。

そういうわけだから、どのゲットーも、人間側からのスパイにはじゅうぶん気をつけていた。しかし、盗難を防ぐためのセキュリティは、もともと、人間側から譲られたものだ。改良を施してはあったものの、内通者がいればたやすい、とかねてから言われていた。なぜ蓬莱だったのか、というのは、問題にならなかった。どのゲットーでも、起こるときは起こるだろう事態だったのだ。ただ、かね

てから予想できた被害ではあったので、なぜ防げなかったのか、問題はそこだった。何にもまして、いまだに犯人が挙がっていない、ということが、彼らの不安と苛立ちを倍増させる。ペトルーシュカに使われたハクが、十年前に盗まれたものであったので、怒りは、いまだに事件を解決できていない、自分たちの仲間である警察にも向けられた。

その日、やってきた公安警察や軍の関係者は、ハクの盗難を手引きしたであろう、内通者を調査するものたちだった。私服であろうが制服であろうが、鋭い眼光に直線的な態度は、あきらかに、職員や研究者たちとは違う。マテ研のものは、驚異の目を彼らにむけた。やがて、夕方には玄関ホールを埋めるほどになった彼らに説明するために、所長までがやってきて、押し問答が繰り広げられた。

「困りますよ、あたりかまわず入られては。ここは、普通の場所とは違うんですからね」

「何を言うか。正当な捜査だよ、これは。だいたい、さっさとすませたほうがいいのじゃないかね。ん？　他のゲットーからは、第三者の捜査機関に委ねろという声もあるんだよ。これは、蓬莱市の信用問題だ」

「だからって、研究所を、そこらへんの共産主義連中やカルト教団と同じに扱われちゃ心外だ。誰も、捜査を拒否するなんて言ってない。穏便にやってくれ、というんだ。そんな、ガタイのいい連中にうろつかれちゃ迷惑千万ですよ。まずは警備課で話を聞いて、彼らにやりかたをおそわってください。ここには、精密機械がわんさかあるんだ。あんたらみたいな埃とバイキンの塊が、ひとかけらでも垢をおとしてみてください、うちは商売あがったりだ」

「こっちはね、営業停止してもらったっていいんだよ」

「――ここは、そこらの商店とは違います」

スチュアート・ヒルガーの横から、一歩前に出て彼らに言ったのは、彼らに勝るともおとらない体格と上背を誇る、ジム・レイノルズ・リーであった。魔的研究所蓬莱支部で、もともと研究者たちを

統括していた老紳士で、今は、役員のひとりだ。彼は、警察官たちだけでなく、上司であるかたわらの所長までを、押し隠した胡乱な目で見ながら、
「営業を停止？　いうにことかいて、営業、ですって。ビジネスですって？　看板を間違えています。ここは、研究所です。そもそも、あなた方に口を出されるいわれはないんだ。ここにいるものの大半は、自らが負うところの研究の責任を果たす、学究の徒であり、昼夜問わず世を動かす、ひとつひとつ精密な歯車だ。その歯車を止めることは、進歩をやめることです。警察がなんぼのもんじゃい。ＦＢＩだろうがＫＧＢだろうが人民軍だろうが、礼儀をわきまえないなら、こちらにだって考えがありますよ。魔的研究所が、市にいくら税金をおさめているかご存知か。うちが、どれほどの利益を蓬莱ゲットーにもたらしているかご存知か。あなた方に給料を払っているのは私たちといってもいいくらいです。なぜそんなに威張っていられるのか、聞きたいね。あなたたちこそ、どうして、十年前、通報したときすぐに犯人を捕まえてくれなかったのか。そちらさんにだって、ハクの流出を水際で阻止できなかった責任がある。いまさら大勢で来て、威張られてもねえ、腹がたつのももっともだと思いませんかね」
　おお、というどよめきと拍手が、いっせいにあがった。苦情を申し立てに集まっていた、関連部門の職員、研究者たちが、リーに追従する。
「そうだそうだ！　だいたい、警備課にいるあんたらの下っ端がちゃんとしてないから、ハクが丸ごと盗まれるなんて格好悪い恥をゲットーじゅうにさらすことになったんじゃないか」
「仲間を疑うなんて、筋違いもいいところだ」
「盗んだ奴が悪いというんなら、人間のほうにむかって、犯人の調査と引渡しを要求するのが先だろ」
　それに対し、警察の先頭にいた男が、
「しかし、だ。内通者がいるのは確かなんだ。君たちだって、仲間

内にそんなのを抱えていたくはないだろう」
　たまらず大声をあげる。とたんに、反論の津波が彼に押し寄せる。
「あれから十年経ってるんだぞ。そのあいだに辞めていった奴らがいくらいると思うんだ。とっくに辞めてるに決まってらあ」
「そうだそうだ」
「給料泥棒！　ちゃんと働け！」
　しかし、職員たちの防波堤になったのもまた、リーだった。彼が「とにかく！」と両手をあげて叫ぶと、その場はしんとしずまりかえる。
「とにかく、調査をするのなら手順を踏んでいただきたい。まずは、その、人相の悪い連中をいったん外に出してもらいます。所長の言うとおり、ここには、一ミクロンの塵や埃で駄目になる実験途中のものもいるし、重大な菌類を保育しているものもいる。貴方がたの身の安全を保障できない研究をしている部門のものもいる。容易に開けてはならない扉ばかりなのだ。いいですね」
「彼のいうとおりだ――そういうわけだ。とにかく、方針を話し合おう。私は、これから、市の上のものと話があるので失礼するが、リー、君に、調査関係のことは任せるから、よろしく頼むよ」
　所長が横から早口で言うのに、リーは一瞬いやな顔をしたが、所長命令とあらば、というふうに「わかりました」とうなずいた。ヒルガーは、あからさまにほっとした表情で、その場をよろけながら去っていく。残された双方の職員たちは、しばらくにらみあいを続けていたが、リーと、警察捜査陣の代表――デュカキスが、まじめに話し合いをはじめると、やがて、潮がひくように、それぞれの持ち場へ戻っていった。職員たちは、分厚いセキュリティ・ゲートの奥へ。捜査員たちは、冷え込み厳しいマテ研の正面玄関から外へ。
　夜空の下に放り出された捜査員は、不満たらたらのまま、待たされることになった。彼らとて、同じ市の、変化した仲間を疑いたくはない。しかし、これが仕事なのだから、責められる筋合いはないのである。

「ちっ、厄介なことになったなあ。それもこれも、あの操り人形のせいだぞ」
「職員の中に、学校の同級生がいたな。顔を見られちまった。俺、公安だって、ばれたかな」
「お前のその変わりようじゃ、生みの親だってわかるめえ、杞憂杞憂」
群れの端に所在無く立っていた、彼らの中でも若い捜査員の一人は、ふと、研究所の植え込みを横切っていく複数の人影を見つけた。妙な組み合わせのグループだった。白衣の男の後ろに、少年が二人と少女が一人。彼らは別の入り口のほうへと歩いていく。少年たちは、正面玄関のものものしさに驚いていたが、先頭の眼鏡の白衣男は、わき目も振らずに歩いていた。それは、古代から変わらぬ学者のイメージそのままの人物――ビン底ほど厚みのあるレンズの眼鏡、くしゃくしゃの髪、痩せ型、前かがみの大股歩き。あまりにも図鑑どおりの姿に、彼は思わず目が離せなくなる。
やがて、四人は視界から消える。若い捜査員は、先頭にいた学者めいた男の面影を、かつて知る後輩と重ねた。
「チャン――チョウだったかな、リャンだったかも」
「何をごちゃごちゃ言ってる、新人」
「あ、はあ、すみません」
彼は判断を誤った。疑問を感じたそのままの心を信じて、すぐに、その学者を掴まえるべきであった。そうすれば、彼がこれからしようとしていたことを、未然に防げたはずだった。
しかし、男はやがて、そのことを忘れてしまった。

＊

さて、かつての先輩に目撃されたとも露知らず、スチュアートは、テッセンとミシェル、エレナという高等部の生徒たちを引き連れて、裏口から魔的研究所へと入った。長く狭い廊下から、すぐに分厚い

扉に行き着く。
事件に意気消沈する他の職員たちと違って、彼は、千載一遇のチャンスに小躍りしたい気分であった。ペトルーシュカは、彼にとって、絶望でなく、幸運の女神だった。騒動が続く限り、彼が何をしようと、きっと、誰も関心を払わないに違いない。関連部門が休業ということになれば、それもチャンス――遊んでいる機械類が自由に使える。最後の仕上げには、この時をおいて他にない。本当に運が向いてきたかもしれない――学生たちの前でなければ、鼻歌でも飛び出しそうであった。
足取り軽いスチュアート。
反対に、テッセンの足取りは重い。
指定されたカフェに行ったとき、彼を待っていたのは、喋ったことはないが、お互いに留学生だとは知っている上級生や同級生で、気まずい挨拶のあと、今も一言も言葉を交わしていない。
男はアッシュブラウンの髪のミシェルで、おそらく、イースかロンディニウムの出身。女は濃い赤毛のエレナ。たぶん、ロンディニウムか、そのほかの英語圏。両方とも、一見して頭脳派タイプであったので、余計に声をかけづらかった。彼らは、母国語が同じなので、かなり早口で、二人だけで話をしている。テッセンは輪に入れず、黙りこむ。
しかし、研究所の奥へと進むにつれ、彼は、気まずさを忘れた。
初めて見る、魔的研究所の最深部に、ひたすら目を丸くする。
ゲットーの街並みが、必要に迫られて近世風に古臭くされているとするなら、研究所は、業務上の必要で現代の最先端を反映していた。ふんだんに使われたガラスやセラミック製品、コンクリートや鋼板を、やがて、沈黙を破って「まぶしいですね」と、彼にもわかる速度で、少女が表現した。
「光が、こんなに――」
天井には、影まで蒸発しそうな強い光を放つ照明。
「ぜいたくですよね、つくづく」

魔的研究所は、独自の発電施設を持つため、電力を使いたい放題に使っている。それが、不便な生活を強いられている学生には、うらやましくて仕方ない。平安市の節電生活に慣れたテッセンでさえそうである。彼らは肩をすくめあった。多少、気まずさが緩和された。

「木造の部分はないんですか？」

「木い？　木なんか危なくて使えないよ。魔的物質を扱うんだからね」

スチュアートはそう説明しながら、バイオセンサーに顔を近づけ、指を差し入れて、名を名乗った。彼にとっては見慣れた光景なので、学生たちの驚きなど、フォローする気は毛頭ない。

「スチュアート・チャン。ゲスト三名」

暗証番号を叩き込むと、静かに扉が左右に開いた。

「はい、さっさと入るよ。急いで、急いで」

廊下に三人を促して、再び歩く。彼の居室は、一番奥にある。生徒たちは、パンかなにかの一つのカタマリのようにになってついてきた。ゲートをぬけて、ふたたび緊張した様子である。

「そんなに固くならないでくれ」

「そう言われましても」

「ねえ」

彼らは、それぞれ自国のゲットーで、自国のマテ研に行った経験があった。しかし、スチュアートのような、健康管理にも医学検査にもタッチしていない研究者の領域には、踏み込んだことがない。しかも、彼のいる部門は、もっとも安全性への配慮が必要な場所だった。つまり、もっとも危険だということでもある。警備レベルも高い。

こんな場所を使っているなんて、マテ研のエリートというのは本当らしい、と学生たちは、スチュアートに尊敬の念を抱き始めていた。テッセンも、“胡散臭い”から、“意外としっかりしている”へと、形容詞を百八十度変えた。

しかし、「ここだよ」とスチュアートがドアを開けた１０平米ほどの広さのその部屋に入ると、彼らは一気にがっかりした。あまりに室内が乱雑だったためである。

壁を埋め尽くす本棚には、あふれんばかりに本が詰まっていた。多数のコンピュータが巨大な机の上に置かれ、そのすべてが起動している証拠に、混ざり合う極彩色のスクリーンセイバーが夜光を放つ。投影された画像――無数のデジタルの熱帯魚は、空中をゆっくりと泳ぎまわっていたが、スチュアートが照明をつけると、姿を消す。がらんとした空間で、あらためて、室内の乱れが強調される。

スチュアートは、近くの床に積まれていた本を蹴飛ばすと、学生たちに椅子をすすめた。てんでばらばらの椅子に三人が座ると、まもなく、熱いコーヒーが提供された。

「さて。では、まずは、ガイダンスといこう。今日はもう夜も遅い。下に、わけのわからん連中もいたし、学生たちをここに連れ込んでいるところを見られたら、何を言われるかわからん状況ではあるからね。手短にすませる。ええと――ミシェル、エレナ、そしてテッセン。まずは、君たちのカードを貸していただきたい」

テッセンは、自分の首からカードを外して、スチュアートに渡した。

「それから、仲間を紹介する。スリジエだ」

ドアが開いて姿を現したのは、三十歳を過ぎたころであろう、黒髪のアジア系の男性だった。三人を見ると、にこやかに頭をさげて、ひとりずつ握手をかわす。

「はじめまして」

「実験中、彼に、君たちの状態をモニターしてもらう」

スリジエは、カードを受け取ると、手にした棒のようなもので、カードの情報を読み取りはじめた。学生たちは顔を見合わせる。カードには、市民番号や保険番号、病歴など、彼らの個人情報がすべて入っている。不安そうな顔の彼らに、スリジエは「大丈夫だよ」と微笑んだ。

「異常があったら、すぐに救出措置をとります。これは、そのための準備」
「救出――」
「そう。私の実験は、そういう事態になるかもしれない内容を持っている。だから、はじめに説明しておく」
スチュアートは、デスクの端に腰掛けて、前のめりに両手でカップをつつむ姿勢で、あたりを見渡す。
テッセンは、彼の近くの本棚に、「中世期の魔女」「錬金術の歴史」というタイトルの背表紙を見つけて（そのタイトルは簡単な英語だった）、顔をしかめた。ふたたび、胡散臭い雰囲気がスチュアートに漂い始める。まっすぐに家にかえるべきだったかな、と、今ここに来た自分が嫌になったとき、スチュアートと目が合った。黒い瞳が放つのは、知性の光。テッセンのもっとも苦手なものだ。
後悔が増す。場違いだ、と思った。
だいたい、彼は、魔法というものをまだ信じていない。基本的に、そういう、空想の話は嫌いだ。
かつて、あの東京で、ミチタカのがらんどうになったハクを前に、マチコにむかってそういったように、今も、その気持ちは変わらない。
くだらない、と思う。そのはずだ。
だけど――？
エレナとミシェルは神妙にしている。
彼らは、本当に魔法というものが現実になると信じてここにやってきたのだろうか？
俺は――期待なんかしてないはずだがなあ。
テッセンが、自分にむかってそう問いかけたとき、
「この世にある科学の原始的な状態は、いまや、歴史の奥に封印されている。しかし、今ある科学の状態から、過去を予想することはできる。私はもう一度、人の思想や理想が行き着くべき場所を、過去にさかのぼることで確認しておきたいのだ。私が、これから君た

ちの協力によって作る新しい概念――魔法について」
いよいよスチュアートが、それについて語りはじめた。

3　魔法

「君たちのなかには、一度ならず、魔法というものが存在する世界に触れたことがあるものがいるだろう。ゲーム。コミック。物語。舞台。ドラマ。すべて虚構だ。虚構の世界の虚構の力を、君たちは楽しんだ。純粋に、娯楽として。違うかい？」

「ええ。覚えがあります」

洗練された仕草でカップを口につけて、アッシュブラウンのミシェルがうなずいた。

「夢の世界ですね」

「夢の世界。そうだ――私もそうだった。私は子どものころ、そういった世界にとてもとても憧れた。たぶん、君たちの誰よりも、いや、世界中の誰よりも、憧れたといっていい自信がある。夢みる、などという言葉では言い表せない、ファンタジー狂だった。およそ、魔法や魔術というものが存在する世界なら、見たり読んだり、プレイしたり、それに若者だった時間の大半をつぎ込んだ。変化してからもそうだった。私は、“あちら”の世界にほとんど同化していた。そして、魔的物質というものを見るに、これは、私が夢見た世界への鍵であると確信した。君たちは、」

スチュアートは、眼鏡をおしあげる。

「考えたことがあるだろうか。虚構の世界のキャラクターは魔法を自由に使える。そのキャラクターは人間である、と、それについては疑ったりしなかったかい」

「はあ……、どういう？」

「人間が、呪文を唱えると、ただちのその人物の手から火がふきだす。大量の水がほとばしる。風が起こる、地が震える。そんなことをしている主人公は、平然と無傷でいて、女子どもにきゃあきゃあ

言われている。しかし、よく考えてみたまえ。そんなことができるやつは、人間か？　手から、敵を致死させるほどの高温、高質量の火を出して、そいつ自身はどうして火傷をしないのか？　溺れないのか？　吹き飛ばないのか？」

「それは、言わないお約束だと思いますけど……」

多少、呆れを含んだ声色で、エレナが赤毛を揺らして首をかしげた。

「まじめだね、君たちは」

逆に、呆れたような顔でスチュアートは肩をすくめた。エレナがむっとするのが、隣にいたテッセンにはわかった。

「私はそれが疑問だった。ゲームのグラフィックなどを見るにつけ、さらに疑問だった。ファンタジーのキャラクターたちは、みな、美形であり、かつ、身体的に、とてつもないフィギュアをしている。当たり前のように八頭身、九頭身で、筋肉などまったく無いように見えるのに、五メートルのジャンプを助走なしにやってのけ、体重の五倍はある巨大な剣を難なくふりまわしている。無重力状態にあるようには、とても見えないようなのにね。さらに、さっきもいったように、火を出すやら水を呼ぶやら。大道芸人も真っ青だ。マジシャンも裸足で逃げ出す。なにしろ、彼らには、マジックの種などなにもないのだからね。仕込みなしでそんなことができる人間がいるものかね。そんなことができる奴が居たら、そいつは人間じゃない。もういちど言おう。人間じゃない。さらに言えば、絶対に、必要的に、論理的に、人間じゃない」

「人間じゃない」

スチュアートから、視線によってもそれを強調された三人はそれぞれ呟いて、顔を見合わせた。

「ええと、じゃあ……」

「しかしながら、人間に見えるのだから、それは、人間でないが、人間の姿をしているもの、だ。つまり、私たちのことではないのか、と私は考える。羽化転生した人間たち。私は、転生後、真っ先に思

ったよ。なるほど、まわりを見渡して、これは魔法の世界かもしれない、と。で――ゲットーや現世の差を測るのに、美形率、というものがあるのを知っているかい。これは、素面で考えるとちょっと笑えるデータだけどね。ええと、美人というのは、ここでは、芸能プロダクションのスカウトが、思わず街で声をかけてしまうほど魅力的な容貌を持つ、というのを点数化して平均した数値らしいが――現世の人口とゲットーの人口を比率で見ると、ゲットーにおける、いわゆる“美人”率というのは、驚くなかれ、じつに三割を超える。現世では、一割をだいぶ下回るのに。つまり、ゲットーには美人が多いということだ。十人のうち、実に三人が、男女の関係なく、そう呼べる種類のものだということ」

テッセンは、ミサビとミューを思い出した。他の二人も、かすかにうなずいた。思い当たる節があるのだろう。

「そして、さらにその上をいく“超美人”率が、その三割のうち一割。こちらは、現世では、もう、ほとんど、天文学的数値になる。そしてまた、体型の黄金比率に至っては、ゲットーでは、九割までが、現世の理想体型の範囲内にあてはまる。つまり、私たちは、人間の理想なのだ。ファンタジー世界のキャラクターを務めるのに十分の条件を備えている」

「見た目だけでそう判断を下されたんでしょうか。チャン――先生は」

「スチュアートで結構。いや、まさか。ただ、私は最初にそう思った、というだけだよ。そして――」

彼は、カップを置いた。

「魔的」

彼は、リズムをつけて指を鳴らした。

とたんに、ものすごい速さのものが、彼らにむかって、正面から飛んで来る。テッセンは、そのままの軌道なら頭に直撃するだろうアルミのボールを、手のひらに掴み取る。他の二人も、それぞれ、ボールを手に持っていた。

「ブラヴォ」
スチュアートは手を叩いた。顔を見あわせる学生たちをよそに、話を続ける。
「この能力だ。時間を操る、というね。いや、時間だけではなく、空間も。この二つは、つねにセットだ。そして、それら両者のあいだを自由に行き来するのが、私たちを変化させた魔的物質。われわれが制御できるのはまだ一部分だけで、その一部分だけでもかなりの問題なわけだが――ときおり、遭難が起こるのが、その、われわれが制御できてない証拠のようなものだ。粒子の運動を抑制したり、移動を遮蔽するものを身に着けたりすれば何とかなる、ということで研究がすすんでいるがね。そう――しかし、われわれが、他の時限へ、時間軸へと行くことができるのなら、その逆だって可能なのではないか、と、蓬莱の別の研究者が五十年前に提唱した説がある。それが、生物地球論だ」
「バイオテラロジー」
「そう。質量保存の法則を、時間と空間の両方に応用した生物学だ。われわれという存在は、平行世界に無限に存在する。鏡を二つ、平行にならべ、そのあいだに立ってみると、何人もの自分、いくつもの別の世界が広がるのを見ることができるだろう。しかし、私たちにとって現実は一つしかない。鏡に手をのばしたところで、鏡の向こうの林檎を手にとることはできない。しかし、これが、可能なのではないか、と、五年前、フェアシュミット賞とヴェネストロム賞をダブル受賞した男がある日思った。われわれは、遭難のケースを細かく分類して研究してきた。ケース1、現実世界と同じ時間軸上の過去へ行く。ケース2、現実世界と違う、平行世界の同時間、同時刻のその場所へ行く。ケース3、平行世界の過去へ行く。ケース4、平行世界へ行く。ケース4に限っては、異世界といってもいいかもしれない」
ここで、スチュアートは再びテッセンを見た。
「しかし、いずれのケースでも、地球という物質が、たしかに存在

するわけだ。どこにいっても、われわれがいるのが地球上であることには変わりない。どうしてか――これだけは覆すことができない。われわれは、この星に縛られて生きている。ここ以外の場所では生きられない。われわれは、地球の一部として、地球の上に起こりうるすべての可能性の世界を行き来している、というだけ。ただ、自分たちに遺伝子という記憶装置があるがゆえに、祖先のいた地に跳躍してしまう、という確率が存在する、というだけで。――われわれは、遭難したとき、その世界での物に手を触れ、持ち帰ることができる。石を一個、こちらの世界へ持ち帰る。ことに、異次元のものを。しかし、それで、何の問題が起こるというわけではない。持ってきたとたんに消滅したりとか、持ってきた記憶がなくなるとかいった混乱もない。通常通り。本も、釘も、メモリディスクも。では、虫は？　動物は？　人間といった、生物は？　問題が起こるだろうか。これが――起きない。それは、地球上のすべての時限、空間で、整合性を地球自身がとっているからだ。地球は、時間と空間のなかで自らの体内の物質――ここでは、われわれ人間のことだ――それを、一つの栄養素や食物のように、自在に動かして、特に異常をきたさない。飲み込んだ水が、体内に吸収されるような自然さでそれを受け入れる。それで彼らは、地球を、宇宙に浮かんでいる一個の生物として考えた。バイオテラロジーとは、かなり端折ったが、簡単に言えば、そういう理論だ。そして、地球に存在するものならすべて、この時限へと持ち帰り、使用することが可能なのではないかと思った」

はっきりいって、この時点で、テッセンは、目の前の男が何をいっているのか、さっぱり理解できていない。

スチュアートは、エレナとミシェルにむかって喋る。

「では、虫とか動物とかではなく、次にあげるこれらを持ち帰ることは可能か、と私は考えた。すなわち、燃えさかる火や水だ。地球の別次元に大量にある、たとえば今そこでまさに噴火し、燃え盛っている炎を、炎がそこに在る空間ごとこちらに持ち帰るということ

は？　べつに、持ってきたって問題じゃない。私は、別次元にあるそれらを、資源だと思った。時間軸の中に存在する資源だ。しかもそれは、地球という歴史が続く限り、地球という生物が行き続ける限り無尽蔵だ」
「平行世界の火や水を、私たちの世界が自在に使えるようになるかもしれない、ということですか？」
　エレナが、目を輝かせる。
「粒子を操作して、そんなことが可能になる？」
「なる。理論上は。そう――最初、私はそれを、化学で可能にしようとした。異次元から、大量の水素や酸素を持ち帰って化合させれば水になるし、炎は、燃焼という反応だから、と思った。しかしそれでは、時間がかかる。もし、目の前にあのペトルーシュカが居たら、水素や酸素を出現させる、燃やす、水にする、という作業を、一度に、大量に、短時間でこなさなければならない。しかし、これでは遅すぎる――いくら私たちが時間を操っても、無事ではすまない。呪文を唱える途中で、敵は待ってはくれないのだからね。出すなら、その“もの”だ。そう、ゲームでは、召還と呼ばれる方法に似ている」
「どうやって？」
「重要になるのは、使い魔の存在だ。かくりよと呼ばれる世界。われわれの世界と重なっており、われわれの脳が新たに知覚した心霊の世界。彼らは一瞬で、主の居場所や状態を知り、われらのもとへやってくる。これもまた、召還の一種といえる。なんでか君たちは、使い魔というものを、さしてものすごいものだとは思っていないようだがね」
「あのう、でも、僕たちは、知らない世界へは容易に行けませんよね？」
　ミシェルが言った。
「どこから、そういうものを召還するんです？　その世界にいる、別の――平行世界の僕たちは？」

「だから、まったく異次元から召還するんだよ」
「でも、どうやって取りに行けば」
「それを今、説明するところだ。かくりよというものがあるだろう――われわれの世界と、今重なりあっているその世界。われわれの世界は、まず、そもそも一つではなかった。複数の階層、人間の見ている世と、彼らが生まれ過ごす世が重なってひとつの世界をなしていることが、粒子の出現でわかった。しかもその重なりは、時間によって非常に不安定で、常に揺らいでいる。その揺らぎの合間に、ワームホールができるわけだが、使い魔たちは、なぜか、その穴に落っこちることはない。彼らには、ワームホールが目に見えるから、そこを迂回することができるわけだ。ところで、使い魔たちは、ワームホールを作り出すほどではないが微量の魔的を持っている。それが、主の魔的情報を蓄積しているから、彼らはいつでも君たちのもとにやってくることができるのだ。彼らは、君たちの使い魔となるとき、それぞれ独自のメソッドで契約をしたはずだ。契約――うん、これも、ファンタジーでは古くからある言葉だね」
「はあ、それで」
「かくりよとこの世界とワームホール。異次元へとつながる穴から、まずはからかくりよへ、炎を召還する。そして、かくりよから、さらにわれわれのもとへその炎を召還する。ここで、使い魔の魔的に導かせれば、それは自動的に君たちのところへやってくる。このやりかたが一番速く、理にかなう、と私は考えて、その方向で実験を重ねてきた。そして、ひとまず安定して炎や水や風や、土くれ――地水火風、魔法の初歩だね――とりあえずこれだけを持ってこれる異次元があることを確認して、そこにマークをつけておいた。はいこれ」
　スチュアートは、三人に、巨大な鉄の箱のようなものを、背後からひとつずつとって、渡した。
「なんですか、これ」
「それの箱の中に手を入れて、粒子を操作してくれ」

三人は、言われたとおりにした。
「これで、この箱の中には、君たちのパターンを記憶した魔的物質がある、ということになる。さて、これを」
スチュアートは立ち上がると、壁のボタンを押してから、唯一、本棚のないスペースである、別の部屋へと続くドアの向こうに消えた。すぐに戻ってくると、
「これで、私がマークした異次元に、君たちの記憶を持つ粒子が存在する」
と、言った。
「えっ。何か――したんですか」
「この隣の部屋には、ワームホールを人工的につくりだす機械がある。社外秘なので君たちにはお見せできないがね。今、そこに、あの箱をつっこんで転送してきた。間違いなく届いた証拠がこれ」
スチュアートが、一台のモニターを指さす。そこには、複雑な数式や言語が入り乱れている。図形もあったが、やはり、テッセンには理解できず、他の二人も首をかしげた。コンプリート、という点滅する英字だけが読み取れた。
「で、だ」
「で？」
「今日はこれでおしまい」
「えっ」
三人がびっくりしていると、スチュアートはにっこりと笑って立ち上がり、手を叩いた。
「あとは明日にしよう。君たちは、くれぐれも、何食わぬ顔で生活してくれたまえ。明日の夜、またここへ来てもらう。明日はいよいよ、魔法を使ってもらうよ。では、お楽しみに」
「――帰り道をご案内します」
スリジエが現れた。彼は、三人を廊下に連れ出すと、「ドクターは、今後、君たちとおおっぴらにいるところを極力見られたくないと思っているんだ。君たちのためにもね。明日から、行きと帰りは

私が、さっき入ってきた裏口まで迎えにいくから、来る直前に、学校もしくは、すぐ外の公衆電話からここにコールして」
番号だけが書かれたカードを渡される。テッセンは、それこそ、魔法にかけられたような気分で、黒髪のアジア系の男性を見つめた。
「ん？　なにかな。ええと、テッセン――くん」
「いや、べつに」
スリジエの胸には、医療資格者である赤い十字の紋章をつけたピンがあった。検診に来た学生だとカモフラージュする気だな、とテッセンは思った。
「あ！　いやだわ、ハエが」
エレナが、目の前を手で払う。一匹のハエが、廊下を悠々と飛び回っている。潔癖症らしく、彼女は眉をひそめる。
「普通のハエだね。ならべつに」
スリジエが気にしたのは、虫の形をしたスパイ機器が、一時期横行したためだ。しかし、それは、ごく普通のハエだった。テッセンは、
「あんたになら、蝶か花のほうが似合うだろうにな」
エレナに向かって言った。突然の褒め言葉に、おさげを揺らして振り返ったエレナだけでなく、ミシェルまでがきょとんとした顔になる。
「え？」
「なんでもない」
三人は、スリジエについて、研究所の外に出た。彼が導いてくれるルートが、カメラの届かない場所だということに、テッセンは気付く。
表玄関には、まだ、警察関係者たちがいるらしい。風にのって、声が聞こえた。
近くの公園まで送られたあと、三人は別れた。テッセンとミシェルは、寄宿舎へ。エレナは、ホストファミリーの待つ家へ。
ミシェルが、友人と外で夕食をとる、というので別れたあと、テ

ッセンは深くため息をつき、舗装された道路の上に立ち止まった。
一人になって、ほっとしている自分に気付く。
街灯が明るく、彼の影を路上に三重写しにしていた。
「面白いものは見られたか？」
答えはない。
しかし、間違いないことを、彼は確信した。
その証拠に、テッセンが歩き出すと、羽音をさせて、一匹のハエがついてきた。

3―2

テッセンの下宿は、市が借り上げて提供している、アパートメントの一室である。オールドアメリカンの外見を持つレンガづくりの建物。その一棟で、テッセンを含む平安市からの留学生が暮らしていた。年も専攻も異なる四人で、全員が男である。

彼が帰宅したとき、蓬莱大学に通うキクノスケと高等部三年のアツロウは、すでに夕食をすませて自室にひきあげていた。中等部二年のシゲキは、今晩は留守にしますという書置きをテーブルに残している。誰も居ないことにほっとしながら、テッセンはダイニングに入った。

洋装にはいまだに慣れない。浴衣に着替えて帯をしめると、ようやく腰がすわった気持ちになる。ミネラル入りのお茶のカップを持って、ダイニングから移動する。今晩は自分の部屋に閉じこもろうと、彼は、部屋に鍵をかけた。今日のできごとを先輩たちに話すことなどとてもできなかった。個人主義のゲットーらしく、いずれの部屋にも、立派な鍵がついているのがありがたい。

「雪は真っ白、桜は血色」

大きく音程を外したが、歌をくちずさんで窓を開ける。ハエではなく、一匹のバッタが、二階にあるその一室の窓枠に飛び乗ってきた。まばたきのない緑の目をぎょろりと彼に向ける。

それを意識しながら、彼はベッドに寝転がる。

この、奇妙な感じ。

ホームシックとも違う、母への追慕とも違う、梅雨の空に、突然雲が割れて日光が差し込むような淡い気持ち。

スリジエからもらった契約書を、ベッドの下の鞄に手を伸ばして、摘み上げる。

「口外を禁ず。筆記を禁ず。使い魔への感応による示唆等、関係者外への漏洩は、その怖れのある行為を含めて一切を禁止し、得た情報に対しては当方の許可なく個人的見解の保持を禁ず。――」

スリジエは、ごていねいに、日本語の契約書まで用意していた。報酬が破格なのがにくい。明日、その気があるならサインをしておかなければならない。

テッセンが黙っていると、バッタは、彼のプライヴェートまで邪魔はしないよ、というように、一度だけ空中に垂直に飛び上がり、去っていった。意地が邪魔して、行くなよ、とも言えない。

額に手の甲をあて、高い天井を見る。

――上天気の五月だった。

留学する前、彼がサヨラに会いにいったのは。父親への義理ではなかった。その日、彼は、正式な破談に先駆けて、本人に直接断りに行ったのである。

「ああ。……くそっ」

明日から本格的になる『魔法を現実にする実験』というものについて、ちゃんと考えなくてはならないはずなのに、彼が今思い出すのは、婚約者になるかもしれなかった少女のことである。

「ここは私の終の棲家じゃ――」

歌を口ずさみながら、ごろりと寝返りを打つ。打ち消そうとすればするほど、その日の光景が脳裏にまざまざとよみがえる。

平安市の北東部には、黒々とした森が茂っている。人が立ち入らないその森は、全域にわたって、僧侶、神官、修験道者の修行場となっている。山全体が神域だった。

ふもとからなだらかに傾斜して、高さは五百メートルにも満たない。気楽に上れそうな登山道もある。いかにも行楽にうってつけ――しかし、誰も近寄ろうとしないのは、このあたりが鬼門だからというわけではないが、たちのわるいゴーストや、獣精がよく出るからだ。

円城寺サヨラは奇矯にも、そこで一人で暮らしていた。修行場へ

つながる山道の中腹から、枝分かれした細い道の先に、一軒の庵がある。すぐそばには、小さな泉があった。泉は、石灰岩が風化し、地盤が地下に崩落してできた穴が、長い年月を経て苔むし、清水が湧いてできたものだ。獣たちの水のみ場となっている。

五月の良い天気の午後だった。先方の指定を無視して時刻前にそこへ着いた彼は、気まぐれで、庵の玄関先を尋ねるより先に、泉へ下る道をおりてしまった。そして、そこで、少女と、数年ぶりの再会を果たしたのだった。

「あら」

その人物は、着衣のまま、泉に腿までつかって桶に水を汲んでいた。ちょうどいい気候だとはいえ、寒々しい姿で少女が振り向いたとき、おいおい想像と違うぞ、というのが、彼が最初に思ったことだった。人の死にかこつけて呼び出すような女だから、いやな奴だろうと予想したのだ。自分より先に高等部まで出ているからには、こまっしゃくれて、高飛車で――ミサビに告げたサヨラ像は、彼が想像で作り出した人格だったといってもいい。本当は、彼女に関して、テッセンは何も覚えていなかった。

「テッセンさま？」

しかしそこにいたのは、まるっきり、まだ子どもっぽい少女だった。驚いて立ち止まった彼に向かって、困ったように微笑んで、申し訳なさそうにテッセンの足元に視線を送った。

「ああ――、失礼」

彼は、足元に、畳まれた上着と手ぬぐい、下駄を見つけて、あわてて体ごと反転した。サヨラが水をかきわけて砂地にあがり、身支度を整えるのを待った。

「ようこそいらっしゃいました。わざわざお呼びたてした無礼をお許しください」

年齢につりあった、やや舌足らずな声に振り向くと、紺絣の着物に細い帯を締めて、彼より頭二つ分小柄な少女が頭をさげていた。簡潔なその服装が、華奢な子どもっぽい体の線をあらわにした。円

城寺家の箱入り娘とはとうてい思えなかった。手にさげた桶には、枇杷と夏みかんが、ずっしりと水に沈んでいる。
「午後には波が変わるのですが、うっかり失念しておりまして。おかげで、冷やしておいたものが、桶からこぼれて、ずいぶん遠くに――」
「貸せ」
重そうに水をたたえた桶をひったくるように奪ったのは、何度もシミュレーションした対面の口上が使えなくなったことで、間がもたない、と判断したためである。サヨラは単純に「ありがとうございます」と礼を言った。
庵にあがると、奥の座敷に通された。サヨラは、お茶と、きれいに剥かれた果物の盆を持ってきた。
「お待ちいただけるなら、着替えて参りますが――お見苦しいところを」
拭いただけでまとめた髪から、ときおり雫がおちるが、まったく気にしない様子で、ひたと、指先をそろえた手を膝の前について頭を下げる。
「お久しぶりにお目にかかります。円城寺サヨラでございます」
指定された時刻より前に来て相手の虚をつき、要望を飲ませてさっさと帰るつもりが、逆に虚をつかれた形になって、テッセンは内心、弱りきっていた。日を改めることを考えたが、留学前の挨拶回りや事前研修などがあることを考えると、今日しかない。気を取り直して茶碗を置くと、彼は切り出した。
「藤原テッセンです。単刀直入に申し上げる。縁談の件ですが」
「はい。――あの、申し訳ありません」
顔をあげたサヨラは青ざめていた。黒い髪の一筋が、首もとに落ちた。
「形だけのことなどと――恐れ多くも藤原家にむかって、あまりにも無茶を申しました。さぞお怒りでしょう」
「形――だけ？」

「兄が亡くなって、私をどうにか家に戻そうと、父が策を打ったと、あのこたちが――」
「待て。どういうことだ」
「はあ」
きょとんと顔をあげたサヨラは、不思議そうな顔をしていたが、やがて、頬を赤らめてうつむいた。テッセンが聞き出したところによると、突如現れた二人の縁談話の顛末は、こういうことである。
「タヌキどもめ」
テッセンは激怒した。
「すみません」
深々と頭をさげたサヨラいわく、円城寺家の嫡男であるミサオが事故死してからというもの、跡取りとしてサヨラが家に帰ってくることを、彼らの両親は切望し、時には、それは命令に近いものとなったという。しかし、サヨラは家を出た身だった。彼女の性格と体調上の理由が、このわびしいひとり住まいだったのだが、すっかりここの生活に慣れた彼女は、今さら街へ戻ることが嫌で嫌でたまらない。兄が死んだから自分なのか、という思いもあった。ふさぎこんでいたところに、しかし、父親からの使い魔が、妥協案を持ってきた。
サヨラがここで生活をしている理由は、けして、人が嫌いとか世俗は穢れているから、ということではない。あくまでも、仕方なくここに住んでいる、というだけなのだ。だからこそだろう、人一倍、彼女には、外の世界への強い憧れがあった。「本当は、街で暮らせたらいちばんいい、とは思います」――消えそうな言葉通り、座敷の隅の本棚には、流行の雑誌があったし、床の間には、西洋絵画のレプリカや清朝の壺やら、舶来の帆船の模型などがあった。すべて、家族や友人からお土産としてもらったものだという。
彼女は、特に、外国というものに憧れていた。父親が目をつけたのは、そこだった。
「そこで暮らしたいなら暮らせばいい。だが、藤原家の末弟が、今

度、蓬莱市へ留学する。最近聞いたのだが、末子とはいえ藤原家の本流、帰国したら縁談が決まっているとかなんとか。その前に、お前と会ってもらうように、当主に私がねじこんだ。一度でいい。一度だけ、ちゃんと帰ってきて、送別会に顔を出せ、でなければこれっきりになるぞ」――

「それで、一度家に帰ってその会に顔を出したら最後、私はここに戻してもらえなくなるだろうって、そういう考えなのだって――その、この子たちが（と、彼女は、そばに飛んできた蝶々をさした）。それで、その――父は、そちらのお父様にも頼んだのだそうです。形だけでもいいから、その気にさせて欲しいと。父と貴方のお父様、お二人は友人同士ですから。それで」

「じゃあ――この話は」

「すべて、私を家に戻すためです。私が昔、外国を見てみたい、よそのゲットーを見てみたい、と言っていたのを、父は覚えていたのだと思います。貴方が蓬莱にいらっしゃる、ということで、何かお話して――お帰りになったらどうか、あちらで見聞きしたものについてお話をしにきて、と頼むとか、そういうことなら、ぜひ来るだろうと思ったのでしょう。それに――テッセン様と、他のどなたかとの縁談がまとまった、というなら――」

沈黙がおちた。

彼女の横には、黒い揚羽蝶が三匹、ひらひらと空中を飛んでいる。

「覚えておいでではないでしょうが」

彼女は、庭のほうに目をうつして呟いた。開け放たれた縁から、深い緑と泉の水面が見えた。

「昔、藤原様のお宅の御慶の会で、テッセン様にお会いしました」

彼女が飛びぬけていたのは知能だけではなかった。彼女は、強すぎる精神感応力を持っていた。それは、粒子操作にはむかなかったが、ゴーストや、かくりよのものたちと渡り合うにはうってつけの能力だった。ゲットーで育った人間のなかには、まれに、彼女のように、現世でいわれる、いわゆる霊能者とか霊媒とか、シャーマン

と呼ばれるようなものがいて、円城寺サヨラもそのひとりだった。彼女は特に、小さいものの声をよく聞いた。弱い精霊、弱い魂。弱い虫たち、といったもの。虫たちを、使い魔を持たない平安市の人間に、使い魔のように使えるよう仕込みを行って、月いくらで貸す――いわば、虫たちの派遣業務で、今は生計をたてていた。若くして独立できたのも、このおかげである。学業の修了を急いだのは、ともすると心があちら側にいきがちで、虫に囲まれて暮らす自分への世間の目が厳しく、街での生活が辛くなってきたから。じぶんが出ても、円城寺家には兄がいるから大丈夫だと信じていた。

しかし、思い残すことのない街の生活にも、ひとつだけ、未練があった。

前述の御慶の宴会で、所在無い彼女が、自分の能力を恥じて壁際でふさぎこんでいたとき、一人の無愛想な少年が、彼女に、ジュースのグラスを差し出して、「気分が悪いなら、あっちで寝てろよ」と、手をひいて別室へと送ってくれた。おそらく、その少年は、彼女の能力を知らなかったのであろう。虫に囲まれた不気味な子、人の考えを読むいやらしい子、というのが、そのころの彼女の評判だったから。躊躇なく手を引いて、「熱くはねえな」と額に額をあて、ソファに座らせ、どこからか毛布まで出してくれた。知らないのだろう、と彼女は思った。知らないのだ、だからなのだ――しかし、どうしても、その“無愛想で優しい”少年が忘れられなかった。

「私は、今は自分の力をコントロールできます。メディテーションや、離魂術や、そういったものの組み合わせで、虫や動物や人間の魂の区別がつかなかったころのように、のべつまくなしに、触ったりすれ違ったりした他人様の考えを読むということはありません。しかし、その当時は――この、ひとの心を読むという力ゆえに、父は私を、外交官にむいているとして溺愛しました。今もってなお、私を家に戻そうとしているのがいい証拠です。幼少時代の、じぶんでも恐ろしくなるほどのあの状態を、父は忘れられないのです。ですが、おかげで兄には申し訳ないことを――兄は、私を妹にもった

がゆえに、無茶をせざるを得なかった。何をするにも、まず妹の私。順序が違うと何度も申し上げたけれど、父は聞く耳を持たなかった。兄はどんどん、私と父から離れていった。私が必要に駆られて取り組んだ勉学を、父がなおさら褒めたものですから、余計にそれが、お兄さまには歯がゆかった――そう、いつも感じました――だから、」

「ああ、それでか。勉強ばっかりしてるなと思ったよ」

「私のせいなのです」

「いや、お前のせいじゃないだろう。ミサオは、じゅうぶん優秀だったよ。お前だってやることをやっただけだ。親父のほうが悪い」

「と、今なら私もいえますが――当時は」

サヨラは、苦笑した。

「――テッセンさまが、今日、来てくださってよかった。兄のことを書けば、いらして下さると思いました――優しいおかたですから。とにかく、そのパーティーで――私を助けてくれたのが、のちに、藤原家の末の息子さんだとお聞きしてから、ずっと……私――だから、」

先は途切れたが、さすがに、無頼漢のテッセンにも悟ることができた。

「まさか、なあ」

天をあおぐ。何を話しにきたのか、そのとき、テッセンはすっかり忘れていたのだが、

「はい……、すみません。大変なご迷惑をおかけしました」

「べつに、そういうわけなら、迷惑とは」

「いいえ」

サヨラは恥じ入るばかりだった。その様子を見ていると、テッセンの心にも、妙な感覚が湧いてくる。ふと、彼女の乾いて解けかかった髪が衿から滑り落ちて、胸元まで流れた。細い指先でそれを払う。小づくりのあどけない顔。幼いな、というのが彼の感想だ。しかも、それなのに、聞き分けがよすぎる。外見と年齢のつりあいが

とれていない痛々しさに、テッセンは胸をうたれた。
　ああまでミサオが自分を敵視していた理由も、すとんと飲み込めた。弟ならまだ諦めがつく。しかし、こんな妹がいたら――しかも、そいつが、自分と正反対の、天敵ともいえる無法な乱暴者に憧憬を抱いているとしたら。
　サヨラは「申し訳ありませんでした」と、嘘の縁談についてひたすら謝った。
「私は、もう、ここを出るつもりはありません。円城寺家とは縁を切って、山を降りることはもうないでしょう。貴方さまとも、もう、これきりに。ですから、どうか、今度のことは、どうかご勘弁を」
「ここは私の終の棲家じゃ――か」
　ふと、泉におりたときに少女が歌っていた歌の一節が、テッセンの口からもれると、サヨラは顔をあげた。
「本当に、お前、ここにずっといるのか？」
　その年で、ひとりきりに慣れて一生、と彼が、眉間にしわを寄せて尋ねると、覚悟した表情でうなずく。
「もう慣れました。あの、円城寺家の変わったお嬢さん、という目で見られるよりは、ずいぶん楽ですもの。もう、あんな思いはいや。ここは本当に、私によく合っています。この子達を使いに出せば、なじみの店から、入用のものは届けていただけますし」
「家は。――帰る気がないとするなら、どうするつもりだ」
「私も兄も養子でした。これからでも、もっと相応しいお子さまがいくらでも見つかるでしょう。外交官の跡継ぎに向いたお子が。育てていただいたご恩がありますが――父のことです。もう、めぼしはつけていると思います」
「夢は？　外国を見たくはないのか。外には、面白いものがたくさんあると思うぞ」
　テッセンが、床の間に視線を向けると、はじめてサヨラは悲しげな顔をしたが、黙って首を振る。
「いいんです。それは……見られたらいいとは思いますけれど」

「せっかくこうして出向いたんだ。わがままを言うなら、赤の他人に限る」
彼は立ち上がり、縁側に出た。泉の上に、鳥が羽ばたいている。木漏れ日が、小さな庭にさした。
「虫はどこにでもいるだろう。外国にも、どこにも」
「それは、そうですが……？」
「俺は、お前のその、虫どもと通じる能力がどの程度かはわからんが。誰か、いい、という奴がいれば、そいつの魂のどっかに結び付けて、虫と視界をリンクしたりできるんだろう。そういうことができる、と聞いている。俺は、蓬莱に行く。お前、本当に、こんなチャンスを逃す気か？――俺は、こう見えても、病人と十年暮らした。身動きできないものの頼みは、聞きなれてる。せっかくここまで来たんだから、ついでだよ。乗りかかった船だ。これも、なにかの縁。もう一度言うが――見たくないのか」
しばらく黙ったあと、サヨラは目を見開いて、テッセンを見上げた。ほの暗い座敷に正座した少女の体が、その瞬間、かすかに震えた。
「見たい――です」
庭の木には、虫たちの餌箱がかけてあった。虫愛ずる姫の静かな日々が想像できる。
どんなに質素な暮らしをしていても、この少女は高貴だ、とテッセンは思った。姫君と呼ばれるのに相応しい。けして美人とはいえないが、いたいけで、控えめなところが、いじらしい。おそろしく自制ができている。言葉のはしばしから感じられる頭のよさもいい。頭のいい異性をかわいいと思ったのははじめてのことである。
テッセンは、庭を見たまま、振り向くことができなかった。自分がどんな顔をしているのか、自分でわからなかったのだ。ただ、猛烈に妙な気分だった、というのだけは言える。
「見せてやるよ」
それが、リヒトに感じる兄貴心と同じものだと、そのとき彼は思

ったのだが、その後、話を聞いたリヒトとミサビは、どうだかねえ、と笑って肩をすくめた。
そういうわけで、蓬莱で、彼は完全に一人きりではなかった。虫に魂を預ける、というやりかたで、蓬莱じゅうを彼と見ているものがいた。
絶対に口外してはならない魔法の諸々も、だから、彼女は知っていたわけである。

3―3

「かくりよのものにも種類がある。現世で元、獣や人だったものが、死んだ後に何らかの作用によってかくりよに導かれ、そこでまた人や獣のかたちをとる。彼らの姿は非常に不安定で、自らの魂の記憶やイメージによって、ひとまず形をとどめていはいるが、基本的には魂のみの存在である。なぜか、彼らのあいだだけでは、英語とかフランス語とか日本語などの言語感覚が消失され、私たちには理解できない共通語や、テレパシーで意思の疎通を行う。そして、人間と契約をすると、主人の使用言語をあっという間にコピーして、主と同じ言葉を喋り始め、主が好む動物やものの形をとる。いわゆる、超能力だ。そして、彼らは人間と契約することで、人間の世界と自分たちの世界を自由に行き来できるようになる。彼らにはまた、時間と空間の境界があいまいだ。呼ぶものがいれば、ただちに、そのものの元へ駆けつける。異界から、炎や水を召還するには、彼らの手助けが不可欠。そのために、君たちには、いちど、かくりよというものを体験してもらわなければならない。魂だけになって」

「その――訓練は、かなり高度なはずですが」

エレナが首をかしげると、スチュアートはうなずいた。

二日目の講義を、彼らは受けている途中である。スチュアートの居室は、その日も乱雑だった。

「言われたとおり、使い魔を連れてきてくれたかね」

「あ、はい」

彼らが呼ぶと、それぞれの相棒が、姿を現す。ミシェルの相棒は黄金の毛並みの大型犬で、エレナの相棒は、目の大きな子鹿だった。テッセンはいうまでもなく、黄色に風切羽の一筋だけが赤いカナリア、アルリシャである。

「鳥かあ――」
スチュアートはがっかりした顔をした。
「鳥だとなにか問題が？」
むっとしながらテッセンが問い返すと、
「体の小ささは単純に、力の大きさだ。さらに、食物連鎖の上位にいる動物の姿を取れるほど、使い魔の能力は高い。君が、手紙のやりとり専用で、その小鳥ちゃんを使っている、というのなら納得するがねえ」
スチュアートは額に手をあて、やれやれというようにため息をつく。
「あんた何様や！？　うちのぼんに余計なこと吹き込んだら承知せえへんどお」
タエコの影響で、妙な関西弁を喋るようになったアルリシャが、甲高い声で叫ぶ。スチュアートは肩をすくめるだけだった。さしもの天才も、日本語の、地方言語まではカバーしていないのだ。テッセンは「落ち着け」と言ったが、しばらくアルリシャはぷりぷりと怒っていた。
「まあいい。とにかく、だ。いきなり君たちに幽体離脱しろともいえないから、こちらで用意した。スリジエ、配って」
「かしこまりました」
「なんですか、これ」
渡されたのは、カチューシャのような金属の板である。さらに、黒い輪っかのようなものが四個ずつ。
「頭と手足にはめる。それは、君たちの魂と魄を一時的に分離させるものだ」
「ここで、ですか。死にませんか？　素人がへたにやっちゃいけないって習いましたけど」
「専門外だな」
と、スチュアートは肩をすくめた。
「心臓や脳の状態はこちらでモニターしてるから、大丈夫。こっち

だよ」
スリジエが苦笑した。スリジエのほうがよほど頼りになる、と三人は思った。今日の彼は、全身に白いスーツを着て、頭も滅菌カバーで覆われている。彼の先導で別室に移動すると、「服の上からでいいから、これを着てね」と、狭い小部屋で、黒いゴミ袋のようなものを渡される。頭を出す穴のある、長いマントのようなものだった。
黒いてるてるぼうずと化して、三人は部屋に入った。そこは、医療関係の器具が並んで、ベッドが三つ用意されている。手術室のようにも見える。
カチューシャと腕輪、足輪を装着して三人がベッドに横になると、スリジエが、大きな機械の前に立って、何かを操作し始めた。
「呼吸を整えます。ガイダンスが頭の中に聞こえると思うので、そのとおりに、ゆっくり、ゆっくり――」
これは、検診でも経験がある作業だ。三人は、すんなりと、半覚醒の状態に入る。普通は、ここで、脳波や心音をチェックして終わる。しかし、今回はその先があった。
「じゃあ、経穴との連結解除します。手足が冷たくなるけど、動揺しないで。そのあと、引かれる感覚があると思うけど、がんばってその場にとどまるように。けっこう衝撃を感じるかもしれない、覚悟して――1、2、3！」
次の瞬間、テッセンは幽霊になっていた。正式には、幽離体、とよばれるもので、魂だけがハクの外に飛び出した状態である。隣には、色彩をなくしたミシェルとエレナが、彼と同じように浮かび上がっている。
「この状態で、使い魔たちを呼んで」
「――“アルリシャ”」
「はいな。あ――！　ぼん、なんや、私と一緒になったなァ」
アルリシャが飛んできて、嬉しそうに言った。幽離体の彼に触れると、彼女の輪郭が、やわやわと溶けはじめる。やがて、カナリア

の姿は消えて、彼女は、魂だけ――にじみそうな玉のようになる。
それは、手のひらに乗るほどの黄色い温かな光だった。
初めて会ったときを思い出す。
まだ、彼が４つか５つの子どもだったとき、縁側で空を見上げていたら、不思議な光が飛んできて、目の前の老松の枝にとまった。
それが何と呼ばれるものかも理解していなかったテッセンだが、不思議と、その光は怖くはなかった。ゲットーへ移り住んで来たばかりの道祖神と、出生から波乱の船出をしていた子ども。彼女が言葉を理解するやいなや、ひとりの子どもと一つの魂は、すぐに打ち解けた。どういう契約のしかたをしたのかも覚えていないが、そのくらいすんなりと、アルリシャとテッセンは仲良くなった。
「“やっぱ、お前が俺の相棒だよなあ。間違いないな”」
「そうやあ。うちが、ぼんのツレやさかいな！」
その声は、遠く近く、粒子の揺らぎのなかから聞こえた。魂だけになると、お互いがどんなに近しいかよくわかる。
ミシェルは、大きな白い光に全体が見えないほど包まれ、エレナは、胸いっぱいに青い光を抱きしめている。テッセンの光はささやかだったが、彼は満足していた。
――鳥の形しかとれないほど、アルリシャが精霊として下位でも、やっぱり、俺にはこいつが一番あってる。
その、テッセンの様子を、少し苛立たしげに、カメラを通じて、別室からスチュアートは見ていた。
「いかんな。あれじゃ、たかが知れてる」
「まだまだ、これからですよ」
インカムにむかって、スリジエは答えた。
「さて、おさんかた。聞こえるかな。それから、使い魔のかたがた」
スチュアートの声は、別室から、マイクを通じてもたらされる。
三人は、いっせいにスピーカーを見上げる。
「――“はい”」
「今から、使い魔の魂のなかで、粒子操作をしてもらう」

「“えっ”」
「“そんなことして、大丈夫ですか”」
「大丈夫だよ」
本当か、と三人はスリジエを見た。スリジエはうなずくばかりだ。
再び、スチュアートの声。
「と、同時に、異世界の――ひとまず今日は、炎を――君たちの粒子と結びつけたものを、使い魔に記憶してもらう。君たちの使い魔の能力の範囲内の炎だ。これは、本物の炎ではなく、炎の幻影といっていいかな。かくりよの炎だから、現実の肉体とつながっている君たちは、何も感じないはずだ。ではいくよ。スリジエ、いいかい」
「大丈夫です」
「では。カウントのあとで、操作してくれたまえ。――3、2、1、ゴウ」
テッセンはいうとおりにした。しかし、その瞬間、すさまじい悲鳴が使い魔たちからあがる。アルリシャも例外ではなかった。彼女の魂が、はじけそうに震え、テッセンの手の上でのたうちまわる。
「いやあ！　やだ！　熱いよう、ぼん、ぼん！　何やこれ、やめてや！　いややあ！」
「“おい――スチュアート！　何だこれ――アーシャ！”」
「いやや、熱っつい、お願い、やめて、やめて！」
「――アーシャ！！」
止めなくては、と思った瞬間、テッセンは、自分の体に戻っていた。起き上がって、空中をふらふらと漂うアルリシャの光を、あわてて手のひらで捕まえる。彼女は、カナリアの姿をとらなかった。光はいつもの輝きをやめ、ぜえぜえと息を切らすように点滅する。
「どういうことだ！？」
「君の能力と、使い魔の能力がつりあってないんだよ」
冷たい声がスピーカーから降ってくる。
「他の二人を見ればいい。たしかに、使い魔は少しは苦痛を感じるはずだが、君ほどじゃない。君の力なら、うん、もっと大きな炎を

出せるはずだよ。だけど、使い魔がそれを受けきれないんだね」
テッセンが見ると、ミシェルとエレナは、心配そうな顔をしているものの、彼らの使い魔の光はなんともなっていない。
「まったく――ねえ、君、なんでそんなのが相棒なの？」
心底がっかりしたような声。他の二人も、幽離体のまま、気の毒そうな顔で、テッセンを見ている。そうやって、お前の使い魔は弱い、と突きつけられることは、苦痛だった。テッセンのプライドを刺激した。
「弱くてなにが悪い」
しかし、テッセンがアルリシャに求めたものは、そもそも、強さではないのだ。今後、さらに彼女を傷つけるとしたら、腹は決まっている。
「冗談じゃねえぞ。俺はおりる」
テッセンは、アルリシャを手に抱えて、黒い上着を脱ぐ。ベッドを降りようとすると、スリジエが「だめだ」と、横から言った。
「契約破棄は認められない」
「じゃあ――じゃあ、どうしろっていうんだ。こんなことを続けたら、アルリシャが消えちまう！」
曖昧な気持ちでサインしたことを、彼は後悔した。
「だけどねえ」
「だけどじゃねえ！」
「ぼん――うち、うち、大丈夫や……」
言ったのは、アルリシャだった。あわてて手のひらに目を落とす。やんわりと、右半分だけ、彼女はカナリアの姿をとりはじめていた。
「うち、大丈夫や。あんなん、ちょっとびっくりしただけや。心の準備しとかなあかんかってん。大丈夫や。ぼん……」
「どこが大丈夫だ。駄目だ。もう終わり」
「そんなに心配なら、別の手もあるよ。君の力を削る方法だけど」
「え？」
やれやれ、という声がスピーカーから降った。

「召還に使う君の粒子を抑制する。使える魔法の威力は、そのかわり、ぐっと弱くなるけど？」
「それをはじめからやれ！」
拳を叩きつけるかわりに、彼は叫んだ。アルリシャは、大丈夫、というように、片羽だけで羽ばたいて、宙に浮かび上がり、彼の顔に顔を寄せる。
「ええんや。うちがんばるさかい。な、ぼん。そんな、怒ったり悲しんだりせんとって。あかんわよ、そんな、ぐるぐる、万華鏡みたいに心の模様変えとったら。寿命縮んでまうよ？　なあ？　うちは大丈夫や。なんてことないわ、これしき。なあ、ここがんばったら、ぼん、もっと強うなれるんやろ……」
「――お前はそんなこと考えなくていい」
彼は言ったが、アルリシャがそれを聞いたかは、わからなかった。
二日目は、それで終わった。

3―4

「精神力が弱い」
スチュアートは、渡された脳波のグラフを見ながら、おもいきり顔をしかめた。実験中の、生徒たちの健康状態を数値化したものだ。テッセンのものに目を落として、彼は嘆いた。
「使い魔と仲が良すぎるのも考えものだね。あれじゃあなあ」
生徒たちに、最初に説明したはずだった。使い魔の能力こそ、魔法を使用するのにもっとも重要になる、と。
とにかく今は、かくりよを介してしか、魔法――火や水を呼び出せないのだ。かくりよで受け止められる力が大きいほど、現実世界でも魔法は“大きい”。使い魔の能力が、すなわち、魔法の威力であった。スチュアートにとって、アルリシャはその点、最悪だった。せっかくの被験者の能力も、あれでは、と、本人とは違う意味で、とても悔しがっていた。ほかの二人にしても、犬と小鹿ではたかが知れている。
――これまでの、使い魔というものに対する考えも、魔法が世に出た以上、世間一般にあらためてもらう必要がある。ただの気の合うオトモダチでは駄目だ。
彼は、これを機に、使い魔の世界にも、人間世界と同じ実力主義を持ち込むつもりである。使い魔たちの能力をランク分けする規格もすでにできあがっている。魔法とともに、大々的に発表するつもりでいた。
――進むしかない。なんとしても。
次からは、現実の空間で魔法を使わせるつもりだ。扱うのは、幻ではなく、本物。使い魔の魂に記憶した、異次元の力を、この世に出現させる。いよいよ、彼にとっての本番だ。

「しかし――あの、テッセンは期待はずれもいいところだった。鳥がなんといっても、あのまま粒子を操作してくれりゃいいのに。ちょっと騒がれたくらいで、びびっちまうなんてなあ」
「無理もないかもしれませんよ」
そういいながらスリジエが差し出したカップアンドソーサーを受け取ると、受け皿には、チョコチップクッキーが添えられていた。見覚えのある形に首をかしげると、
「小麗さんというかたから差し入れですよ。さっき、事務からまわってきたんですが。メモが入ってました――“老師がんばって”、だそうです」
「そう――とにかく。あんなに見掛け倒しだとは思わなかった。せっかく、私みずから見つけたのに、あれじゃあな。その点、ミシェルはなかなかだ。見込みがある。ありゃ、とにかく、上昇志向とハングリー精神のかたまり」
ありがたく、クッキーをかじりながらスチュアートはひとりごちる。
――テッセンじゃなくて、ミシェルを本命にするか。粒子操作能力もそこそこあるし、使い魔とのつりあいもとれている。
スリジエが心配そうに眉をひそめた。
「精神ケアをなんとかしたほうがいいかもしれないですね。甘ちゃんなのもうなずける、彼はいいところの子ですよ、ドクター。契約書を交わした以上、彼のフォローをちゃんとやらなくては、面倒なことになりかねない」
「それは君にまかせるよ――そうか、いいとこの子か。内部生だったのか。てっきり、家族はいないだろうと思ったのに。でもなんで――あ、そうか。カードに？」
「ええ。ファミリーネーム、聞いて驚かないでくださいよ。フジワラ――でしたよ」
「なんと」
スチュアートは、飛び上がった。

「本当か。まずいな」
「ええ。だから、ちゃんとしたほうがいい、ってことです。外交問題になるかも。でも、そうすると、彼の使い魔が虚弱な小鳥ちゃんでよかったかもしれないです。粒子をあれだけ削れば、本人の魂もハクも、実験で損壊することはないでしょう」
「かえってよかったかもな」
スチュアートはほっとした。フジワラ、という名前は、平安市の“お偉いさん”名簿に入っていて、蓬莱市でも有名なのだ。ひとは見かけによらないなあ、と彼は思いながらコーヒーを飲み、「そういえば」と顔をあげた。
「あのマトリョーシカ――じゃない、チェブラ……じゃないな。ええと、ペトルーシュカ。あれの件はどうなった」
「ああ」
スリジエは顔をしかめた。
「相当混乱してますよ。ドクターはこもりっきりだし、ここは管轄外だから知らないでしょうが、まず、更迭された当時の保管担当者が――今は、別の部署で課長をやってましたね。彼をはじめ、当時の関係者多数が拘束されて戻ってきていません。事情聴取とか。で、いかつい私服捜査員が、関係部署に出入りして仕事にならないって、ブーイングの嵐。マスコミ関係で広報が出ずっぱりで、問い合わせの電話で外線が死んでるので出前も頼めない。生体関連部門のハードワーカたちは、空腹中枢をカットする対処で乗り切るとか、無茶なことやってます――ま、関係のないところは、ちょっとしたお祭り気分ですよ。いまのところ、蓬莱の人間だけが調査に来ているので、まだましだ、というのが、諦めモードのなかでもかすかな希望の光でもあるし。それから、これは、ドクターには嬉しいかもしれません。ヒルガーの支持率が急落しています。そのかわり、レイノルズ・リーの存在感がぐっとましてきた」
「ミスタ・リーが。へえ、そりゃいい、好都合だ」
「それを抜きにしても、近々、挨拶に行ったほうがいいですよ。た

ぶん、彼、気付いてます。貴方がやってること」
「昼間の仕事はちゃんとしてるのにか？」
「ログのチェックが厳しくなってるんです、ヒルガーのおかげで。経費削減用のシステムを、今、所長は出張とかでいないから、彼が代行でチェックしてるんでしょう」
「あ、そうか。でも、見逃してくれるだろう」
「見逃すどころか。これは私の見立てですけど――ひょっとすると逆転タッチダウン、このままいけば部門復活もあるかもしれませんよ。ペトルーシュカの失点を取り戻したいんです、上は。稀代の事態を待ち望んでます。私だけじゃない、みーんな。魔法が――見たいんです」
「そうか」
スチュアートは、ずりおちた眼鏡をひきあげる。ずっとひきしめられていた口元に笑みが浮かぶのを、スリジエは見た。
「そうか」
この男の幸運は底知れないものがある、とスリジエは考える。
初等部、中等部、高等部、と、スチュアート・チャンは一度として成績で首位をとったことはない。物理と霊学が得意だったが、ほかはまるで駄目だった。十代のすべては彼にとって雌伏の時間だった。彼の人生の履歴書は、大学からはじまる。二番手と三番手の持つ底知れない――今にすべてをひっくり返してやる、追い抜いてやる、という、草食動物を狙う獣の目と、耐え忍ぶ精神力、そして、何よりも、逆転を狙うための独創的なアイディアを、ずっと、その灰色の脳細胞に溜め込んで、爆発させるときを待っていた。頭の半分をファンタジーの世界に遊ばせていながら、同じような“夢見る”少年たちと、彼は一線を画していた。彼のファンタジーを見る目は、“しょせんはゲーム。しょせんは嘘。精一杯この世界を楽しんで、ひとときでも現実の辛さを忘れよう”ではなく、“どうしたらこんな世界を現実にできるだろう”であった。膨大な研究ノートがこのとき書かれた。今のスチュアートの仕事は、このノートに基づ

いている。すべて、十代のとき書かれたものだ。
彼が頭角を見せ始めたとき。それは、ちょうど、“魔法”の実現に向けて、各ゲットーで研究が行われはじめたときだった。スリジエの見立てでは、現代のどの科学者たちと比べて、彼ほど、生まれ育つ時期と才能が一致したものはいない。早すぎも遅すぎもしなかった。どんぴしゃりの時期に羽化転生してゲットーで育った。それだけでも幸運といわねばならない。
時計は午前三時過ぎ。スチュアートもスリジエも、研究所では有名なショートスリーパーだが、さすがに連日、一睡もしないで勤務している状態は異常である。
「ふうむ、と。さて――私も、ちょっと家に帰るかな」
スチュアートは、多少の見込み違いはあったものの、順調にいっている状況に、気が緩んだのか、そう言った。
「君はどうする？」
「ああ――装置の完停止まで、もう少しかかるので、もうちょっといます」
「そうか。じゃ、私は居室を閉めよう。今帰れば、二時間は眠れる」
「夜勤の連中に見つからないでくださいよ」
「何年ここにいると思ってる。カメラの場所くらい分かってる。あ、そうだ。彼らの入室情報を消しておいてくれ」
「サー、ボス」
生徒たちが万が一、映像に残っていたら大変だ。これは、極秘の実験なのだ。極秘とは、この場合違法と同じ意味である。外を、警察関係者がうろうろしているこの状況では、何が命取りになるかわかったものではない。スリジエは、ボスを送り出してからコンピューターを操作して作業を終えた。最近のこの時間は、機械の停止を待ちながら、熱い烏龍茶を一杯すするのが日課である。ついでに手紙を書こうと、机に向かって、レターセットを取り出した。
「イフウィルビソゥサラーズ――倒産する会社がたくさん出るだろうな」

彼はひとりごとを言った。
「このまま順調にいって――まず、火を操れるようになるとすると、マッチとライターがいらなくなる。それから、石炭、石油、核燃料などのエネルギー問題が解決する。関連会社は倒産、ガス会社もつぶれるだろう。その容器をつくる町工場、流通業者も痛手を受ける。水――水道は必要だな。浄水ビジネスはかえって盛り上がるかな。風――火や水と組み合わせれば、空調に流用可能。土は、工事用の土、農業用の土、と――召還ビジネスだな」
――もしも、私たちが魔法使いになったら。
世界は大混乱に陥るだろう。スチュアートは予想していると言ったが、ちゃんと考えているかは怪しい。予測を書きつらねながら、深いため息がもれるのを、スリジエは止められない。
彼はどちらかというと、科学者ではなく医者である。また、学生たちが思うほど、“魔法“の当事者ではない。あくまで、被験者の健康を守るために、スチュアートに声をかけられてここにいるのであって、それ以上でもそれ以下でもなかった。五年前、よそのマテ研支部から移ってきて、スチュアートの荒唐無稽な計画を聞いたときの最初の感想は「本気かあ〜？」だったし、実際にチームに加わってからは「科学者ってすごいなあ」であった。そして、チームが潰れたのち、再び彼に呼び出され、協力を求められたときは「ほっといたら死人がでる。それだけは駄目だ、しょうがないな」だった。「どうなっちゃうんだろう」という好奇心もあったものの、多くは、医師としての義務感から働いている。だから、近くにいてもどこか冷めている。
最近は、恐怖も混じり始めていた。
――これは、世界を滅ぼすものではないのか？
数日、彼は、特に深く考え続けてきた。学生たちを使っての実験が始まってからというものは、老婆心を通り越し、明け方、わずかな睡眠をむさぼっているあいだに飛び起きたことも一度や二度ではない。

本当に、誰もが簡単にこれらの魔法を身に着けたとしたら。
使うものによっては凶器になる、これまでの――ナイフ、銃、車、飛行機。そこに加わる新しい概念。
もしも魔法が決壊したら。
「そのときは、人間側に新しい意識を創造しなければ――しかも、それは失敗を許されないチャレンジだ。可及的速やかに行われなければならない。羽化転生したわれわれでさえ、魂は人間のものでしかない。他者に対する優越感、征服欲、自己顕示欲、それらを抑制する理性を、われわれは新しい人類として試される。魔法をつかって敵を倒す、という考えが、あまりに浸透しすぎていないだろうか？　おそらくゲットーは、魔法を、ペトルーシュカをはじめとする新しい武力に対抗する手段として用いるだろう。平和利用できないことが目に見えている。　時間がない――あの天才にとっては、新しい力を作り出すことがすべてで、それ以後のことに、彼は興味を持っていない。本当に大変なのは、魔法以後である、と私は考える。あの、核物質と同じように――まきおこるであろう事故、殺戮、破滅が目に浮かぶ。待ってくれ、まだそのときではない、と、私は、叫びたい気持ちにかられる。もうすこし、受け入れるのに必要な時間をくれ、と。それなのに、私もまた、心のどこかで見たいと思っているのだ。一刻も早く、早く、と。世界を変える圧倒的な力を。思想の更新を。人類の最後の夢である、魔法を。人類に対抗する手段として。われわれは魔法を熱望している。われわれは――」
われわれは。
そのとき、彼は、背後に気配を感じた。
室内には誰も居ないはずだ。それなのに。
それなのに？
ぞっとした。
「ランタ――ナ――」
彼が使い魔の名前を呼んだとき、棒のようなものの残影が目の端にうつる。振り向きざま、粒子の操作で止めようとして、ここでは

使ってはいけないのだと気付いて止めた。生身の手に、ダガーナイフが振り下ろされ、皮と腱を裂いて止まった。そのままナイフを食い込ませたまま、引き抜くように武器を奪い取り――

「どうやって、はいっ――」

ごつ、と鈍い音を立てて、野球バットが、防御した腕ごと側頭部を襲った。衝撃を感じながら、床に倒れこむ。相手は、頭から足のつま先まで、全身を光学迷彩服に包んでいた。視点が定まらない。揺れている布。小柄な輪郭は、まだ少年のようにも思えたが――

相手は、うめくスリジエを放置して、机や、壁際の棚をあさりはじめた。殺す気ではないのだ、とほんの少し安心したが、油断はできない。起き上がろうとしたとき、相手は何かを突き出した。

「殺したくないよ、先生」

「君は」

誰だ。

電流――体中に衝撃が走った。

スリジエは倒れた。

目を覚ましたとき、時刻は午前六時。出社時刻になろうとしている。彼は、殴られた頭の具合をたしかめ、親指と人差し指の間にできた傷の手当をして、スチュアートの出勤を待つ。

何を盗られたかはすぐにわかった。生徒たちのデータをコピーされた形跡があった。話すか、どうするか、スリジエは迷う。

彼は決意を固めた。

3―5

スチュアート・チャンが管理するスペースでの事件は明るみにはならなかった。

「どうしたの、その傷」

廊下や食堂で、包帯を巻かれた手へ視線を向けて、口々に言われる質問には「ちょっと」と笑顔で答える。スリジエの笑顔はそれだけで答になる種類のものである。相手は、たいてい、気にせずすぐに忘れてしまう。夜、生徒たちを連れて訪れた、スチュアートですらそうだったので、生徒たちも気にしない様子だった。

スチュアートは、生徒たちにむかって、マイクごしに話しかける。スリジエは注意深くテッセンの顔色を見たが、彼は、昨日のことなどなかったかのように、冷静な表情だった。黄色い鳥も、手の上でおとなしくしている。

「水、土、風は、炎ほどの衝撃はなくてなによりだった。では、これらを、自傷することなく任意の場所に召還する実験を行いたいと思う。場所を移動するよ」

医務室から、巨大な箱のような部屋の中へ。全体に鋼板がはりめぐらされ、不燃物質でできた壁紙が張られている。チームがつぶされる前に、スチュアートたちが実験していた場所である。

ここで、最初の事故が起こった。

炎を手の先に出現させるはずが、炎と風を同時に呼び出してしまったのだ。風向きをコントロールできず、頭から灼熱の炎をかぶってしまったのはエレナである。瞬時にスプリンクラーが作動したので大事にはいたらなかったが、頭から肩、腕、胸といった上半身の皮膚を、広い範囲にわたって火傷した。スリジエがもっとも心配したのは、炎を吸い込まなかったか、ということである。炎が肺にま

で達すると呼吸困難に陥る。
「パルドネ・ムヴ、エレナ――エレナ」
すでに、使い魔の責任の範囲を外れていた。ここからは、人間たちの技と力の範疇である。契約したもののもとに、魔法は直ちに現れる。使い魔は、いてもいなくても良かった――しかし、その日も、エレナに寄り添っていた小鹿はそばにいて、今も泣きながら、横たわるエレナに向かって必死に呼びかけている。スリジエの見立てでは、危険な状態ではなかった。皮膚を張り替えればなんとかなる。二人は、隣に用意された処置室に入って行く。その場には、黙ってエアウィンドの画像を叩くスチュアートと、男子生徒二人が残された。
実験場は、小さな体育館のような、ドーム屋根の円形をした部屋である。
「危ないんじゃないですか、これ」
ミシェルが低く言う。彼の隣にも、やはり、大型犬の姿がある。
「何か、対処法はないんですか」
はじめて、彼らを恐怖が襲っていた。自分の手から、火や水が、粒子をコントロールするだけで瞬時に現れる。マッチをこするとか、ランプを持っているとかいうものではない。本当に、手の先からそれらが現れるということの意味を、身をもって体験すると、いかに普通じゃないかがよくわかる。
コントロールできる粒子の量を減らされて、ごく小さな火しか扱えなくなったテッセンでさえそうである。
ついさっきまで、彼の手の平の上、せいぜい、五十センチ四方の空間に現れたものは、本物の、燃えている炎だった。オレンジの光。熱。集中をやめると、瞬時に消える。自分が人間ではなく、機械になったような気がした。生きて動いている、発火装置。
ぞくりと背中があわ立ったのは、恐怖のためだろうか、興奮のためだろうか。
区別がつかなかった。

黙りこむテッセンをよそに、ミシェルとスチュアートは議論を続けている。
「手袋は嵌めてるだろう」
「そりゃ、はめてますが」
燃焼防止のために、彼らは手に、オーブンミトンのようなものを嵌めている。彼らの使い魔が、うろうろとまわりを歩き、飛び回って心配そうな顔をしている。
「とにかく、君たちが呼び出せる、というのだけでも確実にわかってよかったよ。まずは、火、水、風、土に、それぞれはっきりとした粒子操作の区別をつけなければならない、というのも、今のでわかった。動物実験では、こちらで区別して出させたんだがなあ。君たちには思考というものがあるから、それでなんとかしないといかん。とすると、やっぱり、そうだなあ――いずれは、呪文というものを作らなければならんだろうね」
「呪文」
「そう。魔法使いが、ほら、呪文を唱えるだろう。そうすると、魔法が発動する。音声認識で電気がつくみたいなもんだよ。音をきっかけにする」
「その呪文があれば、火と風を同時に呼び出すなんて事故もなくなるんですか」
「いずれはね」
「いずれは、いずれは、って――今は？」
「難しいんだよ。世界の共通の言語としては英語でいいだろうが、その言葉は、われわれの考えを述べるための、話すための、書くための言語だ。詩を書くには詩の言葉が、魔法を使うためには魔法の言葉が要る。他と混同しないようにだ。たとえば、ファイア、という言葉で、魔法の火が現れるとするなら、キャンプの計画をたてるとき、われわれがうっかりファイアと口にしたら、どうだね。仮に、もしそのとき、うっかり粒子の操作までしたとしたら」
「燃えますね」

「そうだろう。言葉をきっかけにする、というのは、なかなか難しい。あらゆる状況で事故が予想される。だから、魔法には魔法言語が要る、というわけだ」
「作ればいいじゃないですか。今、僕らで作れば？」
「君に、そんな才能あるの？」
「いるんですか、才能」
「いるさ。魔法の言葉を作るんだよ――たとえば、火よ出ろ、という言葉を、魔法にするにふさわしい、強烈な、覚えやすい、世界の誰でもが発音できて、かつ、今までのどの文字列にもあてはまらない単語を、そんな、すぐに作れる？　君」
　スチュアートは口を斜めにした。ミシェルは言葉に詰まった。
「もちろん、私にも作れない。作れたらなあと思ったが、どこぞの小学生みたいな発想しか出てこなかった。世界で一番優秀なコピーライターでも募集しないといけないね。だけどまだ、その段階じゃない。とにかく、君たちにかかっている。今は、音声認識なんて余計な付属品について考えている余裕はない。その、ものの基礎をしっかりしておかなければいけないんだから。それに、訓練で、出せるものの区別がつけられたら、それは、世界に先駆けて魔法使いになる君たちの、純粋な強みになると思うよ」
「――はい」
　ミシェルは、しぶしぶといった様子でうなずいた。彼は、三人のなかでは一番、質量ともに大きな“魔法”を使える。そのぶん、危険も大きいので、ぴりぴりしていた。
　三十分ほど、二人だけで、実験の続きが行われた。
　真夜中のレッスンが終わるのは、たいてい、午前二時ごろである。昼間の学校と放課後の部活もある彼は、毎日くたくただった。
　ある晩、同じように疲労困憊で帰宅した彼が、自室でぐったりとベッドに倒れこんでいると、アルリシャが、神妙な様子で彼の肩口にとまる。
「ぼん、お疲れやな？」

「ああ――だな……」
お前も休め、というと、アルリシャは首を振る。
「ごめんなァ、ぼん」
「何が」
「うちのせいで、あんまり、強いマホオ、使えんのやろ」
「危なくなくて、いいだろ」
「せやけどな、うち――」
このまんま、ぼんが弱いと思われてるんは嫌やねん、と彼女はいいかけた。しかし、悪い、眠くて、と呟いて、テッセンは目を伏せる。
そのまま、寝息をたてはじめた。
「……よう、寝えや」
アルリシャは悔しかった。彼女は、ほかの使い魔たちと同じように、じぶんの主を一番だと思っている。それなのに、じぶんのせいで――テッセンの粒子の扱い方は、他の二人に勝るとも劣らない、いや、本来なら、三人のなかでは一番だとアルリシャは思う。ひいきめ抜きで。それなのに……
「うちがなんとかせなあかんのやね」
アルリシャは、カナリアの姿を震わせて、窓のほうを見た。帰ってすぐ、テッセンが開け放したときのまま、ぽっかりと丑三つ時の闇を見せている。溶け込むように、黒い蝶が一匹。
「サヨラさん」
アルリシャが呼ぶと、蝶ははばたきをやめて窓枠の上に止まる。
「こっち、来てくれへんか」
だてに、相棒として何年もそばにいたわけではない。彼女は、テッセンの縁談話も、彼がサヨラに対して妙な感情を抱いていることも知っていた。その妙な感情が、本当は、少年の初めての恋ごころであることも。
母親が亡くなった時、彼女はほとんど、彼の姉やタエコと同じような気持ちでいた。すなわち、これからはじぶんが母親がわりなの

だ、という思いだ。そして、サヨラの話を聞いてからは、彼女はほとんど、息子の嫁になるかもしれない女、という目でサヨラを見ている。嫁を見る、姑の目だった。

「あんな。おりいって――私、あんたに頼みがあんねんけどな」

アルリシャは、両足をそろえてテッセンの肩から、うつぶせた腰におりていく。「なんでしょう」というように、蝶が、彼女のほうへ飛んできた。頭を下げるのはしゃくだったが、それよりも我慢のならないことは、大事な“息子”の価値がみとめられないことだ。

「ぼんのためや。あんたも、そう思て、辛抱して、うちのこと助けてくれへんか。探してほしいヤツがおんのよ――頼む」

蝶は、燐を放ちながら、昆虫の複数の目の光をカナリアの黄色い羽へと向けた。

4　つれあい

人間側の都合など知ったこっちゃない、というのが基本的なスタンスの、かくりよのものたちである。自分たちに多少近い、ゲット一人に対してもそうである。話のわかる、住んでいるところが同じお隣さん、くらいの意識しかない。

当然、スチュアートが学生たちにしいた緘口令も、魔法の実験も、知ったことではなかった。何かまた勝手なことをやってるな、くらいの意識であった。最初は。

人間世界よりはやく、彼らの間では、本当の情報が伝わる。文字を解さず、心でわかりあう彼らなので、仲間のひとりが感じた“新しい力”――すなわち、魔法への戸惑いと焦燥を、寸分たがわず自分たちも感じ取っていた。テッセン、ミシェル、エレナ。彼らの使い魔である精霊や、名もなき小さな神が、かくりよで羽を休めるたびに、彼らのまわりに仲間たちが集まって、匂うように知れる、彼らの記憶映像におののいていた。

今夜も――

「なんですのこれは」

平安市、鎮守の森。平安神宮という場所がある。現世で同名の寺社があるが、それとは違う。単純に、平安市における、神社仏閣の本山のようなところ、というので平安神宮という。一般の参拝客に開放されている場所と、そうでないところがある。もっとも奥まったところにある本殿の境内に立ち入りが許されるのは、免許を持つ巫女や神官、神事の関係者のみ。夜のあいだは、特に、平安市にいる精霊や、神や、そういった、かくりよの者たちの社交場であった。

梅雨はまだあけない。両脇にうっそうと茂った森が、アーチのように境内の上部を覆っているため、木々から滴る雫が、無数に石畳

の参道を、境内を打つ。月の光もない闇夜である。集まった精霊たちの影はなおいっそう濃く、ゴーストは寒そうに身を寄せ合って、動物たちの集会を見物している。
神社の石段には、ひとりの人物が腰掛けている。ゆったりとした着物にうちかけを羽織って、桜色の帯を垂らした、少女といっていい年齢の人物である。浮世離れした眉目秀麗さで、匂うような上品さをみせた。
その日集まったなかで、もっとも高位にある女神だ。その話題をはじめて知った彼女は、眉をひそめた。
「なんということなの。私たちにまで、文句をつけるというの？この毛唐の男は」
彼女が手を伸ばして体に触れた相手は、アルリシャと親しい、鳥の姿をとっている仲間だった。その記憶には、スチュアートの「なんだ鳥か」というセリフと、「使い魔との力のバランスが悪い」という、問題のセリフが収録されていた。
女神がため息をつくのに、
「この、けったいな力が広まったら、私らの力の差が、契約した主たちの力の差になってしまうんでしょうか」
「主たちと、今までどおりのつきあいができなくなってしまうのじゃ？」
「こわいです。どうしたらいいんですか」
「どうなると思います？」
彼らは叫んだ。
「ううーん。そうねえ――」
女神は、安産や家内安全の神として、広く日本で知られている女性である。久しぶりにかくりよを通じて平安市へ遊びにきたら、とんでもない騒動になっていた。これは自分ひとりでなんとかできる範囲を越えているわ、と思いながら、表情を曇らせて、柳眉をひそめる。そのあいだにも、口々に、小さい者たちは、不安な心情を訴える。彼らにとっても、この日やってきた女神が、ようやくご出座

してくださった上位神であったので、ここぞとばかりに上訴した。
老いも若きも、男も女も、そうでないものも、交代で前に進み出る。なかには、乱暴な態度のものもいる。しかし、女神は怒らなかった。いちいち耳を傾け、ときおり、考え込むように、しなやかな指先を紅唇にあてた。
彼らのあいだに、能力の高低差はあっても、差別はない。そういう概念がなかったからこそ、彼らはかくりよに辿り着いて、神の位につくことができたのである。実にさまざまなものがいる。元、人間。妖精。精霊。獣。人間世界とかくりよは、表裏一体だった。人間側になにかが起これば、彼らにだって影響がある。特に、最近彼らが出入りするようになり、定住もしはじめたゲットーは、人界と幽界の中間にあって、人界よりも彼らに近い。そこで何かが起これば、影響もまた大きい。
「魔法ね――僕、それについて、ちょっとだけ知ってます。お姫さま」
やがて進み出たのは、平安市役所職員の相棒である精霊だった。人間の、小僧の姿をとっている。人間は思考も行動も複雑で、姿を真似するだけでも相当の力量が問われる。一同は、てんでに話すのをやめた。小僧が話し始めた。
「その、魔法、というのは――とつくにに、昔からある、想像世界の能力なのだそうですよ。ご存知でしょうか。めふぃすとふぇれすの物語のなかに、錬金術、というのがあって。あれが始まりだってうちの主が言ってました。黒魔術とか白魔術とか、元祖はそれだって。わたしたちの国でも、ほら、山伏とか、修験者とか、巫女とか仙人とか。そういうものが大活躍する読み本があったでしょう。その、神通力を、誰でも使えるように整備したものが、魔法というのですって」
ほおー、と、感嘆の声があがった。中には、まったく何もわからないで、あたふたしている低級の精霊もいたのだ。そうだったのか、というように、彼らは大きく手を叩く。

女神もうなずいた。
「ふうむ。なるほどねえ。一応、私も知ってはいたけれど……。東洋と西洋ではずいぶん様式が違っている、とも聞いたけれどもねえ。魔法、ね。いよいよ、古代から続いてきたその研究が、人間たちのなかで、一つの結実をみせつつあるということなのね」
「あのお、女神さまがたも、不思議な力をお使いになりますよね？」
「ええ。炎とか水とか、雷なんか、得意にしているかたがたがいるわね。でも、私たちはこの能力を、何の疑いもなく今まで使ってきたわ。この能力は天からのプレゼントで、私たちは、どうして自分たちにそんなことができるのかについては、まったく深入りしてこなかった。もとは同じなのに、よくよく思考回路が違うのよね、どうしてかしら――とくに、彼らのような、カガクシャとかブツリガクシャとかいうものみたいに、これを、誰でも使えるようにするなんていう発想は、一度だって。そう――これは一度、本当に、あちらのかたがたともお話をすべきみたいね」
女神は、軽く頭をふった。広がる香気は花の香りである。近くの老猿が、ありがたやと手を合わせる。
「神通力なら、ゲットーの人にも、使えるものがちょくちょくいるわね」
声をあげたのは、ミサビの相棒である、三毛猫のひゅうがである。
「外の世界では、ゴーストなんかも見えない人間は多いわ。でも、ここの人間はほとんど見える。心を読んだり。そういうことができるのはどうしてかしら、って、彼らは、魔的というものを見つけて研究しているけれど、私たちはぜんぜん、今まで意識しないできてしまった。でももし今、あんたの言う魔法ってものが、本当にこの世に生まれたとするなら、ひょっとすると、これは私たちも、よく考えなくちゃならない、ということじゃない？」
「これを機に？」
「そう」
「今から？　今さら？」

「と、思うわよ。でもねえ」
ひゅうがはアルリシャと親しい。そのぶん、彼女の苦しみを、誰よりもよく知っていた。より深刻である。
「この魔法というのは、これから、すぐに、ゲットーのひとたちに広まると思うの」
その場はしんと静まり返る。
「人間ってのは、ものすごいスピードで進化するものだもの。私たちにしてみれば、まばたきする間に、子どもがいつの間にか大人になっている、てのがいい例よ。みんな、分かってるでしょ。だから――私たちの力の差がどうとか、というのも、きっとそのうち、何かで補ったりすると思う。でも、それまで、私たちは、自分たちでなんとかやってかなくちゃ。しかもそれは、本当は、主たちと一緒になって考えなくちゃいけないことかもしれない、って、あたしは思うわ」
「そう――ひゅうが。そのとおりね」
彼女は、腰掛けていた石段から立ち上がり、手を叩いて、不安げな精霊たちを見渡した。美しく笑ってみせる。しかし、彼女とて、内心は不安である。みな平等、と口では言ったが、たしかに、彼らには、能力の差があった。ピンからキリまでいる。妖精、精霊、獣精、獣神、神。精霊神。それぞれ異なる。考え方も、なりたちも。
スチュアート・チャンのセリフが、彼女の脳裏を離れない。使い魔を、ただの道具として見ているのではないかと思う。ただの、魔法を使うための道具として――能力だけにしか、彼は興味がない。それがよくわかった。そして、ああいう種類の人間が、少なからずいるだろうという予想が当たってしまって、悲しかった。
あの目。あの声色――
初めて、人間を怖いと思った。彼女とて、はるか昔は人間だった――しかし、同じ人間でも、今の時代の人間は、当時の彼女たちとはまるで違う倫理や道徳、価値観で動いている。それでも、羽化転生した人間は、まだ、見込みがあると感じていたので、悲しみはよ

り強かった。かくりよをよく知るぶん、そのように振舞ってくれると期待していたのに。やはり、危険な異分子は生まれるのだ。
愕然とする。
一方的に人間にランクを付けられ、感じやすい彼らがそれに引きずられて、自分たちの違いを認識したら？――かくりよはひっくり返ってしまう。争いが起こることを、彼女は何よりも怖れた。長い平和になれた彼らには、争いもいさかいも想像できなかった。
とにかく、“魔法”が、取り扱いに細心の注意が必要な種類のものであることを、彼女は認めた。かくりよと現実世界の絆を強固にするか、壊してしまうか。諸刃の剣である、と彼女はみた。
現実世界で、人や物や国の興亡を幾度となく見てきた彼らであった。栄枯盛衰は、絶対普遍の真理であり、不文律だった。しかし、それでも、いつも、傍観者に徹することができた。信じられたからだ。幾多の危機を経ても、人間は滅びることはなかったのだから、と。だから、今度も、と。
そう――私が怖れているのは、今度こそ人間が滅びるかもしれないということだ、と女神は思い至った。この“魔法”というのは、相当に危険な力である。かくりよと現実世界を、同じレベルにまで押し上げるか、押し下げるか――とにかく、一緒くたにしてしまう。どうも先が読めない。かくりよを介して異次元の炎や水を呼び出す、という方法に度肝を抜かれたが、つまるところこはそういうことだ。
「とにかく、みんなはこの事を、まだ、じぶんの主に言わないで。基本的に、一人か二人の縁のあるおかたをのぞいて、人界には不干渉、という方針は変わりません。仲間たちのこと、心配でしょうし、自分の身の振り方についても不安があるでしょう。でも――とにかく、今は様子を見るしかない。まだ、魔法は、現実に広まってはいないのだから。だから、どうか、このことが原因で争ったり戦ったりしないでちょうだいね。私たち、上のものも考えてみるから」
「はあーい」
その夜は、解散になった。

ひゅうがは、女神に言葉を賜ったことで多少安心して帰路についた。
彼は、男子寄宿舎のミサビの部屋を窓から覗く。そこには、シルルと、見慣れない金髪の少年と赤毛の少年。ミサビを探して、リヒトの部屋に行くと、思ったとおり、そこにはミサビがいた。リヒトとグエン、カンタも揃っている。真ん中の仕切りをどかして、ワンルームの部屋で肩を寄せ合うようにして喋っていた。
――めずらしい。何を熱心におしゃべりしてるのかしら？
耳を傾けたひゅうがは、話の内容を聞いてぎくりとする。話題が、テッセンについてだったからだ。魔法というものがかくりよをにぎわしはじめてから、彼の主たちもまた、連絡の途絶えた友人のことを心配していたのだが、今日こそ、真剣に、彼らは、友人の安否について話し合っているのだった。
「おかしいな」
「よほど疲れてるんだろうか。アルリシャも姿を見せないんだよね」
「たしかに筆まめなほうじゃない。だけど、アーシャにメモみたいな紙を託して、どうしてる、とか、元気か、とか、それすらないって、おかしい。テッセンらしくない」
「だな。最初は、これなら楽勝だって言ってたはずだぜ。観光もできそうだっていってたくらいだしなあ」
「しかも、驚くのが、彼――何も言ってきてないんだよね、ペトルーシュカについてさ。知ってるはずだよね。蓬莱なんだから。どうしてだろう？」
「あ、ひゅうが」
気付いたのはリヒトだった。最近、ひゅうがは、リヒトがなんとなく苦手である。視線を向けられると、何か、自分が透明になっていく気がするのだ。一方、動物好きのリヒトは、ひゅうがを見るたびに嬉しそうだ。今日も遠慮なく手を伸ばしてくる。
「気安く触らないでちょうだい」
「貞操が固いよ、ひゅうが」

「妙なことといわないでちょうだい」
「今、テッセンについて喋ってたんだよ」
ミサビが、リヒトの腕から救出してくれた。居心地のいい腕の中におさまって、ひゅうがはのどをごろごろと鳴らす。
「君、何か聞いてない？　アルリシャから」
「さあーあ。知らないわねえ」
ミサビは、うーん、と口の中でうなり、
「連絡が来なくなって、もう二週間だ。とうとう七月になっちゃった。夏季休暇には帰ってくるはずだけど、その話もそろそろしてもらわないとさ。僕らだって予定があるんだけどなあ」
「ホテルでアルバイトか。今年も、二人とも？」
ミサビとリヒトは、うなずいた。二人は昨年、八月はじめから下旬まで、泊り込みで、市の南東にある湖畔の別荘地でアルバイトをしていた。もとは、ミサビが、飲食店を持ちたいという自分の夢をかなえるため、開業資金を貯めようと、初等部のころからやっていたもので、彼がリヒトを誘った。そのころリヒトも、眠り姫のギンへのお見舞いに、花やプレゼントを買う資金繰りに困っていたので、願ったり叶ったり、といったところだ。夏休みは長いので、自堕落になるのが目に見えている。生活をきちんとする、という目標にもあっていた。今年も、そのつもりである。
「今年は俺、インヴィテーションもあるし。そうだ、滞在先の指定が来たんだよ。見る？――働く予定のホテルだった。ついでに家族に会えるなら、交通費も浮くしね」
「そのついでに相棒探しもしろ、お前は」
カンタが言った。ミサビの腕の中のひゅうがを見ながら、
「アルリシャもいねえんじゃ、お前への伝言がまだるっこしくてしようがねえや」
「いやあ、はは」
別荘地は、鎮守の森の近くにある。鎮守の森には、精霊たちが多い。平安市の学生は、たいてい、初等部のとき、そこへ肝試しがて

ら、自分の相棒を見つけにいく。
「なかなかね」
彼が言葉を濁したときだった。がちゃり、とノックもなしにドアが開いて、寮監と、寮長が顔を出す。
「こらあ、消灯過ぎてるぞ！　部屋に戻らんか貴様ら！」
「あ、すみません」
ミサビとカンタはあわてて立ち上がる。時刻は、完全消灯の十時をだいぶ過ぎている。ばたばたと彼らは出て行こうとしたが、あとをひきうけた寮長――高等部三年生のタツキチが「あ、待て」と、ミサビを引き止めた。カンタだけが出て行く。不思議そうに顔を見合わせたリヒトたちを見て、「なあ」と寮長は首をかしげた。
「お前ら――リヒトにミサビ、えーと、テッセンと親しかったな。あいつ、何かあったのか？」
「え？」
「いや、俺と同室のアツロウが、今、蓬莱に留学しててな。テッセンと暮らしてるんだが。毎晩、異様にテッセンの帰りが遅い、とこのあいだ話していて、なにか、厄介ごとじゃないかと。部活のあと、私費で語学塾に通ってるという話だそうだが、それにしては、様子が変だといっていた。あいつ、あれだろう――藤原家のぼっちゃんだろう。何かあったらと、うちのやつも気にしてるんだ。同じ類？だってこともあるし――お前ら、何か聞いてるか？」
「語学塾だと聞いています。彼、まったくだから、苦労するだろうって事前に自分で言ってました。深夜でも教えてくれる先生を見つけた、と、ついこのあいだ、僕たちも聞いたところです。心配ない、とお伝えください」
「そうか？　ならいいんだが。伝えておこう。ありがとう」
「いえ」
タツキチがいなくなると、ミサビは「なんだろうね」と、心配そうに呟いた。
「厄介ごとか――リヒトの心配してる場合じゃなかったな、彼」

「ああ。おぼっちゃんだからな――テッセンなら、そう妙な気を起こすやつもいないだろうけど」
「誘拐するのに、あんな無茶なターゲットを選ばないだろう。菫殿ならともかく。身代金の線はないね。とすると、なんだろう。学校でのいじめ――もないか。蓬莱だし、テッセンだもんね。うーん、家に関する、政治系のトラブルだったら、お手上げだよ」
「政治はないと思う」
リヒトが、宙を見ながらぼそりと呟く。「そう」と、ミサビは、その様子を見ながら、髪を肩の後ろへはねのける。いくぶん、ほっとした表情になった。
「君が言うならそうかもね。でも、だったら、なんだと思う？」
「根拠はないけど、ペトルーシュカとつながってる何かかもしれない、と、今ふと思った。蓬莱って――シュウ先生が言っていた。今、大変なのだそうだね。その、大変なのの一部に、テッセンも何かかかわりを持ったか――変なのは、アルリシャが僕らのところに来ないことも変だ。テッセンから離れられないとしたら――いや」
「なに？」
「他にも、テッセンについて聞ける人がいる。そういえば」
「誰――ああ」
腕の中で、ひゅうがは身も凍る思いだった。
彼らが口にした名前が、ついさっき、アルリシャの記憶の中に出てきたのだ。やめなさいよあんたたち、とも言えなかった。
温かい腕の中に抱かれ、主の脈を聞く。この幸せがなくなったら。もしも世界が、魔法の力というものを基準にしてまわるようになって、使い魔の能力イコール、主の能力というように変わって――ミサビが、自分の能力に不満を持つようになったら――
恐ろしくて、何もいえなかった。

4―2

リヒトたちが、テッセンの身の安全について心配していた頃、彼らよりもっと上のレベルでも、騒乱が起こっていた。

総府は依然、対応を協議中であった。もちろん、中国、ロシアによって発表された新兵器について、である。

その日、藤原菫は、ようやく電話番を解かれて、総府にある記者クラブへ単独で訪れていた。彼女の手元には、巻紙がある。ペトルーシュカがお披露目された夜、平安市市長、草間士郎が会見で述べた言葉の全文である。

ゲットーの多くは、ペトルーシュカを、人間側からの宣戦布告か、それに先んじての牽制とみた。人間側に、戦う用意はできている、というわけである。マテ研の職員ならともかく、一般の住人は、ハクの盗難についての詳細も知らなかったから、多くの住民にとって、この新兵器の登場は寝耳に水だった。はじめて、現世の人間が、本当に敵になる可能性に気付いたわけである。ことが民間レベルまでおりてきてはじめて、上層部も本気になった。即座にペトルーシュカに関する情報を収集した。武力衝突を想定して、軍ではシミュレーションも行われた。イレギュラーを想定しない場合で、勝率は五分。つまりは、五割をこえる確率で、負ける。

シミュレーションで、彼らの戦力を圧倒的に不利にした理由が他にもある。

もともと、ゲットーは、武力の保持を認められていない。各国の戦争に関与する権利や義務を、最初から持たないからだ。防衛権だけがある。それは、原始的な防衛権である。重火器の類はすべて、現世からの払い下げであり、核やミサイルや戦車といった近代兵器は、製造、取引を禁じられている。もしもの場合の自衛権の発動、

武力行使には、各ゲットーの首長、つまり、市長の許可と、ゲットー保有国家の最高責任者――平安ゲットーならば、日本国首相の許可を必要とする。しかし、これは、万が一にも許可される見込みのないものであった。もしも戦うとするなら、彼らは法を破らなければならない。そして、戦うために法を破れば、法治国家の看板は折られる。批難の集中砲火を浴び、それを理由に、徹底的にやられるだろう。

つまり、ゲットーは、人間たちと戦うことを、本当のところで、想定してはいない。各ゲットーの市長が、どんなに過激なことを口にしようが、喧嘩をふっかけようが、所詮は絵空事にしか過ぎなかったのである――これまでは。

今まで詳細に語られなかったが、ここで再び、ゲットーというものの立場を説明するなら、国家内国家、というのがもっとも相応しい。

隔離自治区は、国内の一部地域でありながら、その国とは完全に独立した、別個の国である。独自の法や文化をすでにはぐくんでいる。

そもそもの、ゲットーの成り立ちから語るなら、起源は古代にまで遡る。

当初、ゲットー、隔離居住区は、ユダヤ系民族の住処として生まれた。独自文化を持つ彼らが、ひとつの場所にかたまって生活していたその場所をさす言葉である。宗教的に少数派であった彼らの行動が、他の住人には奇異に映ったので、衝突を避けるための措置だった。付近住民も、“変わったやつら”が、そこかしこに住んでいるより、わかりやすく一箇所にまとまってくれていたほうがいいので、これを歓迎した。ユダヤ人のほうも、仲間と暮らしたほうがなにかと都合がいい。双方にメリットがあった。こうして、ゲットーができた。

しかし、歴史が下るにつれて、彼らの居住区は、しだいに狭く、重苦しいものとなっていく。石の壁や柵で囲まれ、出入りが制限さ

れる。独自の税が課せられる。地域によって差はあったものの、やがて、社会不安のたびに増大する差別の対象となっていった。そして、第二次大戦下のヨーロッパになると、ゲットーは、強制収容所の意味に使われるようになった。ナチスに集められたユダヤ系民族が、多く、この、隔離居住区に押し込められて暮らすことになったのだ。武装蜂起やそれに伴う報復虐殺も起きたため、ゲットーという名は、民族差別の象徴ともいえる存在になった。

大戦が終わると同時に、ゲットーは消えた。この時代では、人間世界のこういった区域をスラムと呼び習わしている。ゲットーという言葉は、大戦中に暗い意味を帯びたため、次第に避けられ、使われなくなっていた。ゲットーという名称が復活したのは、変化した人間と普通の人間を一緒に住まわせておくのは危険だから、という理由で、隔離居住区を、となったとき、スラムとは別の呼び名を必要としたためだった。変化した人間の隔離居住区。やがて、そこに自治権が認められ、ゲットーは、自治区となり、ひとつの国として機能し始めた。

日本を例にとろう。その国にある以上、平安市は日本の保護を受けている立場である。また、住民の大半は元日本人なので、本来は、協力しあう立場である。前時代のゲットーのように、ユダヤとキリストとか、ユダヤとイスラムとか、宗教、民族的対立があるわけではない。そこでなぜいさかいが起こるか、というのが根源の問題だった。

アフリカの例からすると、発端は子どもを返せ、ということであろう。しかし、その裏には、なぜ自分たちがこんな目にあわねばならないのか、という、怒りと屈辱がある。粒子をコントロールできない、じぶんたち人類へのふがいなさと同時に彼らがもつのは、天使という宇宙からの飛来者への恨みである。しかし、この世の誰が、人類がいまだなしえない、宇宙での無酸素航行や重力制御を行える相手への無謀な挑戦をできるだろう？　負けの予想できる戦というのなら、これほどの敵はいない。彼らは、涙を飲んで泣き寝入りす

るしかないのである。そして、彼らは、多少自分たちに近い種であるゲットーの人間へ談判する。しかし、すでに別個の国として確立しているゲットー側にしてみれば、この苦情を筋違いを感じる。それほどに、ゲットーと国は別のものに成って久しい。変化した子どもを預かっているのは、これ以上、ソジ粒子による余計な犠牲者を出さないためであり、ひいては、彼らを守るためなのだ。いわば、ゲットーは彼らのために生まれた。否定されるいわれはない、だから、つっぱねる。協議は平行線をたどる。たどった先に、結末はない。ただ、荒野のような茫々とした未来があるばかりだ。

絶望感が、人類の上に漂っていた。

そこには、いつまで、自分たちよりすぐれたものと接して平気な顔でいなければならないのか、という、嫉妬心がある。

天使はまだいい。あれは、あまりにも、人類と違いすぎている。戦ってはいけない相手だとひとめで分かる。

しかし、元人類で、人類よりも見目麗しく、優秀なものばかりのゲットーの人間への、複雑な思いの拡散は止まらない。複雑さは、やがてそこへ、憎しみを加えた。熟成した敵対心を生んだ。今にも爆発しそうな不満の矛先を、ゴシップや、根も葉もない噂でまぎらわし、時には小規模な噴火を起こしつつ、それをガス抜きとしてなんとか統制を保つ。そんな日々が二百年も続いたことを思えば、人類にしては、ずいぶん我慢した、といわざるを得ないだろう。

彼らは耐えたのだ――ゲットー人と自分たちが対等である、という証拠が出揃う日まで、彼らは我慢したのである。ゲットー人が粒子を扱う方法を切磋琢磨するあいだに、別の方法で、同じ場所へ立とうと努力を重ねつづけたのである。

その結果が、ペトルーシュカという怪物であった。

つまり、この両者の対立は、人間が、人間と近しいがまったく違う生物種を、本能的に排除したいと思っていることからきていた。それだけに、ことはやっかいである。対立構造の根本が、経済的とか社会的とか宗教的とかいう理由からではなく、生物としての本能

であるからだ。
　それを現すように、うち沈むゲットーとは対照的に、現世では、ちょっとしたブームが起こっていた。アメリカ、イギリス、フランスといったアトランティック・ユニオンの主要国家も、ペトルーシュカとほぼ同じ性能を持つ“マリオネット”を最終実験中と発表し、インド、ブラジル、アフリカ各国も、“操り人形”プランを指示すると声明を出した。あのお披露目には続きがあって、同様の宣戦布告が、ぞくぞくと続いたわけである。
　これに対し、人間側へ、各ゲットーの市長は激しく抗議した。もっとも声が大きかったのは、地中海市――メディテラネウス・ゲットーの市長、テオドール・ティセリウスだ。そのほか、ロンディニウム、イース、崑崙、インド、アフリカのゲットーが――特に、母体となる国が操り人形を開発中、開発検討する、とした市の市長が激しく反発した。無理もない話だった。父や母から、攻撃を示唆されたも同然なのだ。
　一方で、平安、蓬莱など、妙に冷めているゲットーもあった。
「人類同士が戦うというのならそれも運命でしょう。われわれを人類とみなしているのかどうかは、疑問の余地がありますが。ペトルーシュカ、大いに結構。好きなだけ開発して、好きなだけ戦争なさったらよろしい。ただし、うちは参加しません。花火はよそでおやりになっていただきたい。まったく、人間ときたらどうしようもない。戦争のためにしか進化できない、賢くなれないと、あちらから証明したようなものです」
　平安市長、草間士郎の言葉である。これに猛反発したのは、同じゲットーの市長たちだった。
　危機感のかけらもない。何を考えているのか理解しがたい。
　抗議は厳重だった。ゲットーの足並みを乱す、と、穏健派の市長でさえ苦言を呈した。ずいぶん前から、平安は閉鎖的だ、といわれていたせいもある。連合ゲットー軍に出す兵士の数も、金も少ない。草間士郎は、明治や大正時代を反映した市での経済活動が小規模で

あることを理由にしたが、同じ市長たちの不満は募っていた。不満のひとつに、平安市と日本の仲が『そんなに悪くない』ことがあげられる。

もし、他国のゲットーが蜂起したら、平安はそこに加わるのか。目下の平安市の話題は、それである。

人間である藤原菫にとっても、平安市で暮らす以上、これは、注視しなければならない問題だった。

菫は、一度だけ、現職の草間士郎と、前市長、草間太郎に会ったことがある。二人は兄弟だった。兄は人間。弟は変化した人間。兄は、弟を魔的粒子によって失い、弟は、家族と引き離されてゲットーへ拉致された。そのころは、インヴィテーション制度もなかった。再会したとき、二人はともに還暦を過ぎており、一方は日本国首相、もう一方は、平安ゲットー軍元帥であった。兄弟の奔走で、平安市の今日の平和は築かれた。現世の人間を住まわせるシステムも、草間太郎の時代にできたものである。

遺志をついだ弟、草間士郎の目的を、おぼろげながら菫は想像できた。

ゲットーの解放。

つまるところ、目的はそれなのではないか。

一年ほど前、藤原家で開かれたパーティに出席していた市長に、私服で近づいた。おそるおそる菫がそれを匂わせると、草間士郎は笑うばかりだったが――

一介の新人記者に、草間士郎が本心を明かすとは思えなかった。いくらつきあいのある会社のお嬢さんでも、彼女は人間であり、彼は変化したもの。

じぶんがキャリアを重ねていくしかない――と、じれる様な思いに歯噛みしながら、菫は石段を早足で駆け上り、神殿のような総府の表玄関を見上げる。今日は、草間士郎は、テレビ会議で、他国のゲットー市長と会談する予定だ。首脳会議というわけである。同様にして、会議後のコメントをとろうと、記者たちが大勢詰め掛けて

いる。階段をのぼるにしたがって混雑がひどくなる。
ふと、肩がぶつかった。相手をみて、菫は目を見開く。
「あ、ええと――」
「おや、誰かと思えば。お久しぶり」
にこりと笑ったのは、栗色の髪に、淡い琥珀色の目の青年である。菫の父親の姉が、彼の母親。つまり、いとこ同士である。名前を秋野といった。幼い時に変化して、ゲットーで暮らしている。
「まさかこんなところで会うとは。ご家族はご健勝ですか？」
「あ、はい。いえ、ええと――」
実をいうと分からない、というのが本当のところである。頭をかすめたのは、最近、連絡の途絶えている末弟だった。困っていると、相手は気にしない様子でうなずいて、
「うちもだよ」
と言った。
「うちも、って？」
「弟が、どこでなにをしてるやら」
「芳野さん？」
「そう。あいつ、平安市民になるっていってたわりにね、私のほうがなぜか平安にいるという」
「あら」
彼には、一つ下の弟がいた。兄弟揃って変化してしまったので、一部で有名だった。さらにいうなら、両方生きているというので、ものすごい幸運の兄弟でもある。秋野は、父親の籍をついで、ロンディニウム・ゲットーの市民。弟の芳野は、どちらにするか菫も聞いていなかったが、どうやら、母親の籍をつぐようである。
秋野は細い体ごと斜めにして、「なんでかねえ」と首をかしげていた。「どうしてここに」と尋ねると、よれよれのシャツの胸を親指でさし、「出張だよ。書類関係で、マラソンをやらされている」と自嘲するように呟いた。
「私が、日本語が堪能なもんだから、このところずっと平安に居続

けさ」
「マテ研の仕事？」
「そう。事務員なんて、雑用だよ。困ったもんだよ。しかし、君がここにくるとわかっていたら、事前に案内を頼んだのに」
「残念」
　菫は肩をすくめた。秋野は、口の両端を持ち上げるだけで笑って、案内板のほうへ向かっていった。昔から、さびしい後姿が特徴の男だったが、今もそのままだった。弟に元気を全部吸い取られた、とか、いいところを全部とられた、といわれていたのを、ふいに菫は思い出した。今では、兄のほうがずいぶん安定した職についている、と、おぼろげに、伯母が話していたのも。たしかに、マテ研の事務員なら、安定の最たるものだろう。
　それにしても、どこの家でも、弟とは、好き勝手に動き回るものなのだろうか。
　会議が早く終わったら、家に招待してご馳走してあげよう、と、菫は、秋野の後姿を思い出して、ひとりでうなずいた。

4―3

薄暗い総府の会議室で、草間士郎は正装で、スプリングのきいた椅子に腰掛けている。目の前には、巨大なスクリーンが壁にかかって、画面は黒い格子で八等分されていた。時間の都合がつく限り、ゲットーの市長たちが顔を見せている。

緋色のビロードのカーテンが外光を遮断した。室内の照明は、端に置かれたランプだけ。減色のオレンジに、豪奢なオーク材のテーブルと椅子の影がにじむように浮かんだ。

映写用のスポットライトが、草間士郎の、枯れて年齢を失った表情を照らす。彼の前で喋っているのは地中海、イース（フランス）、ロンディニウム（イギリス）、崑崙（中国）、蓬莱（アメリカ）、アフリカ、バラト（インド）。そして、平安。彼らの今日の議題は、ペトルーシュカへの対応である。忙しい合間を縫っての会談だった。どの市長の顔にも、疲れがにじんでいる。画面の向こうで、一人がため息をつきながら口を開いた。

「対抗手段を見つけてのぼせあがっているだけだと思いたいがね」

崑崙市長の発言。穏健派だ。

「ペトルーシュカ、マリオネット、おおいに結構じゃないか。核と同じだ。使われることのない兵器。ただの抑止力だ。あちらさんだって、まさか、本気でドンパチやろうなんて考えていないさ。見たまえ。開発しただけで、人間たちのあの浮かれよう。あれでだいぶ、気晴らしになっただろう」

「しかしね。そうも言ってられないよ、正直なところ。日増しに、人間たちの、ゲットーを見る目は厳しくなっている。一度、やってみるべきじゃないか？」

「やってみるって、何をかね」

草間士郎は口を曲げた。話題は、そこで堂々巡りを繰り返し、すでに五分が経とうとしている。
「戦争をかね？　本気で言っているのかい、テオドール」
「半分はね。でなければ、この、独立国家として認められているとはいえない我らの状況をどうするのだい。われわれは認めてもらいたいだけだ。新しい人類としての地位をね。レジスタンスたちと一緒さ。戦って、勝ち取るべきではないかね、その、きちんとした地位を」
「戦えば無事ではすまない。特に、アフリカ、インド、蓬莱は――いまだに、移行が完了していない。われわれは、人類をそもそもからあざむいているのだ。移行が完了しないうちに戦うのは相当なリスクが伴うし、戦えば、双方の信頼関係を再び築くのは難しい。また、勝敗がついてしまえば、待っている運命は二つだよ。人類の奴隷か、敵か。どちらにしろ、蔑まれるだろう」
「あざむくくらいが何だというのだ。そのくらいの優位性は持たせてもらってしかるべきだよ。ゲットーの人口が、世界人口に対してどれくらいか、君たちだってご存知のはずだ。人類七十八億に対して、我らはすべて合わせても八万に満たない。総人口でだよ。そのうち、可戦人口は三万人ちょっと。総軍属とはいえ、八万対十億、物量作戦でこられたら、そもそもが適わないのだ。時間を操る、くらいのことはさせてもらいたいね。でなければ、圧倒的に不平等な法を改正してもらわねば」
「われわれは人類に対して恩がある。母なる種を攻撃するつもりかね、君は」
　皮肉っぽく応じたのは、ティセリウスと同じ強行派のロンディニウム市長だったが、次の瞬間「失礼」と目をふせた。テオドール・ティセリウスの両親が、彼が変化したために殺害された、というのは、有名である。「とにかく」と蓬莱市長が言った。
「われわれは共同声明を出す。と共に、われわれのハクを使用した新兵器の開発を止めるよう申し入れる」

「君のところから盗まれたハクのね。いったい、どうなった。ちゃんと捜査してるのか」
「現在進行中だ。ノーコメント」
「とにかく！　いいから、話をもとに戻そう。どうする――単なる抑止力という意見はもう、いい。じゅうぶんだ。そんな希望的観測は、聞きたくない。われわれが今日こうして顔をあわせたのは、最悪の事態について話し合うためだよ。思い出してくれ」
イース市長が言った。何人かが、表情をひきしめる。
「正直、人間側は、われわれに挑んでくると思うか？」
彼女は言う。
「国による」
即座に答えたのは、崑崙だった。
「中国、ロシアはおそらく、本当の意味での抑止力だ。国民をなだめるためでもあるだろう。恐ろしいのは、大西洋連合、アフリカあたりだな。日本、インドは、大西洋側だから――何らかの形で協力、ということになるだろう。そうなってくると、だ。もっとも危ないのは、アフリカ、ということになる。移行が完了していないから、包囲されれば大きな被害が出る。しかも、諸国は経済が下火になってきているから、アフリカ・ゲットーとの戦争をカンフル剤にするなんて馬鹿なこともやりかねん。純然たる事実として、戦争は金になるからな。しかも、相手がわれわれ、人類とは別の、モンスターを退治するのだといわれたら、殲滅戦になるだろう。われわれは一方的な殺戮にあう危機を抱えている」
「そうだ。しかも、もし戦端が開かれれば、一箇所だけにとどまらないだろう。ゲットー連合がある以上、われわれはアフリカを助ける。それは間違いないのだから」
「サンクス」
眉を上げて応えたのは、アフリカ・ゲットーの市長である。
「そして、それを理由に、われわれを止めに大西洋連合まで出てくる、か。駄目だな。どちらにしろ、全面戦争になるじゃないか」

「物流からつぶしにくるだろうね。補強策がいる」
「かくりよまでは手がだせまい」
「どうかな。スパイがいる」
「予測をくつがえして悪いが――中露が、抑止力としてあれを開発したとは思えない」
口を開いたのは、蓬莱だった。
「使ってみたい、と思うのが、奴らじゃないかね」
「それは、そうだが――」
「使うよ、ヒトは」
蓬莱市長の口調は乾いている。すでに、ハク関連で消耗しきっているらしい彼は、淡々と呟くように話す。
「でなければ、あんなに仰々しく発表するものかね。ほとほと身にしみたがね、諸君。われわれの弱点は――人類とは違うものになってしまったがゆえに、どうしても、人類の思考を完全に予測できなくなるところにある、と思うよ。経過を聞いていると、テオドールの言うのももっともだ、という気がしてきた。彼らは、私たちを憎んでいる。それを、根本ではわかりあえるはずだと思っていたら大火傷を負う。あの人形の発表で、多少は私も考えが変わった。甘く見てはいけない」
「貴方らしからぬ意見だな」
草間士郎は、蓬莱市長の、これもまた年齢のわからない男の顔を見つめる。
「では、どうする。彼らが攻撃してきたら――われわれは、戦うのかね」
「無抵抗でやられろというのか？　何のために、独立国家の形式として軍だけは持たせてくれと頼み込んだのだ。こんな日がくることを、先輩諸氏が予想していたからだろう。いつか戦うかもしれない、と。いつかが、いよいよ迫ってきただけだよ」
「抗議の申し入れと平行して、早急に対抗策を練るべきだ。そもそも、ルールを破ったのは、あちらが先なのだ。ハクを盗んだ――わ

れわれの体を、血を、肉を。彼らは私たちの命を握ったのだ」
「対抗策といっても、どうする」
「ハクが盗まれたのはマテ研だった」
蓬莱市長が言った。
「マテ研に作らせるさ。市長がた――五十年前、バイオテラロジーというものが生まれた。知っているだろう。そこから派生したひとつの研究について、この際だ、諸君らにも意見を聞きたいんだがね」
誰もがポーカーフェイスを作ったが、蓬莱市長の言葉の真意を、全員が即座に理解した。
「魔法か」
沈黙を破ったのは、イース市長だった。全員の口からため息がもれる。
「研究が最終段階で止まっているのは、どこも同じだと思っていたが」
「各国の面子や建前を気にしている場合ではないから言ってしまう。これしかない、と私は思う。魔法を――早急に完成させるべきだよ」
「スチュアート・チャンの魔法か？」
草間士郎が呟くと、数人の市長が、ひそかにぎくりと肩をすくめた。蓬莱市長はうなずく。平安と蓬莱とは、ゲットー連合のなかでも親しい間柄であるので、草間からその名が出ても、気にしない様子だった。
「そうだ。スチュアート・チャン――私も詳しくは知らなかったが、うちにいる彼が、この分野ではもっとも、進んでいたそうだ。というのを、例のハクの捜査過程で私も聞いた。所長が潰してしまったらしいんだがね、なぜか。それをね――実は、復活させてもらえないかという話が出ている。すでに、許可する方法で動いています」
蓬莱市長の視線が動く。おそらく、どこかのゲットーの市長の顔が、彼の視線の先にあるに違いない。草間はそれを探ろうとしたが、どの市長も、すでに無表情に戻っていた。魔法の成立をめぐって、マテ研支部同士で苛烈な争いが行われていることは、草間も知って

いる。同様の研究は平安でも行われているのだ。彼自身の手で、かなりの予算を認可した覚えがある――もし魔法が完成したら、粒子の発見以後最大の、莫大な利益を生むだろうといわれていた。初めて成し遂げたゲットーが、金の卵であるライセンスを持つことも。

「うちのハクが盗まれた責任をとる、というわけではないが」

指先で机を叩くと、蓬莱市長は、自慢ではなく、彼らが予想もしなかった提案をした。

「うちで魔法が完成したあかつきには、特許を解放しようと思うんだ。各ゲットーで、好きに使えるようにするよ。そのかわり、だ。協力を要請したい。魔法の完成のために必要なものの、あらゆる融通をしてもらいたいわけですよ」

「――なにかな」

「法律と教育だ。魔法というものの概念を、ざっと私も勉強した。これを使うにあたっては、本人の資質だけでなく、周囲のサポート、法整備が不可欠だ。魔法というものは、ものそれだけが完成しただけでは、本当の完成ではない。はっきり言って、人間がわに渡ったものが、ハクですんでよかったと私は思った。これこそ渡せない。まあ、そもそも、扱えんだろうが。しかし――いくら、うちの優秀な研究員が“できあがりました”と世に出しても、これをわれわれの共通の武力にするのは、相当の時間がかかる。短縮したかったら、諸君らにも協力してもらうしかない」

「魔法法を作れ、ということか」

「たしかにねえ……」

新しい技術を作るのが科学者や研究所の役割だとしたら、それを実際に使えるようにするのは、政府や裁判所の仕事である。しかし、まったくのゼロから法律を明文化する煩雑さを、彼らはよく知っていた。ただでさえ人手不足のゲットー総府、一国ぶんの処理能力では、十年かかるところである。ペトルーシュカは、十年も待ってくれない、と蓬莱市長は言った。

各国の市長は複雑な顔だった。ただで魔法をわけてくれるのはあ

りがたい。しかしこれは、自国が得られるかもしれない利益をも手放すことである。イースとロンディニウムの市長も、考え込むふりをしながら、多少の焦りを感じた。スチュアート・チャンのもとにいる、被験者の学生二人は、彼らのスパイだからである。もしスチュアートが魔法を完成させたら、裁判沙汰にして利益をむしりとろうと思っていた。あわよくば、魔法特許自体を奪おうとしていた。それを、蓬莱市長が、協力してくれれば無償で提供すると宣言してしまったのだ。しかも、他の市長の前で。ここまで堂々と来られては、対処のしようもなくなる。

さらに、蓬莱市長は、

「スチュアートは、実験の最終段階に入っているようなのだ。まあ、はっきりいって、人体実験だね。これは違法なのだが、見逃していただく。それから、彼の望むとおりの人材がいれば、各国ゲットーからそれぞれ提供していただきたい。まずは、各支部に逃げてしまったスチュアート・チャンの研究チームの人材だ。これを回収したい。すぐにこちらに向かわせる方向で、マテ研に圧力をかけていただきたいね」

「簡単にいうねえ」

「この際だからね」

開き直ったともいえる豪胆さに、市長たちは目をしばたたかせた。彼の言葉の裏を、全員が正しく理解していた。「いっこくも早く、ただで魔法が欲しければ、スチュアートの行為に目をつぶれ、全面協力しろ」ということである。裏をかえすと、協力しなければ、という意味にもとれる。しかたなさそうに、全員がうなずいた。もちろん、草間も同意した。

「とにかく、完成を急がせる。はっきりとした指針をまとめるまでは、この件は内密に。人間側には、抗議だけは続ける」

「いいだろう」

会議は終わった。

草間は立ち上がり、カーテンを開ける。秘書がすぐにやってきた。

しかし、蓬莱市長の声が、スピーカーから再び聞こえる。
「まだ何か用かね、クリス」
「シロー、おりいって相談だ」
「なんだ」
「実験の人材に、ぜひとも、そちらにいるサンプルが欲しいんだが」
「駄目だ」
「なぜ」
横目で秘書を見ると、秘書はすぐに部屋を出て行った。
「うちにはいない」
草間はそう言おうとした。しかし、蓬莱市長は笑って、「知ってるよ」とするどく告げる。
「いるんだろう？――そのことは確実だ」
「たとえいたとしても、渡せんな」
「それでもいいが。――うちにくれれば、真っ先に魔法を授けられるのにと思ってね。われわれの目的には、サンプルの強化、というのもある。相手は、人間だけじゃないからね」
「ここでする話ではない。また会おう」
「いいだろう。……ああ、そうだ。さっき言った、ドクター・チャンの人体実験。平安学園の生徒が参加しているようだ。たしか高等部の。君が言うなら、今すぐやめさせるがね」
「うちの生徒が？　ふうん――べつにかまわんよ。うちに、そんなやわなのはいない。送り出した以上、なにがあろうと受け止めるだけだ」
「わかった――ならいい」
通話はきれた。
蓬莱にいる留学生を思い出そうとしたが、無理だった。いずれ知れるだろう、と考えを切り替える。
サンプルか、と彼は呟いた。
二年前、目の前に現れた嵐。真夜中――幼少時からよく知る浦川カレンと一緒にやってきた。天女のような彼女の隣にいた凡庸な少

年は、それでも、彼の目を惹いた。まだ誰も気付かない。あれは原石か、幼虫か。世を照らす篝火か、焼き尽くす業火か。

あるいは、スイッチとなるだろう。

銀色の少女。

「誰ぞ我が心の焦るを知らん――兄上。貴方もそうでしたか」

返事はない。

4―4

開けっ放しだった窓からは、鋭い光がさしこんでいる。風は穏やかにカーテンを揺らし、鳥のさえずりを運んでいる。

彼が目を覚ましたときは、すでに土曜日だった。

蓬莱でも、土曜と日曜は休日である。その日はよく晴れていた。テッセンは、昼近くなって、ようやく完全に目をさました。シャワーをあびて新しい服に着替えると、久しぶりに感じる、明瞭な思考に嬉しくなる。英語づけの学校生活と部活と例の実験で、息つく暇もなかったな、と、長い睡眠で凝り固まった体を伸ばす。

ダイニングを覗くと、アツロウとキクノスケが、巻き寿司を作っている最中だった。シゲキは、顔まで粉だらけにして、手作り餃子の皮を伸ばしている。おいしそうな味噌汁のにおいもしている。昼食を作っているというので「手伝います」と、申し出たが、先輩と後輩は、勢いよく首と手を左右にふった。共同生活を送っている以上、食事は当番制だが、お互いに懲りているのである。おかゆを炊けば墨にし、麺をゆでればサナダムシのようになり、カレーを作れば肥料になる、という始末だったので、テッセンに割り振られた仕事は、届いた郵便物や小包の仕分けと、日めくりカレンダーをめくることである。掃除、洗濯などの仕事からも外されていた。

「塾で疲れてるんだろう。たまの休日だ、ゆっくり休め」

アツロウは、ひきつった笑みを浮かべてそう言った。

「はあ」

そういえばそんな言い訳をした、と思いながら、テッセンはすごすごと部屋にひきさがる。

久しぶりに手紙でも、と、荷物から、便箋と封筒を出した。友人への連絡を忘れて三週間。さすがに心配しているに違いない。

と、ペンをとったところで、彼は、机の横に置かれた鳥篭が空なのに気付いた。アルリシャの寝床――真綿を柔らかな正絹でくるんだベッドに、姿が見当たらない。
「アーシャ？」
脳裏をかすめたのは、昨夜、眠りにおちる直前の彼女の様子である。どことなくおかしかった。
あわてて窓のほうへ寄る。開け放したままの窓枠には、サヨラもいない。
「アーシャ。アーシャ――アーシャ！」
呼んでいると、ふと、空間が歪んで、黄色いカナリアは姿を現した。よろけながら飛んで、テッセンの肩にとまる。ほっとして、テッセンは、小さな体を手のひらに包む。
「ぼん、ただいまあ」
のんびりと彼女は言ったが、どこか疲れた声である。
「どこに行っていた？」
アルリシャの体からは、かくりよの匂いがした。自分に何も言わずそばを離れることがないのに、と思っていると、気配を察したのか、アルリシャは「あのな」と、急に居住まいを正したように、彼の肩を離れて机の上へおりたった。
「ぼんに、話があんのやけど、うち」
「話？」
「せや。うちな、ぼんに話してないことあんねん」
「そんなのあったか？」
学校以外ではほぼ一緒である。カナリアの利点を生かして、彼女はしょっちゅうテッセンの肩や頭や鞄の上にとまっている。友人同士の会話も、悪口にいたるまで筒抜けである。そういうと、アルリシャは、「そんなんとちゃう」と、違う種類の話であることを告げた。
「よう考えたら、ぼんももう十六になる。ええ年や。もう八年も経った――うちとぼんが出会ってから」

「ああ、まあ、そんなになるか」
「せやねん。うちと会うたとき、ぼんはまだ、ちびっこやった。そやから、うちのことら、なんも話さんときてしもうたがな。それでな、ええ機会や。話しときたいことがあるんや。それはな、うち自身のことやねん」
「なんだ、あらたまって」
テッセンはベッドに座った。アルリシャは、机の上で、両足をそろえて、端から端までいったりきたりする。そこへ、ひらひらと、黒揚羽がやってきた。サヨラだ、と一目でわかった。首をかしげていると、アルリシャは口を開く。
「なあ、ぼん。うちが道祖神やっちゅうのは、いつか話したな。現世で、村の境目やら、街道筋やらにぽつんと立ってる、道案内の神さんの一種やて」
「ん？　ああ、まあ」
「そんでな。うちら道祖神ってのはな、ぼんは知らんかもしれんけど、男女一対神なんや、ふつう」
「男女――一対？」
「せや。男と女、二人で一人の神さんなんや」
「え？」
でも、と、テッセンは、首をかしげる。
「でも、お前は、一匹だけで……なんというかな、その」
女だよな、というと、アルリシャはうなずいた。
「せや。うちは女や。女だけの道祖神や。それが、どういうことか、っていうとな。実は、うちにはもともと、対になるツレがおったん。いうたら、うちの兄か弟か、もしくは――旦那や。うちはもともと、そいつとひとつで道祖神やってん」
「お前、結婚してたの？」
テッセンが顔をあげると、アルリシャは「あほかい」と言いはしたものの、自信なさげに首をふる。
「いや、すまん。今となっては、うちももう、覚えてへんねん。そ

いつがうちの何やったか、ちゅうのは。でも――とにかくな、現世でうちが道祖神やったっちゅうのは確実なんやけど、今、外の世界では、道祖神なんてもの、そもそも、残ってへんのや。でっかい道路やら、標識やら立ってしもうたさかい、みんな、道端に立ってる道祖神のことなんか、旅のあてにせえへん。うちらは、ありがたがられてた頃とはもう、比べ物にならんくらい、力も権威もないんや。それで、うちらが拠り代にしとった石碑やらなんやらも、崩される、片される、で――うちらもそうやって、居場所がのうなったさかい、平安に来た道祖神の一つやったんや、そもそもは」

「そうだったのか。ふうん。――それで、お前はもともとは、ひとりじゃなかったってわけだな？」

「せやねん」

テッセンはため息をもらした。いずれも、初めて聞く話だ。八年もそばにいて、本当に何も知らずに一緒にいたのだな、と呆然とする。アルリシャは、一息つくと、また口を開いた。

「それでな。うちのツレもそんとき、たぶん、途中まで一緒に、平安を目指して来た、ような気がすんねん。とにかく、途中までは一緒におった、それは確実や。でもな、なんでかしらん――はぐれてしもうた。もともと、道祖神ちゅうんは、千年からの歴史がある。うちらも、いうてたら、神様になる前は人間やったはずなんやけど――道に迷って倒れた旅人が、地元の人間の弔いと祭祀によって道祖神になるパターンが多いんやけど、旅っちゅうたら、普通何人かでいくもんや。一人旅なんてようせえへん、それは昔から一緒。それで、男女一対神になったんやろうけど――千年もたつと、自分がなんやったのか、ようわからんようになってまいよる。うちは、自分と一緒に道祖神に祀られた、そのツレのことも、なんや知らんけど一緒におるなあ、っていう、空気みたいなもんやってん。やから、はぐれても、うちはしばらくそのことに気付かんかった。長いこと、二人で一つやったはずなのにな。――そんで、うちはぼんに会うたやろ。すると、ぼんとおるの好きや好きやになってもうて、そこか

らは、ぼん一筋や。余計に、おらんくなったツレのこと、どうでもよくなった。でも、や」
アルリシャはため息をついた。
「あの、眼鏡の男が言いよった。うちは弱いって」
「――気にするなといったはずだが」
きつめの口調でテッセンがそういうと、アルリシャは首を振り、
「いやや。気にする。無理や、そんなん。それでなー――もっかい言うけど、うちら道祖神は男女一対神。うちだけでは半端者や。やからもちろん、力も弱い。でも、もしうちのツレが見つかったら、うちはもっといろいろ、ぼんのこと助けてやれるんや。やからな、」
隣で羽を開閉させていた黒揚羽を見る。
「探そう、思てん。おらんくなった、うちのツレ。いい機会やし。もちろん、離れて久しい相手やさかい、ちょっとやそっとじゃ見つけられれん。かくりよ、ちゅうても、平安だけでも広いがな。それでも、どっかにはおるはずや、まだ、ちゃんと。うちがこうしておるんやから。ひょっとしたら、むこうも、誰かの相棒になって、案外近くにおるかもしれへんやろ。やから探そう思ってん。この子に協力してもらって」
アルリシャは、蝶のほうに数歩ぶん近寄る。
「サヨラに？」
「せや。よう考えたら、この子はえらい。虫っちゅうもんはな、どこにでもおる。その、どこにでもおるやつの目、この子は借りられんねん。せやから、うち、頼んでん。この子も了解してくれた。うちのツレ、平安市で、実際に動いて、探してくれるって。せやからぼん、待っとってほしい。うち、絶対、見つけるさかい。この子と一緒に。だって、うち――ぼんがあの子らより下にみられれんの、嫌やねん」
「ちょ――ちょっと待て。考えさせろ。待て」
テッセンは、アルリシャとサヨラ――カナリアと黒揚羽を交互に見る。

言われた言葉を整理する。
――アルリシャには、兄弟だか夫だかがいて、どこにいるかわからないその道祖神の片割れを、サヨラの協力で探す？
「実際に動いて、って、どういうことだ」
ようやく尋ねると、アルリシャはうなずいた。
「鎮守の森で探してもらうんや。この子は、聞いたら昔、神事に関わったことあるんやて。神宮常駐の巫女候補やったっていうやないの。精神力も霊力も相当高い。ぼんと真逆やなあ。粒子の操作はからっきしらしいけどな。感じ取る、ちゅうたら、うちの知ってる中でも、右に出るものはおらんわ。せやから夜、鎮守の森で、地道に、聞き込みから――」
「駄目だ。やめろ」
カナリアと揚羽蝶は、そろって首をかしげた。テッセンは、猛烈な焦りを感じながら立ち上がる。
「それはつまり、サヨラが鎮守の森で、ひとりで、精霊やらゴーストやら獣精のなかに入って、お前のツレを探す、ということだろう。だめだ、危ない。夜だって？　なおさら駄目だ」
「そやかて、夜やないと集まらへんもん。うちもできる限り、ついていくし」
「駄目だ！」
十三歳の少女が一人で入っていい場所では、鎮守の森は、テッセンの中ではなかった。チミモウリョウがうじゃうじゃいる。かどわかしにでもあったら大変だ。しかし、目の前の一羽と一匹は、羽をばたばたと動して抗議する。大丈夫よ、ということだ。決意は、ダイヤモンドより固そうだった。
「駄目だ」
テッセンは頭をふる。
何と言われても、許せないことはある。珍しく思考をフル回転させ、一か百かしかない彼にしては、かなりの譲歩である妥協案を出した。

「せめて、夏季休暇まで待てんか？　もうすぐ、俺は平安に戻る。そのとき、俺とお前で探せばいいだろう。それなら、サヨラに迷惑をかけんですむ」
「せやけど、遅くなるやん。うちは、一刻も早く見つけたい。もし、誰かの相棒になってたら、説得するにも時間がいるし」
「しかし、いくらなんでもな。サヨラ、お前、まだ行ってないだろうな。駄目だ、そんなこと。ただでさえ、夜中の女の一人歩きは許せん。円城寺の親父、ひっくりかえるぞ」
とそのとき、窓からうなるような音がして、蜜蜂の大群が部屋に飛び込んできた。テッセンはあとずさりする。声も出せないでいると、蜂たちは、足につけた花粉を、机の上に撒き散らしはじめた。蝶が、その上を羽ばたく。あっというまに、大群は再び飛び去っていく。
「見てみいな、ぼん」
アルリシャが机から呼ぶので、そっと覗いてみる。「オマカセクダサイ」の文字が並んでいた。蝶が再び羽と足を動かすと、文面が変わる。
「オヤクニタチタイデス」
これには、テッセンも言葉を失った。これこそ魔法じゃないか、と、蝶をまじまじと見つめる。
「ちょ――っと待て。頼む。動くなよ、二人とも」
テッセンは、片方の手で額を押さえ、片方の手を机のふちについて体を支える。
――女ってのは。
アルリシャは言い出したらきかないたちだ。サヨラも、両親の反対をおしきって一人であんな辺鄙な場所に隠居するくらいだから、芯はかなりきつい。しかも、二人はいつのまに仲良くなったのか、結託して一歩もひかない構えをみせた。女がこうなるとてこでも動かない、と、タエコと母親の例で身にしみているテッセンである。
「せめて……」

夏休みまで、あと二週間ある。たじたじとなりながらも、彼はなんとか、「わかった」と搾り出した。一羽と一匹が、わあ、というように跳ね上がる。
「ただし、条件がある」
書かないまま放置していた便箋と封筒を手に取った。頼みの綱は、平安市にいる友人だけだ。
「くれぐれも頼むぞ」
「まかしといてえ！」
魔法はぬきで、と念をおした。わかっているのか心配なほど上機嫌のアルリシャが、かくりよへと消える。テッセンは、知らずに両手を強く握り締めている自分に気付いて、脱力感に襲われた。
こういう次第で、彼の友人たちは、テッセンの身に起こったことを突然知ることになったのだった。「結局はおぼっちゃんなんだよねえ」――他人を使い慣れている、と、一年でさんざん、悪癖を指摘されてきたテッセンであったので、今回も、仲間が言うであろうそのセリフを予想した。きっかり五分後、顔を見合わせて同様の感想を、リヒトとミサビはもらすのだが、今回はそこに、別の種類の感想が加わった。
「まったく、こういうタイプに本当に弱いんだから」
「見かけが大人しくて中身は強い、って子ね。うーん。サヨラさん……たしかにねえ」
「あと、関西弁の年上の女性」
テッセンは知らない。

4―5

その日の午後。研究所にいたスチュアートは、突然呼び出されて、副所長室へ向かっていた。いつのまにか、役員から副所長に昇進していたジム・レイノルズ・リーによる呼び出しだ。彼はまったく知らなかったが、研究所内の人事は、ヒルガーが“長期出張”しているあいだに、リーによって多少の変動があったようだった。途中の掲示板には、ずらりと辞令が貼られていた。

全長二十キロにも及ぶ長い廊下を、足早に歩く。所内は人影まばらだ。研究所も、土日はしっかりお休みである。例の件で、仕事にならなかったものが、業務の遅れをとりもどそうと出勤していたので、気まぐれに生体部門を覗くと、そこだけが戦争のようになっていた。

ご愁傷様だなあ、と独り言を呟いていると、開きっぱなしのドアの隙間から、ある研究員が「あっ」と振り向きざま彼を指でさした。

「人を指さすんじゃあないよ」

たまには迷信も気にするスチュアートである。若い男はその勢いのまま、

「ドクター！　大丈夫なんですか」

ばたばたとやってくる。

「はあ、何がだい」

「噂が」

「噂？」

「あれ、そういえば、なんでここにいるんですか」

「副所長に呼び出されて向かう途中だけどねえ」

とたん、彼は、しまった、という顔で口に手をあて、すぐに、にやにや笑いで手をふった。

「お邪魔しましたあ。ささ、先へ行ってください。どうぞどうぞ」
「なんだい。君が呼び止めたんじゃないか」
「おっと、こっちも仕事がたてこんでるんだった。失礼しましたあ」
ばん、とあきっぱなしだったドアが閉じる。スチュアートはふにおちなかったが、足を早めた。
副所長室は、別館の三階にある。エレベーターを降りてすぐの受付で告げると、美しい秘書三人が「お通りください」と一礼した。通路の先に、大きな木製のドア。獅子の頭をかたどったノッカーを打つと、
「君か。よく来た」
ジム・レイノルズ・リーみずからの出迎えで、彼は部屋に入る。
十五分後、そこから出てきたスチュアートは、全速力で、もときた廊下を駆け抜けていた。ひとびとは左右に分かれて、吹き飛びそうな眼鏡を手で抑えて疾走する黒髪の男を見送る。スチュアートだとわかったものは、またか、と呆れ顔で肩をすくめ、わからなかったものは「廊下を走るなよ」と、プライマリー・スクール以来であろう呼びかけをした。スチュアートは、そのどれも耳に入らなかった。
――夢が現実になった。夢が現実になった。夢が現実になった。
いよいよだぞ！
ドリームズケイムトゥルー。
彼はその足で、研究所を出て、振り向きざま空中に呼びかける。
「グリーフ！」
「ウァーッツ？」
黒いアフガン・ハウンドが、空中から地上へと降り立った。スチュアートの仕事が忙しいせいで、いつも放っていかれている彼女は、最近はおおいに不満を募らせている。仏頂面で抗議を口にしかけたが、二秒後、仕事への恨みのかわりに（その内容についても、精霊たちと同様の不満を持っている彼女である）、主人への愛を思い出した。あるじよりも、百メートルを二十秒短いタイムで疾走し、一

キロ先の大通りから引き返してくる。
「蓬莱茶館！」
「よし！」
大好物の干しナツメを投げてもらって、グリーフは嬉しそうにかくりよへ――蓬莱では、仙界と呼ばれる――に帰っていく。スチュアートは、研究所を出たところにある花屋で、まっさきに目に付いた、名前の分からない花を花束にしてもらった。それをしっかり抱えて、走る。
いきつけのカフェのテラス席では、青いワンピース姿の小麗が、ジャスミンティーを手に読書中だった。彼女は、息をきらしてやってきたスチュアートに気付くと、びっくりした表情で立ち上がる。
「ど、どうしたの、老師。なにそれ、その――あら、かわいい。キャンディタフトにアジサイ？　地味で斬新な組み合わせね。真昼間だけど、オペラにでも行くの？」
「小麗――キャサリン」
彼が、足元にひざまずくと、小麗は目を丸くした。彼女は手にカップをもったままだったが、あわてた拍子に中身を地面にこぼしてしまう。頬にはねた熱い雫を袖でぬぐって、スチュアートは花束を彼女の手におしつける。ようやくカップを置いた彼女の手をとると、頭をたれてうやうやしく告げた。
「私がこの仕事をなしとげた暁には、君を生涯の伴侶にしたい。部門が復活する。予算がもらえる。君のおかげだ。君のおかげであの絶望から立ち上がることができた。君のおかげで、今日がある。君は女神だ。ミューズだ。天使だ、聖母だ。世界のもっとも美しい部分の凝縮だ。瞳は宇宙の青い闇だ。私はやる。全力をつくす。君に苦労はさせん、約束する。だからどうかこの願いを受け容れてはもらえないだろうか。私と、生涯をともに」
小麗は、黙って立っていた。
そのまま、数十秒がすぎた。やがて、彼女が黙ったままだったので、おそるおそる、表情をうかがおうと顔をあげたスチュアートに、

小麗はにっこりと笑った。
「老師」
「なんだ――の、ノウか？　そうなのか？」
「ねえ老師。なに。つまり？　駄目だよ、長すぎてよくわからないよ。つまり？」
「つまり？　つまりというのは。つまるところ」
「つまるところ？」
「つまるところ――」
君が好きだ。愛している。結婚してくれ。
彼が言うと、よくできました、と小麗は呟いた。スチュアートの手を、ぐい、とひっぱって立たせると、力いっぱい彼を抱きしめる。スチュアートは、ぐんぐん上がっていく体温を感じた。腕の中で、彼女が微笑んでいる。彼より五歳年下、ということは三十一になったはずだが、驚くことに、大学時代にはじめて中等部の庭で見かけたときから、まったく魅力が衰えない。そして、夢にまでみた瞬間が――
「おめでとう。あのね、返事はそうね、イエスよ。だから頑張ってね。待ってるから」
「あ、ああ。ああ、もちろん。もちろん。もちろん！　もちろん頑張るよ」
頬にキスを感じながら、目の前のキュートな後輩を見た。プロポーズは、スチュアートの念願だった。今年こそはと思いながら成し遂げられず、何度、自分をふがいなく思ったことだろう。彼の歯に衣きせぬ物言いを知る研究所のものは、その意外さに驚いただろうが、彼は、恋愛に関しては極度にオクテだった。本人だけの大問題――ハンサムでもなければ、スポーツが得意なわけでもない。研究者としては一流だが、自分の地味さは自覚している――それが、彼をおおいに臆病にした。密かな想いは、すでに病のようにこじれ、ようやく友人になってからは、小麗にボーイフレンドができればそいつを呪い、気になるひとがいるのと打ち明けられればそいつも呪った。

彼女が、自分が思うほど自分を悪くは思っていないと気付き、いつしか、彼女の周囲から他の男の影が消えてしまってからも、魔法を成し遂げるまでは告白しないと決めていた。
まだ成し遂げてはいない。しかし、もう、決まったも同然だ。
「部門復活って？　ついに、本当に？」
「ああ。本当だ。さっき、副所長が約束してくれた。蓬莱支部をあげてバックアップしてくれるそうだ」
「そうなの。でも、なんでこんな急に」
「市長の鶴の一声だそうだ。こないだ、スリジエが、市長たちの会議がどうとか言っていたが、きっとそのおかげだな。ペトルーシュカの怨念だよ。もうすぐだ。もう、決まったも同然だ。小麗――あと少しだ。待っていてくれ。しばらく、娑婆に出れそうにないんだが――」
「やっと言ってくれたっていうのに、また、研究室にこもりっきりってこと。まあ、いいわ。そうね。クッキーをたくさん焼かなくちゃね。曖昧な期間の喪はついにあけたことだし、結局はおめでたいことですもの。未来の旦那サマのために」
小麗の青い瞳が、いたずらっぽく笑う。
「オーマイ――」
「ゴッデス？」
女神が彼に微笑んだころ。
ジム・レイノルズ・リーは、受話器を取り上げていた。相手はデュカキス、蓬莱警察におけるハク盗難事件の捜査責任者である。今ではすっかり、顔なじみだった。
「警備をお願いしたい」
「誰の」
「決まっている。スチュアート・チャンだ」
リーは、黄色水晶の瞳を細めて、副所長室の窓から外を眺める。警備所の向こうに続く大通りのさきに、中華門がそびえている。さらに向こうに、警察署がある。デュカキスは、コーヒーと煙草の煙

の中で仕事をしているだろう。
「週明け、月曜からさっそく頼みたい。彼に関して、大幅な人事がある。そこへもぐりこませる。人選を頼みます」
「また、急な話だな」
「この件には、自治区全体の未来がかかっている」
「大仰な」
「と、門外漢はおっしゃるだろうと思ったよ。しかし、本当だ」
すべてのゲットーが足並みをそろえて取り組むとなれば、リーの懸念はひとつである。よそのゲットーのスパイ行為はこの際おいて、重要なのは、人間側との内通者を、一刻も早く捕まえることであった。魔法が真の完成をみるまえに、人間側に悟られてはまずい。リーは、内通者はまだ研究所にいると考えている。
「それから、スチュアートが見つけてきた学生たちだ。彼らの安全確保。市長から、そちらにも要請がいくはずだ」
「キナ臭いですなあ。まったく、研究所は魔窟だね。次から次へと、新事実とやらが出てくる」
「ホシがまだ研究所にいる、と最初にアタリをつけたのはあんたでしょう。間違いない、そいつは次に、スチュアートを狙うはずです。彼を警備しておけば、そこから崩せる。ああ、そうそう、あの副産物。あれに関しても礼を言う。さすがだ」
「なるほど。……まあ、ドウイタシマシテ、と言っておこうか」
受話器越しに、にやりと笑ったような気配。
そのとき、ドアがノックされ、長身の男が静かに入ってくる。「お取り込み中でしたか」と首をかしげたのは、おなじみの医師、スリジエである。すでに手の包帯もなくなり、一見して元気そうだ。さっきまで、ここにスチュアートがいたことを、彼は知らない。
リーは手を振って応えた。
「いや、いい。入ってくれ。ところで――」
「ドクターの研究のことでしたら、私は、被験者の健康管理にしかタッチしていませんが……あの、」

違反がばれて萎縮している、という演技で、こわごわと口を開くスリジエに、
「いや、その話ではない」
通話の切れた受話器を置く。黒髪、淡いピンクの瞳のアジア系の男は、眉間にしわを寄せて首をかしげた。典型的な医学系研究者の姿だ、とリーは見て取った。温厚で人当たりよく、清潔で歯切れがいい。
スチュアートより絵になる、と、研究者にしておくには惜しい容姿をつくづくリーが眺めていると、
「では、一体何のご用でしょう？　夜間の違反行為については、メールでは不問に処すとのことでしたが……」
「君にもひとつ、護衛を頼みたいんだ」
「護衛？」
「君は、スチュアートのたった一人の仲間だった。最低限必要だとして彼から招集された人材であり、秘密の共有者だった。しかも、あの男の周到な準備と目くらましを補佐できるほどの能力を持っている。彼から抜群に信頼を得ているということだ。これまでどおり、できるだろう」
「待ってください。護衛とおっしゃいましたか」
「そうだ。護衛だ。スチュアートの命を守れ」
「あの――私は医師ですが？」
リーは肩をすくめてみせた。
「演技はじゅうぶんですよ、もう」
「演技？　演技だなんて。いったい、どういうことでしょう」
「平安市長も、支部も、この件に関しては協力を命じるはずです」
「平安？　ゲットー・イェル・シャローム？　はるか昔に留学したおぼえがありますが、いったい、何をおっしゃっているのですか？」
「とぼけるねえ」
男と男の視線が絡んだ刹那、びり、とあたりに電流が走るような緊張がうまれた。

「知ってるよ」
からんだ視線は、しばらく解けなかった。
操る粒子が自分の周囲をめぐっているのを、リーは感じる。
「Ｃｅｒｉｓｉｅｒ――春の平安は、ことさら美しいそうだが。まったく、よくも今までのうのうと彼のそばにいたもんだ。ぜんぜん気付かなかったよ。今回のハクの件がなければ。――ああ、言い訳はいい。もうわかってるんだ――月曜日から、スチュアートの研究チームを復活させる。蓬莱は、総力をあげて彼の魔法の完成に協力体制を敷くことになった。平安、ロンディニウム、イース、地中海、バラト、各支部に散った彼のチームも、再結集すべく、人材を再び引き抜いた。各支部の協力を得ることになってね。現在、こちらに向かっている途中だ。それらが集まったとき、彼と最終実験を行ってきた君に逃げられては困る。行方をくらまされでもしたら、なおさらだよ」
リーがするどく言い放つと、
「ははっ」
正確に三秒間の沈黙のあと、ついに、男は笑いをもらした。うつむいてからゆっくりと顔をあげたときは、すでに“従順な組織の人間”の仮面を脱ぎ捨てている。ゆっくりと両手を肩の高さにあげた彼は、低く、それで？　と、呟いた。
「君が誰かは、追求しない。本当に平安かどうかも、正直、怪しいとにらんでいるくらいだがね」
「そりゃあ、深読みがすぎますよ」
「そうかね？」
リーは背を向け、窓の外に視線を戻す。ホテイアオイの緑が、水のよどみに浮かび、水鳥が、水面を離れずにダンスをしている。豪華な副所長室は、質実剛健を旨とする彼の気に入らなかったが、唯一、窓からの眺めだけは好もしかった。
――平安支部もなかなかやる。
今までどれほど情報を持っていかれたことか。首根っこをつかん

で、デュカキスに突き出したいほど腹立たしい。だが、彼は無表情を保って振り返る。
「君は、これまでどおりにしてくれればそれでいい」
「報告義務は？」
「特にない。だが――スチュアートになにかあったら、生きて蓬莱を出られると思うな」
スリジエは真顔で考え込んでいたが、やがて、ひきしまった顎をそらして、ぱん、と両手を打ち鳴らし、役者のように両手を広げた。
「契約外の労働に関しては、請求してもよろしいのでしょうか？」
「結構。言い値で買おう」
「では」
スリジエは、風のように去っていった。
食えない男だ、とドアを見ながらリーは顔をしかめる。
しかし、部屋を出たスリジエのほうこそ、実はおそろしいほど緊張していたのである。廊下を歩きながら、彼は舌打ちを繰り返した。ハクの件はまずかった――タイミングが悪かった、と内心で反省した。スチュアートの魔法を、母国のゲットーに持ち帰るだけの仕事のはずだったのに、正体が露見するばかりか、厄介な仕事まで増えてしまった。
「だから、わかりやすいコードネームはよせって言ったんだ」
リーが見抜いたとおり、スリジエは平安支部のスパイである。動揺を完璧に押し隠して、口笛まで吹いてみせつつ、子どものころから最優秀とたたえられた頭の中で計算をしていた。プロらしく顔に出さず、スチュアートのように疾走もせず、黙って居室に辿り着くと、まっさきに帰り支度を済ませた。今日は、このためだけの出勤だ。さらに、ロッカーの中身を大幅に入れ替えながら、
「ヒルガーのほうがやりやすかったね」
再び、舌打ち。
「なんというサタデー」
頭に手をあてる。スイッチで入れ替わった髪の色は、黒と呼べる

か呼べないかの濃い栗色だった。突然変異の淡いピンク色の瞳はそのまま――生体部門には、もっと変わったものがいくらでもいるので、特に問題にはならなかったはずだった。

着信音に、通信用のモバイル――マテ研の職員が持たされているカードのアクセサリだが、それが点灯した。実の兄からだった。兄弟間で、実に数年ぶりのプライベートメールである。文面に目を通して、すぐに画面を閉じる。

「自慢か」

リーに知られたことより、そちらのほうがよほど悔しいことに気付く。「いかんな」と、彼は、思わず頭をかいた。

彼ら兄弟は、そろって、年下の従妹に弱い。

5　初夏

山は黒く、森は深い。豊穣の大地に背骨のように突き出た小山を木々が覆う。地に根づいて数千年、植物の隆盛は常に一定であるように見える。一時的に人間の都合で増減されるが、総量では変化を感じさせないのだ。そのなかにあって、ひとの暮らしはまことに規模の小さなものだと思えた。熱量も、時間も。

その場所を前にすると、彼は、故郷を囲っていたいくつもの山を思い出す。峰はなだらかに、日の出と日の入りを受け入れて光った。春はふきのとう、たけのこ、蕨にぜんまい。秋は栗に自然薯。むかご。山は、実りの喜びを伴った。そのさまを思い出すのである。

平安市はいくつもの山と森を抱えている。そのなかで、ひときわ大規模な森林地帯が、鎮守の森と呼ばれる森である。ある場所からはいっそ、樹海と呼んだほうがいいように深い。少女のたったひとりの冒険を、友人が止めたく思うのも無理からぬ、と彼でも思う。しかも、真夜中では、いっそう足元が悪く、あたりは不気味な死の風景に変わる。

鎮守の森につながる平安神宮の正門、大鳥居の前。月明かりに照らされてつやつやと光るその朱色の大鳥居の根元に、彼と、三人の仲間はいた。

「だからってねえ」

隣で、眠そうな目をこすって少女が呟く。銀色の髪の美貌の少女、ミューである。

「実際に動くのはあたしたちなわけだからねえ」

「じゃあ、寮に戻る？　ギン」

「いや」

「でも、女子寮は、ばれたら大変だろう。やっぱり、よしたほうが

いい。俺、送るよ」
「いいの。そのために、カレンに頼んできたんだから」
「でも」
「いいったら」
リヒトの袖を引いて、ミューは、しかたなさそうにため息をつく。その横で「すみません」と、さらに小柄な少女が頭をさげた。
「私が頼りないせいで」
「いや」
「でも、皆さんは寄宿舎でお暮らしですもの」
「大丈夫です。同室の奴は話がわかるから」
テッセンの頼みで、アルリシャの兄弟だか夫だかを探しに鎮守の森に行くサヨラのつきそいをしているところだった。かくりよのものは夜行性なので、探索は夜中。午前零時に、鎮守の森の入り口にある大鳥居のわきで待ち合わせたが、リヒト、ミサビ、ミューの三人は、必然的に、寄宿舎をこっそり抜け出す、という違反をしなくてはならない。夜間の無断外出は、ばれたら即退寮の重大なものだった。リヒトはグエンに、ミサビはシルルにアリバイ工作を頼んできた次第である。
今日が最初の捜索の日だ。リヒトは、噂に名高いサヨラと、ようやく初対面をはたした。真っ暗闇の中、鳥居の根元によりかかりつつ挨拶をかわす彼らのわきで、ミサビが、持ってきた提灯に火をいれる。見つかってはいけないので、ここまでの道のりは忍び足の闇夜行路であった。
「さて、行こうか」
灯りを見ると、ミューでさえ、固くしまっていた口元をほころばせた。三人にむかって、ミサビが鳥居のむこうをさす。
「ひゅうがは、片割れには、境内では会ったことがない、と言っていた。仲間から、そんな話もきかない、と。僕も、仲間内や知り合いが、“彼”を相棒にしているというのは聞いたことがない、ということは、どこか奥にひっこんでいるんだろう。一日、二日で見つ

からないことは、覚悟しておこうね」
「はい」
手に虫かごを提げたサヨラもうなずいた。
「一般の立ち入りが可能な境内と、その少し奥まではご案内できますが、そこから先は私も……一応、この子たちを」
かごの扉が開くと、テントウ虫が飛び出して、彼らの肩に一匹ずつとまった。
「もしはぐれても、その子たちがいれば、居場所がわかりますから」
「一応、何かあったら境内に戻る、ということにしておこうか。――ねえ、サヨラさん。何でテッセンがわざわざ僕らをつきそいにしたかっていう理由については、やっぱり話してもらえない？」
魔法のことを、サヨラ以外の三人はいっさい知らされていない。二週間もすれば帰国するテッセンを待たず、なぜこんなに急いで片割れの道祖神を捜す必要があるのか、納得していなかった。
「すみません。今はまだ」
ひとり、事情を知るサヨラは口をつぐんでいる。アルリシャとテッセンの諸事情を、彼女は、ある意味では本人より詳しく知っていたが、虫に乗じてスパイ行為と呼べることをしている自覚があったので、自分からは言いにくかった。全身から発散される、いかにも申し訳なさそうな感じと、“事情があるんです”の目の色に、リヒトもミサビも、深くは追求できない。今のところ、彼らの行動を支えているのは、のっぴきならない事情以外で頼んでくることはないはずだ、という、テッセンへの、スプーン一杯ほどの信用による。
しかし、ミューは違った。テッセンにではなく、サヨラに対して、二年前、マチコやアスカを怖がらせていた、ルール遵守の“鬼の銀色”が、久しぶりに顔を出していた。
「というか、留学先に第三者の術の媒介としている、って行為だけでも、じゅうぶん、法律的にどうかと思うけどね」
にらみをきかせながら、ずけずけと言う。
「虫の視界を借りるって、そんな破格の能力、なんで生かさないの。

仲介業なんて、せせこましいことしちゃってさ。そんな能力があるなら、もっと大きな仕事だってできるだろうに。おまけに、たかだか十二だか十三だかで世をはかなんで隠居なんて百年はやい。親不孝もいいところだわ。馬鹿じゃないの？」
「私は、大きな仕事をする器ではないんです。本当に、むいてないんです……残念なことに」
「ふうん。ま、そうかもね。あんた、体、弱そうだし」
ミューは、遠慮のない目つきでじろじろと少女を見る。さすがにむっとして、サヨラは、
「貴女にいわれたく、ないです……」
黒い目が、灯りに照らされたミューの全身に向けられた。今日のミューは、夏らしい縮緬の単を着ている。色は、闇夜に溶け込む黒。袖には、銀色から紅藤のグラデーションに七宝花菱の模様。邪魔にならないようたすきをかけ、黒の袴を合わせていた。和装は、人の体を曲線でなく直線で見せるため、肥満であれ痩せ型であれ、体型を隠すのにうってつけだが、華奢な体のラインは、女同士にははっきりわかるようだ。色白、といえばきこえはいいが、夜の闇ではいっそ青いほど白い顔も、本当は病弱なところをさらけだした。ミューは、見抜かれたことに気付くと、露骨に嫌な顔をして、ふん、と鼻から息をもらした。
一方のサヨラは、テッセンと会ったときと同じ、質素な紺絣に細い白い帯で、足元は草鞋である。
「というか、貴女って、本当に――」
「何よ。何か言った？」
「いえ」
リヒトとミサビは、険悪な雰囲気を感じ取って、さりげなく、並んでいた少女二人の間に入った。参道はまだ、四人が広がって歩けるほどの幅がある。そのやりとりの間に、平安神宮の本殿が、暗闇の先に見えてきた。風に揺れるこずえの音が、真夜中だと妙に恐ろしげに聞こえる。近づくにつれて神域の雰囲気をびしびし感じて、

リヒトは気後れした。
――変な場所だ。遠近がとりにくい――空間が歪むような気がする。
夏の夜気特有の、重たい、水気をたっぷり含んだ涼しい風が頬をなでる。森に近づくにつれ、冷え込んだ。
――似ている。
ふいに思い出したのは、あの夏だった。時間が止まった夏。分断された記憶。
「初めてだっけ」
リヒトの沈黙を破るように、隣から、ミサビが言う。
「何を考えてたの。今、怖い顔してたね」
「そう？」
「ああ。危ない感じ」
隣を歩くミューが、顔をあげた。リヒトは、大丈夫、というように笑う。
「いや。ええと――初めてじゃないよ。今年のお正月に、みんなで参拝したじゃないか。アルバイトの時も、散歩とか、夕涼みに」
「あ、そうか。でも、完全に真夜中――っていうのは」
リヒトはうなずいた。
「初めてだ」
「変な感じするでしょう、ここ」
「ああ」
――今は思い出すな。
「見てください」
サヨラの控えめな指摘で、よく目をこらすと、両脇の林のそこらじゅうに、かくりよのものがひしめいているのが分かった。動物の形をとらず、魂だけがふらふらと浮遊する様子。一瞬、月と見まごう、草陰に動かない淡い光や鳴き声。夕涼みのときなら、幻想的な光景だったが、今は、ともかく不気味である。四人は、横並びの間隔を、自然とせばめていた。

「私も制服にすべきだった」
隣で、袴の足元を気にしながらミューが言った。
「そうよね。飾りを外せばいいんだわ」
「見つかったら、一発でばれてしまうけどね」
男二人は、動きやすさを考えての洋装だが、彼らの洋装とはすなわち制服のことである。銀モールは外していたが、特有の形から、平安学園の生徒だと一目でわかる。
「他に人はいなさそう？」
「さあ――」
夏は特に、逢引の男女が多くいる場所である。周囲を警戒しながら進む。そのとき、いつのまにかミューの肩にのっかっていた彼女の相棒、白い小蛇のルーが「今日は、ご主人たち以外に、森に人間はいらっしゃらないようよ」と声をあげた。
「あのね、最近ね、よく高位のかたがたもいらっしゃるから、人間のほうでもその気配を感じて、近寄ってこないんですって。ご主人、チャンスよ、これ。いつもと違うわよ」
「高位の？　最近？」
ミサビが尋ねると、ルーは「そうよ」とうなずいた。
「どうして？　ルー」
「んーと。ええと。ごめんなさい、僕は、よくわからないわ」
ミューの質問には、困ったように長い体をすくめた。彼は、かなり弱い立場の精霊で、気まぐれに彼をいじめるものもいるので、ほとんど仲間たちと一緒にいないのだ。情報にはかなりうとい。その点、もっとも頼りになるのは、社交性たっぷりのミサビの相棒、ひゅうがだが、なぜか、今夜は現れない。「先に境内で待ってるかもね」とミサビは言った。しかし、誰にも言っていないが、彼にも、最近どうもひゅうがの様子がおかしいように思われてならないのだった。
「なんでだろう？」
ミサビは、誰にも聞こえない声で、口の中で呟く。彼は優等生だ

ったが、さしもの彼も、ひゅうがの動揺を、友人の依頼と結び付けることまではできなかった。もしも彼が、そのことを仲間に素直に相談していたら、おそらく、同様の感慨を、大勢が抱いていることを知っただろう。平安で、“魔法”の存在は、使い魔たちに急速に広まっていた。知らないのは人間ばかりである。

視界が開けた。境内だ。

そこには、大勢のかくりよのものがいた。しかし、四人は固まってそこに近づかないよう、森の端に移動する。マナーとしての不干渉を知っているからだ。

境内からは、細い道が森のなかに何本も伸びている。案内板が立っていたり舗装されている道も途中までで、奥は、原生林のまま放置されていた。彼らが行こうとしているのは、その細い道の先だった。

「鎮守の森は、別名を迷いの森という。御伽噺みたいな名前だよね。でも、ここは本当に“迷い”の森だといわれるんだ。神隠しもあるし――ここから生まれた森が、平安市を円状に囲っていく。外界との境界の森だ。ゲットーの人間を外に出て行かせないために、ある場所からは本当に複雑な迷路だという噂もあるし、逆もしかり。人の侵入を阻む。つまるところが、結界」

「ええ。だけど、私たちにとっていちばん恐ろしいのは、迷った挙句に、本殿の奥の森に気付かずに入ってしまうことです。注連縄がめぐらしてあるから、そんなことはないと思いますが――上位神には、私たちのルールが通じないおかたもいらっしゃいます。祟られたくないなら、たえず方角を気にすることです」

サヨラが、寺社のほうを見た。その背後にある、およそ一キロ四方の空間がそうだという。かくりよの王や女王たるものが遊ぶ、神域中の神域。神職しか立ち入りを許されない、神の庭。リヒトは、直視できなかった。そちらを見ると、心臓が早鐘のように打ち始める。

見てはいけない――恐怖に近いほどそう思う。初めての感覚だっ

た。昼間とまるで違う、と彼が呟くと、
「どうしたの。大丈夫」
ミサビが、うつむいた彼をのぞきこむ。
「ああ。――ルーの言ったとおりだね。今日も、来てるんじゃない。その、高位のひとが。すごい――気？　オーラっていうのかな」
――これが、そうか。
「大丈夫」
「ああ。平気」
袖をひいたミューにだけ聞こえるように呟いた。ミサビが、
「今日は初日だ。とにかく、地形や雰囲気だけをつかもう。四人一緒に動く。明日も学校だし、早めにきりあげないとね」
提灯で、暗い道の先を照らしながら言った。リヒトは、大きく息を吐くと、道の先の森に視線をうつす。蛇行した道の先は闇だ。果てしない。ここから、たった一人の道祖神を見つけ出すのは、途方もない作業に思える。
「行きはよいよい、帰りは怖い」
笑いを含んだ声。ミサビの「行こうか」で、四人は道の先に一歩を踏み出した。
しかし、やはり“迷いの森”――一筋縄ではいかない。二時間ほどで引き返してきたとき、彼らは消耗しきっていた。さまざまな精霊にからかわれるのはともかく、問うても拝んでも答えない神が多くいた。最初は気楽な顔でいたサヨラもミサビも、徐々に、表情は険しい。
長期戦を覚悟した。それでも、テッセンの文句を言うものは、四人のなかにはいない。
そして、そのころ当のテッセンはというと、またも別のトラブルに巻き込まれていたのである。

5―2

のちに、奇跡の月曜日と呼ばれるその日、蓬莱支部は大騒ぎだった。いっせいに回ったメール。辞令で埋め尽くされた掲示板。いまだ不在の所長へのリコールを求める署名。興奮と驚愕は光速で伝播した。

魔法部門復活。

スチュアート・チャンの逆転大勝利。

ゲットーの夢、ふたたび。

スリジエも、感慨深く思わないわけではない。五年という月日を、蓬莱で過ごしてきたことに変わりはないのだ。その日の朝、大部屋に移動した彼らは、スチュアートの挨拶を聞いた後、あわただしくミーティングへと突入し、それぞれの担当ごとに散っていった。

実験。解析。設計。魔的材料。渉外。急遽集められた人数は三十人ほどだが、すべて、蓬莱支部、いや、ゲットーじゅうの魔的研究所きっての精鋭である。スリジエは、逃走を阻止するリーの計略によってか、そのなかで、こともあろうに医療解析のトップにされてしまい、しばらく、目の回るような忙しい生活が始まることを覚悟した。スチュアートが魔法の完成までに掲げた期日は一年たらず。最終発表は十二月、実用化は三月、という、ほとんど前例のない強行スケジュールである。実質、許された時間は半年ほどしかない。ほぼ、二十四時間体制で臨む必要があった。

蓬莱支部の大幅な方向転換は、最終実験に参加していた留学生三人にも、すぐに伝えられた。市長命令で、支部において彼らはＶＩＰの待遇を受けることになった。蓬莱市は、三人の生徒に用意されたカリキュラムを、独自権限で一時的に取り消し、“魔的研究所における研修学生”に彼らの身分をきりかえた。こうして、テッセンは、放課後の武術の鍛錬を免除されたわけである。ミシェルとエレ

ナも同様に、語学や文化研修生としての留学生ではなくなった。
この変化は、ちょっとした騒動を彼のクラスで巻き起こした。テッセンは、バディであったジム・リー――褐色の肌に亜麻色の髪の、トライリンガルの少年から「どういうことなんだよ」となじられたが、彼としても、事情を正直に話すわけにはいかない。また、彼のわずかな語彙で、うまく説明しようもない。テッセンは、類？の武道優秀ないち生徒から、“蓬莱市の機密にかかわる特別な”生徒になってしまった。突然明かされた事実が、何も知らされることのない親切なバディの少年に与えた影響は大きかった。どんな文句でも受け止めるつもりだったが、淫売の息子、と彼でもわかる言葉で罵倒され、スパイを見る目で見られて、さすがにショックを受けた。そのうえ、授業の公的欠席を融通するよう、学園側が魔的研究所からきつく命令されたため、学園じゅうで、他の二人とともに、一躍有名人となってしまった。
かわりといってはなんだが、良いこともあった。魔的研究所での実験協力で、単位がもらえるようになったのだ。彼らはときに、学校のかわりに、マテ研へと、堂々と通学する権利を得た。無理をおしての二重生活から解放されたのである。テッセンはほっとした。こうなっては、クラスメイトと顔を合わせる時間は、少ないほど良かった。
と、同時に、嫌な予感も現実になった。七月末から八月に予定していた帰国――夏季休暇であるが、その許可が蓬莱総府から下りなかったのだ。ほかのゲットーへの再びの留学も消えた。それは、年度いっぱい、蓬莱市に拘束される可能性をしめしていた。ひとしれず彼は焦った――藤原家での、母親の初盆、法事などもそうだが、アルリシャの片割れに関して、まったくのあるじの不在のまま、友人たちに、捜索の一切を委託せざるをえなくなった。もっとも、それに対する友人の返答は「お土産五割増しね」という、まことにあっさりしたものであったが。
そして、別の事件がまた、彼を待ち受けていた。

部門復活から、怒涛の一週間が過ぎたその日、彼は、マテ研から帰宅する途中だった。ミシェルとエレナとはすでに別れ、ガス灯の頼りない灯りのなかの、真っ暗な夜道だった。

魔法の研究開発が公に復活してから、新たに実験に参加し、彼らとともに魔法を習得している軍人たちがいる。スチュアートの元チームのメンバーとほぼ同時に、彼の要求で召集に応じた連合ゲットー軍の軍人で、いずれも猛者である。隣で、自分たちが一週間かけて体で覚えた魔法の原理や操作法を、やすやすと習得されるのは、すでに学校生活で正当な評価をもらえなくなって“これしかない”テッセンには辛いことだった。しかも、その日はとうとう、実験段階において彼らに追いつかれてしまい、怒りと不満を腹のなかに感じた。自分のふがいなさに対する怒りだった。

急速に差をつめられるのは、当然といえば当然なのだ――彼らは、ゲットーじゅうから選ばれた、優秀な兵士。しかも、自分から望んで“新たなる力”を体得すべくやってきたので、そもそものモチベーションが、生徒たちとは違う。魔法が、銃や剣や槍と同じものであると判断したなら、おそるべき集中力で、そのしくみや使い方をものにしていく。私的な感情や疑問を微塵も持ず。

テッセンは、目から鱗がおちた。彼らが、自分が属する類？――実戦兵士養成過程を、ほとんどトップできたものばかり、ということは、つまり自分の先輩にあたる存在で――いずれは、彼らと同じ位置に立たなければならないことを思い知ったのだ。人生で、これほど間近に感じたことはない、つまり、彼らは、自分の生涯のライヴァルだった。そして、目の前に自分よりすぐれた技量を持つ相手がいれば、ますます鍛錬にのめりこむのが彼の性格である。ミシェルやエレナにはついに感じたことのなかった敵対心が、軍人たちに対しては、はっきりと自覚できた。

ここにきて、テッセンは、アルリシャの片割れを切望するようになった。魔法、というものが、ようやくわかってきたところでもある。テッセン流にいえば、身に染み付く、という言い方になる。竹

刀が腕の延長になるように、魔法もようやく、その感覚に近づいていた。
――平安に戻りたい。
戻って、アルリシャの片割れを、この手で、足で、見つけたい。
そんなことを、歩きながら考えていた。そのときだ。
ひたり、ひたり、とついてくる、誰かの気配を、彼は背後に感じた。
実は、この感覚は、その日が初めてではなかった。魔法が公に復活して最初の日、マテ研を夜に出た帰宅中が一度目で、そのあとは、夜道を歩くたびに、誰かにつけられていることを感じ取っていた。
「誰だ」
呼びかけても、やはり返事はない。
しかし、細い路地に入り、暗闇に彼の体が隠れたとき、それはついに襲ってきた。手に、何か小さな機械のようなものを持ち、全速力で突進してくる――テッセンはふりむきざまに、相手の体を弾き飛ばす。光学明細のマントで、周囲の闇に溶け込むようカモフラージュされた体を、一瞬見失う。空を切る音を頼りに、彼は、再び襲い掛かってきた相手の腕をつかんだ。反撃を予想していなかったに違いない、驚愕のふるえが感じられた。
「フゥアーユ？――と……ニィシィシュイ？」
丁寧に尋ねても返事はない。相手は、マントの下からナイフを取り出した。テッセンは丸腰である。しかし、彼にとって、たいしたハンデではない。
「俺をやるんなら初撃で落としにこいよ」
格好つけてそう呟く余裕さえあった。首を狙って繰り出されたナイフの手を叩き落とす。次に出そうとした銃も、その手首ごとつかんで勢いよくねじ上げると、銃は地面に転がった。全身を覆っているマントの頭部に狙いを定めて、テッセンは、全体重をかけて拳を叩き込む。すんでのところでかわされる。相手は、彼のリーチの外側に出ると、そのまま、全速力で逃げ始めた。

「あ、こら、待て」
といわれて待つものなどいないので、当然、追いかけるはめになった。しかし、相手は、テッセンより地理を知っていた。下宿を通り過ぎて五キロ先まで追いかけっこは続いたが、ついに逃げられてしまう。さすがに肩で息をしながら、家に戻った。
――誰だあいつ。
闇討ちにあうおぼえはない。しかし、相手を身近に感じて気付いたことは、
「――にんげん……か？」
身のこなしが、ゲットー人とは違うような気がした。ゲットー人は、反射神経の伝達速度が人間より速いので、人間で、どれほど武術の達人であろうと、自然とゲットー人と体の使い方が違ってくる。さきほどの相手は、ただものではなかった。軍人だったかもしれない。ゲットー人でも、たとえば、ミシェルやエレナといった、類？や？のものなら、何とかなったかもしれない。しかし、テッセンにとっては“遅”かった。最初の一撃には、彼の力のほどをうかがうような様子さえあった、と思う。
おそらく、自分を学生だと知って襲ってきた、とテッセンは思った。類？とまでは知らず、普通の学生だと思って。だから、多少の侮りがあった。何とかなると思われたのだ。
「どういうこった」
殺気は感じなかったので、殺すつもりはなかったのだ。目的は、誘拐だろう。しかし、なんのために？
さすがのテッセンでさえ、魔法に絡んでのことだとわかる。しかし、相手が本当に人間だったとするなら、魔法の件が外部にもれているということだ。
部屋に戻ると、アルリシャが籠の中で眠っていた。彼に気付くと、顔をあげて「おかえりなさい」と寝床の上に立ち上がる。
「どやった？」
「俺はいつもどおりさ。そっちは？」

「かんにん。まだや」
「そうか――」
探索がはじまって一週間。帰国を予定していた日は、もう三日後だ。
「あいつらも、合宿やらバイトやらもあるだろうしな。そのあいだは休むとしたら――」
ホームシックではない。別種の感情だ。
いらだちを押さえ込んで、彼はため息をついた。ところが、襲撃を報告すべきかどうか思案しながら、翌日、マテ研へと“登校”した彼を、別の事態が待ち受けていた。
暗い顔で、実験場の横にある待機場所で立っていたミシェルが、テッセンを待っていて、彼が入室したところをすかさず詰め寄ってきたのだ。
「お前か？」
「――え？」
すでに、実験のメインは軍人たちにうつり、学生たちは微妙な立場におかれている。スチュアートは口に出さないが、本来、彼が実験に使いたかったのは、粒子の操作や実戦にむいた軍のものたちなのだ。テッセンは知らなかったが、イース・ゲットー、ロンディニウム・ゲットーから送り込まれた学生スパイであるミシェルやエレナも、ここにきて、自分たちの目的を見失って戸惑っていた。情報を逐一本国に送っても、本国が、魔法の開発について蓬莱支部と手を組んだ以上、学生たちの言葉など頼るに値しない、というわけである。こうして、ミシェルとエレナは、目に見えてやる気をなくしていた。それを、すでに隠す気などない、というふうに、その日、ミシェルは、袖の下に隠した包帯を示して「お前じゃないのか」と低く言った。
「まさか」
お前も襲われたのか、とテッセンが尋ねると、「君も」と反芻して、ミシェルは目を見開いた。話を照合すると、間違いなくく、昨

晩、二人共に時を前後して、同じ人物の襲撃にあったことが判明する。ミシェルはしばらく考えこんでいたが、やがて、自分がもともと、ロンディニウムから送られた学生スパイであることを、ついに明かした。テッセンは驚いたものの、前例について知っていたので

「そうか」というだけで、本来の問題に移った。

「なんで僕たちが襲われる？　しかも、気付いたか。相手はたぶん」

「ああ。人間――だろう」

「そうだ」

周囲には、軍人が大勢いて、実験の順番を待っている。彼らに相談しても仕方がないことは彼らにはよくわかった。

「スリジエが言ってたな。俺らには、警察をつけてある、と。なら――警備してもらってるはずだが、相手は、その隙をついてきた。マテ研にいるあいだしか守ってもらえないとしたら、それ以外は、自分たちの身は自分たちで守らなければならない。できないとなったら――」

実験自体から、学生三人は、外される恐れがあった。彼らにとっては、今更、というべきことである。ミシェルがうなずく。

「このうえ、実験からも外されたら、僕たちはどこにいく。今更、学園に戻って、普通の学校生活を送ったってどうしようもないだろう」

「どうしようもないどころか、さぞ、お寒いことになるだろうな。いや、ちょっと待て。エレナは？　今日は、来てないのか」

「それなんだ。さっきから、僕も――もしかしたら」

「ハイ、エヴリワン。今日もがんばって参りましょう」

そのとき、待機室のドアが開いてスリジエが顔を出した。疲れた顔である。彼は、その日の予定を口頭伝達すると、軍人を実験場に送り込んだあと、学生たちを手招きした。

「なんですか？」

「確認したいことがあってね。昨晩のことなんだが」

「こっちもあります。あの、エレナは？」

スリジエの目が、微妙な色を帯びた。
二人は、少女にも昨晩、同じ事件が起こったことを知った。

5―3

人間による襲撃の順番は、ミシェル、テッセン、エレナの順だったことが分かった。最初に襲われたミシェルが、その足でマテ研に引き返して、警備部に事情を告げたとき、ちょうどテッセンが襲われている最中だった。彼が撃退したので、相手はエレナのもとに向かった。警備部の人間は、テッセンの下宿へ安全をたしかめに行く一方、エレナの行方も追ったが、テッセンは見つからず（おそらく、五キロマラソンのあと、熱を冷ますためにのんびり路地を歩いて帰っていたのが原因だった）、何者かに襲われてあわや誘拐されるところだったエレナを見つけた。救助ののち、警官たちは、テッセンの下宿を訪れてひそかに無事をたしかめたが、特に周囲に不審な人物も見当たらなかったため、本人の確認を取らずにひきかえした、というわけである。

「エレナは、全治一ヶ月ってところだね。うちの医療部門が預かってるよ」

「無事なんですね？」

「一応ね。しかし、運が悪かった。君たちの拉致に失敗したもんだから、相手も焦っていたんだろう。彼女の話では、背後からいきなり刺されたということだ」

スリジエは、学生たちの健康管理や安全確保は自分の担当だが、と言って、ため息をついた。彼は、コーヒーのカップを二人に渡すと、蓬莱支部の抱える実情を、正直に話した。ハク盗難から続く、人間側の内通者の存在――その内通者が、おそらく、今も、魔法についての情報を虎視眈々と狙っているであろうこと。そのためには、手段も問わないかもしれないこと。

「しかし、まさか、まっさきに君たちにくるとはね。上は、スチュ

アートの身の安全を第一においている。彼が失われれば、魔法の実現は大きな後退を余儀なくされるから。だけど――敵さんは、君たちの持つ情報をとりにきた。こうなっては、君たちにも、二十四時間の警備をつけなければならないな」
「ちょっと待ってください」
ミシェルが手をあげた。
「だからといって、ドクターの警備人員を僕たちに割くのは危険じゃないですか。それこそ、相手の思う壺かもしれないじゃないですか」
「そのとおりだ。――そうでなくとも、警察は、内通者の捜査でいっぱいいっぱいだ」
「つまり、人手不足ってことか」
「そのとおり」
「俺は、警備は必要ないと思うが」
テッセンが言うと、ミシェルとスリジエは顔をあげた。
「あの程度なら、なんとかなるからな」
「しかし、今回は相手が一人だったから、そうして君は無傷なんだよ」
「人間側のスパイなら、ゲットーでは派手に動けないはずだ。犯人もすぐに割れるだろう。人間のふりをしてた、ってんなら、話は違ってくるが――ゲットー内に駐留できる人間の数は限られているんだから」
「ああ、テッセン、君は、人間をあなどっている。連中は、ハク盗難以来、十年も尻尾をつかませない相手だ。彼らがペトルーシュカを作った、ということを忘れてはいけないよ。蓬莱は、前線なんだ。平安とは違う」
その言い方に、テッセンは何かを感じ取ったらしかった。黙り込んでしまう。ミシェルは「とにかく、しばらく様子をみます」と言った。彼は、仲間のエレナを傷つけられて、明らかに動揺していた。顔色がずっと冴えない。

「しばらくは、連中も、何かしようなんて思わないでしょう。僕も、類？とはいえ、ゲットーの人間です。エレナのことで、じゅうぶん教訓も得た。わかっていて警戒すれば、そうそう、妙なことにはならないと思いますし――そうですよね」
「そうだね」
スリジエは、冷静に二人を見くらべた。ここにきて、ミシェルとテッセンの違いがはっきりと彼にはわかった。戦うものと、戦う前に考えるもの。類？と類？――実戦兵と交渉者。予想外の攻撃に対して、前者のほうが圧倒的に強い。肉体的にも、精神的にも。
実験のサンプルが軍人たちに移った以上、正直にいって、学生たちの存在が、スリジエには無用なものに思える。彼らを守る最上の策は、ただちに、本国へ帰国させることである。契約をふりかざしたところで、やはり、彼らは、“たかが学生”なのだ。
何が何でも軍人たちにくらいついていく、という気概がないのなら。
ミシェルも内心は、それが最善の策だと思っているに違いない。顔を見ればわかる。レベルの差はあるものの、少年が同族であることを、スリジエはとっくに見抜いていた――ミシェルの魔法への執着も、熱心な姿勢も、今なら使命ゆえだとはっきりわかった。彼の情熱は、失われている。そんな子どもを実験に関わらせることを、スリジエもう、よしと思わない。
――ミシェルの帰国許可を、蓬莱総府に出そう。
彼は密かに、手にしたコンピュータにメモした。
しかし、問題は、今ようやく、魔法をものにしかけているテッセンだった。これも、顔を見ればわかる――終わったことを考えている暇はない。こうしている間にも、軍人たちは魔法を使いこなす。早く自分の番が来れば良いのに――あまりにもあからさまなので、スリジエはおかしくなった。
「今日は帰っていいよ、ミシェル」
「え？」

「昼間なら、警備の手もあるし、そこらへんにいる捜査関係者も使える。今のうちなら、何も怯えることはない。一人暮らしじゃないだろう？」
「はい。同じゲットーの――留学生と」
「なら、そうしてほしい。しばらく、自宅待機をしててくれ。長くは待たせない――すぐに、君たちの警備についてなんとかするよう、スチュアートにも相談してみるから」
「そうですか」
ミシェルは、ほっとした表情になった。五分後、「では、失礼します」と彼は出て行った。
室内には、スリジエとテッセンの二人きり。
「さて」
スリジエが振り向いたとき、テッセンは、指先から小さな炎を出したり、ひっこめたりしていた。部門スペースの中なら、小規模な魔法の使用は許可されている。
「ちょっと話そうか、テッセン」
「――なんですか」
「あれ、むくれてるの？」
スリジエが笑って尋ねると、彼は「べつに」と呟いて、椅子に座った腿の上に両方の拳をそろえた。
「なんですか？」
「意思確認だ。テッセン――君は、軍人たちにまざって、学生の身で、魔法実験に参加する意欲を失ってはいないよね」
「もちろんです」
「人間に、襲われても――この先何があっても、その決意は変わらない？」
「ますます強くなりましたね。望むところじゃないですか。たしかに、そうだな――学校でつまはじきにされることは予想してなかったし、そっちはかなりこたえました。でも、考えてみたら、俺はずっとそうでした。貴方も、医者ならもう知ってるでしょう、俺の履

歴――生まれてからずっと、俺を見る連中の目は、普通じゃなかった。クラスメイトも、医者も、親も。それで、一時期は、妙につっぱったりもしたけど、今はもう、そんな段じゃないってわかりますよ。スチュアートは俺がサンプルなんじゃないかって、変な期待もあって、スカウトしたんでしょうが――まあ、結果的には、軍人どもが来たから、もう、今は俺のことなんか、たいして興味もないんでしょう？――いや、否定しなくてもわかります。いくらなんでも、そのくらい」

息継ぎをして、再び口を開く。

「でも、それでわかった。俺は、そっちのほうが悔しいんだってね。人間に襲われるのなんか、たいしたことじゃない。相手がペトルーシュカならともかく、あんなの、どうってことなかった。むしろ、取り逃がした責任のほうを感じますよ。少なくとも、俺が相手を捕まえていれば、エレナは無事だった。過ぎたことをいっても、しかたがないですが」

「そう。いたってまともな考え方だね。類？の生徒の」

「ええ。だから、警備は不要ですよ――それより、ドクターが危ないというなら、スリジエ、あんたも危ないんじゃないか。大丈夫ですか」

「ああ、私はまったく問題ない。まあ、そうか。君がそう言うのなら――軍人たちがやってる実験と平行して、別の実験もあるんだが。君、そっちにも参加してみるかい」

「別の？」

「ああ。スチュアートが以前言っていたでしょう。魔法言語の作成をね、昨日来たばかりのチーム……といっても一人だけど――その人がやってる。脳とか、ハクとかもいろいろいじりまわされると思うけど、君は頑丈だから――けなしてるんじゃないよ、君の体はね、魔法の習得速度では下でも、体格とか腕力とかでいったら、彼らと互角だよ。疑うんなら、データ、見せてあげてもいい。そう。幸い、軍人たちのおかげで、君の空き時間も増えているから――で、うま

くいけば、そうだね――多少、魔法を使うのにエネルギーの効率が良くなると思う。つまり、威力があがる。もちろん、断言はできないけど、その可能性がある。行ってみるかい？」

「行きます」

即答した。

スリジエはにやりと笑う。

昔から、この少年とは話があうのだ。

5―4

さて、蓬莱支部で、いちやく時の人となったスチュアートに関して、別種の噂がたっている。それについてスリジエがたしかめたのは、いよいよ夏本番という、七月下旬のことだった。
「小麗というかたに、プロポーズしたって、本当ですか。例の、クッキーのひとですよね」
「――なんで君が知ってる」
「噂の的ですから。現場、蓬莱茶館でしょう。店員と所員は、たいてい顔なじみですから」
「そうか……うん、そのとおりだ。結婚を申し込んだ。魔法が発表されて、パッケージ化されたら、と――そのときに式だ。入籍はその前にするかもしれないがね」
「なぜこのタイミングで？」
「魔法が発表されたあとにプロポーズなどしてみろ。私を見る彼女の目は、おそらく、魔法をこの世にもたらした博士さま、だよ。ちゃんと異性としてみてくれるか、非常に怪しい。ああみえて……といっても君は知らないか――ミーハーだからね。だからだ。それに、もし魔法が現実になったら、プロポーズどころじゃない。その瞬間からあとの私のプライヴェートな時間は、五年はなくなるとみて間違いないね。インタビュー、公演、修正作業、審議会、公聴会、有識者会議、パーティ、その合間に、まだまだ研究しなければならない。ゲットーじゅうかけずりまわって、式をあげる余裕などなくなるだろう。気付いたときには彼女は人妻になっている――ヴェネストロムの不滅の恋人の件を、笑っていられなくなるよ。だから、部門が復活するとわかったとき、衝動のままに、した。受け入れてもらえてよかったよ。この、今にも死にそうなときも、彼女が待って

いると思えば粉骨砕身努力できる」
　スチュアートの頬は、七月に入ってから、げっそりと肉がそげおちていた。一睡もしない日が二週間続くときもある。本当に粉骨砕身してしまいそうである。
　二人は、久しぶりに、現実に顔をつきあわせていた。とはいえ、今、彼らがいるのは、部門スペースの隅に作られた、通称“塹壕”――仮眠スペースである。三メートル四方の部屋の、天井まで届く三段ベッドの上下で、寝転んだまま話していた。顔をお互い上に向けて、というのが正しい。上にいるスリジエは、暗い天井を見ながら「なるほど」と相槌を打った。
「君も、誰かいいひとはいないのかい」
「いませんねえ」
「いたほうがいい。精神衛生上、楽だ」
「精神衛生ですか」
「そうだ」
　スチュアートは、眠りに落ちる前の、妙にはっきりした声で呟いた。
「君は私を、恐れを知らぬただの天才だと思っているだろうが、魔法について、魔法が存在する未来を思うとき、私は、期待や使命感のほかに、ちゃんと、責任や恐怖を感じているよ。ただ、私がやらねばならない、とわかっているから、つとめて表に出さないだけだ。時代の流れの中で、運命が私を放っておきはしなかったのだから、どうしてもこの仕事をやるべきだ、とね。私の意思とは関係ない力も、おそらく働いている、と私は信じているよ。だから――な？仕方ないだろう。魔法を、時代が求めているんだから。君は以前、心配だなんだとぐちぐち言っていたがね」
「はあ」
「だから、一人でも研究を続けた。チーウが復活するまでは、それでも私だって不安だったさ。だけど、今はどうにか筋道もついた――そして、次の課題も、見えてきた。私は、だから、もう一生、魔

法というものから離れられない。パイオニアとしてたった一人、この世界に居続けるしかない」
「はあ」
「それは、とても、さびしいことだよ。だけど、彼女を抱きしめられると思えば、少しは安心できるんだ。これは、悪くない」
「悪くないですか」
「ああ、悪くない。君もだから、悪くないようになってくれ。では、ご拝聴ありがとう」
そのまま、寝返りをうつ気配。寝息が聞こえ始める。
スリジエは天井を見つめたまま、スチュアートのセリフを反芻した。
スチュアート・チャンでも、誰かに恋をするということがあるのだ。癒しを他人の優しさに求めるということがあるのだ。はじめて、ボスの人間らしいところを垣間見た気がして、彼はしばらく眠れなかった。
魔法は完成に近づいている。
時代の要請、か。
スリジエは、近い天井に、星型の模様と、小さな文字列を見つける。爪で刻まれた落書きだった。
「日永星火、以正仲夏……」
日永く、星は火、もって仲夏を正す。『書経』の一説――“火”は、蠍座アルファ星、アンタレスの中国名である。明るさを変える変光星で、この星の南中で、古代のひとは夏至を知った。よく見ると、星の模様は、蠍座をかたどっている。夏も近いよ、という思いをこめて、チームの誰かが書いたのだろう。
「春過ぎてと思ったら、もう、か」
彼は、頭の下に両手をさしいれた格好で、しばらく天井をにらんでいた。
――生徒たちを襲ったのは、自分を襲撃してデータを奪っていったやつと同じか、仲間だろう。自分はわからなかったが、テッセン

ははっきりと人間だと判じた。しかし、人間が、粒子を多数扱っているこの研究所に入り込むのは、かなりのリスクだ。
ゲットー人の協力がなければ成立しない。それも、複数の可能性が高い。いったい誰が――
考えるうちに彼は眠りにおちた。
そのとき、塹壕の窓の外では、今まさに、最初の蝉が啼いたところだった。昼か夜かさえすでに区別がなく、眠りこける彼らをよそに、蝉たちは固い地面から解放の勝どきをあげて、子孫をえるために、生命活動を開始した。花壇では、雑草に埋もれてなお、強いひまわりが太い茎を上向けている。薄い花弁を抱きしめた蕾はまだ固く閉じたままだが――その年も、いつもと同じように、夏がはじまろうとしていた。

５－４（後書き）

２０１１年の更新はこれが最後です。
お世話になりました。よいお年を。

6　インヴィテーション

平安市の夏は、駐在員たちにとって地獄の季節として名高い。地理条件により、他国のどのゲットーとくらべて湿度が高く、近現代日本で過ごしたことのあるものなら覚えがあるだろう、まとわりつくような不快感が、八月下旬まで続く。駐在五年を越える紳士淑女でさえ、「ああ、またあのハイヒューミットな季節が来るのか」と、遠い目で涼しい故郷を思うのである。主に、大西洋連合方面出身の者たちが。

一方で、平安市の学生たちにとっての夏は、一年でもっとも長い、学校生活からの解放を意味した。若者にとっては、不快感よりも興奮が勝る、さまざまなチャレンジに心躍る期間である。とはいえ、平安学園は、外界のように学生たちを甘やかしはしない。夏休みに突入して真っ先に行われるのは、各部活動の集中鍛錬。すなわち、強化合宿。それを終えてからが、本当の夏休みである。八月にはいると、ようやく真の解放を得て、ゲットー内にある自宅で過ごすもの、寮や寄宿舎で仲間と過ごすもの、さまざまだ。

リヒトとミサビのように、帰るところもなく、寮で過ごすのも退屈だというものは、たいてい、学生課からアルバイトの斡旋をうけて働く。希望者の多くは、インターンシップ制度にのっとって、毎年、同じ職場の世話になる。就職を希望するものが、それぞれの進路に近い各種組合や施設に行って、衣食住の提供をうけながら働き、在学中から少しずつ仕事を覚えるのだ。

就職を希望するわけではないが、リヒトとミサビは、今年も、南東部の湖畔地帯にある、リゾートホテルの世話になっている。休み中のバイトとして、リゾート・ホテルは、環境がすこぶるいいためだ。湖が近いので、空き時間には湖水浴を楽しめるし、厨房から出

されるまかないはおいしいし、誠意をつくせば、たいていの客は、学生の彼らに気前よく心づけをくれた。湖畔地帯は避暑地でもあって、付近には、ゲットーの高額所得者たちの別荘が多く立ち並んでいる。広い温泉やプール、カフェを兼ねたラウンジやバーなど、施設を利用しにくる富豪たちは多い。

「じゃ、君たち、今年もとりあえず、裏方の雑用だけどよろしく」

「はいっ」

元気よく支配人に答えた二人の仕事は、三等客室の廊下掃除とリネン、荷物類の配達が主である。ミサビは料理に関して基礎があるのでキッチンへ、リヒトは庭師について植木の手入れも、今年は新たに任された。

ホテル・イェル・シャロームは、平安市で最大のホテルである。客室数３００、最大収容人数は約千人、総敷地面積は五千坪をこす。実にさまざまな人間が滞在している。他国ゲットーの公務員、観光客はもちろん、現世政府の関係者、文化人。伝統芸能の弟子入り志願者も、この時期に多くが試験を受けにやってくるが、彼らはたいてい、このホテルを拠点に活動した。一年で、接客業がもっとも忙しい時期である。ＶＩＰから三等とよばれる庶民まで、彼らの要望にこたえるために、ホテル側は、学生の手でも借りたいほどだった。

そして、それらのゲストに加えて、ホテル・イェル・シャロームは、毎年、決まった日時にホテルの玄関に現れるある一団の面倒を見ていた。インヴィテーションによりやってくる、総府と政府の職員に率いられた、平安人の、現世での家族たちだ。

八月五日のその日、午前十時きっかりにそれが現れたとき、リヒトは中庭で、庭師の植樹作業を手伝っていたが、知らせをきいて、与えられた小部屋に引き返した。作業着である筒袖とたっつけ袴、脚絆にわらじを脱ぎ捨てて、シャワーはまだ使えないので、手ぬぐいでざっと全身を拭いて汚れをとった。両手で頬を力いっぱいたたいて気合をいれる。制服に着替えて、指定されたホテルのラウンジに向かった。

懐かしい後姿が、彼を待っていた。
「ははう――、母さん！」
「リヒト」
彼女は椅子に座っていたが、声に振り向くと、あわてて立ち上がった。瀬田問理可は、彼が最後に見たときと、見た目はほぼ変わらなかった。
背が高く、細身ではないが骨格の頑丈さが伺われる体つき。息子よりエキゾチックさを三割ほど増した顔立ち。一見して、すぐに親子だとわかるほどには似ていて、いつもはつらつとした表情と、たっぷりとしたボブ・カットの黒髪が、四十台半ばという年齢より、彼女を十は若く見せた。その表情が、リヒトを見ると驚きでいっぱいになり、すぐに、泣きそうな顔に変わる。
「どうして――もう、貴方……理非等。貴方、元気なの？　大丈夫なの？　本物よね？　本当に私の理非等だね？」
「そうです、お母さん」
「会いたかったよ。もう、もう――よかった、生きてて……よかったよ」
何かにつけて息子を抱きしめる癖が、当時は嫌でたまらなかったものだ。あの修学旅行に出かける日の朝も、リヒトは彼女の抱擁から逃げた。しかし、今は――
抱きしめられて、その体温や肌を感じながら、リヒトはほっとした。と同時に、妙に胸のあたりが涼しくなるのを感じた。体が離れる。涙を浮かべた問理可が、ハンカチで目元を押さえている。リヒトは、ふと、母親の斜め後ろで、椅子から立ち上がったまま、じっと再会の光景を見ていた人物に視線を移した。
相似形の少年。
「ふう――」
「久しぶり」
白いシャツに灰鼠色のブレザー、濃紺のネクタイ、同色系のチェックのスラックス。黒髪に、黒に青と緑が混じったような目。彼と

そっくり同じ声、同じ顔、同じ体――だった。
瀬田不可止。リヒトの双子の弟である。
「元気そうでなによりだ」
にっこりと笑って、リヒトに手を差し出す。リヒトが握り返すと、問理可がわっと声をあげた。彼の知っている母親らしくない、と戸惑っていると、不可止は「泣いたりなんかしないって言ってたのにな」と、静かに呟いて、自分のハンカチを差し出した。肩を抱いて落ち着かせる。
「あの――お父さんは？」
「畑も田んぼもあるからね。さすがに、この時期は農連もごたごたしてるから、せっかく招待をもらったけど、どうにも都合がつかなくて、俺と母さんの二人だけ」
「そう……」
「悔しがってたよ。父さんが特に。でもまあ、両親がこぞっていないというと、近所で、よほどのことだって思われると思うし――お盆にもかかるから、おばあさんはそっちの準備もあるしね。お前の同級生たちは、なんてったって、本当に亡くなっちまってるだろう？」
「ああ――そうだ。大丈夫だったの。そういうの、何もなかった？」
他にも、俺が変化したから、何か、迷惑かけてないかと心配で」
「それは大丈夫。ちゃんと葬式も出したし、三回忌もすませたから。夭折だと、やたら客が集まるんだよな。盛況だぜ、毎回、お前の法事」
「本人の前で、よくもそんなこと言うよな。正気か」
「ははっ」
不可止は笑い、興味深そうにリヒトを見つめた。そのとたん、外見に生じた弟との微妙な差異にリヒトは気付いた。
――年のとり方が違うって本当なんだ。俺も不可止も十六のはずなのに、不可止のほうが年齢相応に見える――俺が一年間寝ていたというのとは、また違う。髭の濃さ、全体の皮膚の感じ、目線、表

情。すべてが少しずつ、不可止のほうが、時計の針が先にある。
――俺のほうが若いんだ、なんでだかわからないけど。ゲットー人のほうが、寿命が長いから？　ちゃんとした有機生命体ではないから？
脳裏をかすめたのは、以前シンが言った「われわれは、人ならではの質感を捨てざるを得ない」という言葉だった。
思考は一瞬だった。だが、永遠のように長く感じられた。
見つめあって見ればみるほど、やがてリヒトは不思議な気持ちになった――四年を隔てて別々に成長したとしても、それでも、彼らはやはり似ていた。やはり双子だった。リヒトのほうが五センチほど背が高いが、目線は、ほぼ同じところにある。双子の少年は、どんなに静かに話していてもよく目立って、周囲のざわめきが小さく耳に届いた。
「お前、なんか……でかくなったなあ、りい」
「そっちこそ。何それ、その――お前、すごいな。その制服、ええと――A――高だったっけ。進学校だろう」
「まあな。お前も、なんだその格好。国防軍の真似？」
「しょうがないんだよ。ゲットーは人手不足だから」
「とにかく、座りましょう」
問理可の言葉で、三人は、椅子に腰掛ける。並んで座った母と弟は、これまでの家族や現世のことを喋った。
「いいところみたいだな」
不可止は、窓から外を見て言った。
「ここにくる途中、町の様子を少しだけ見た。古いけど、ちゃんとしてるな。住みやすそうだ」
「ああ、うん」
リヒトはすぐにうなずいた。母親の手前、ゲットーがいいところだと、肯定せざるをえなかった。隔離自治区は、現世では、楽園かなにかのように扱われていた。緑多く、古きよき時代の面影を残す平和の町。それが余計に、ほかならぬ現世の嫉妬を呼ぶ――が、今、

口にするのは無粋のきわみなので黙っていた。
「そう――だからとにかく、心配しないで。俺は元気で、なんとかやっています。お母さんにいただいた体はなくなったけど、魂はもとの、瀬田理非等のままですから。ですからどうか、お父さんにも、おじいさんとおばあさんにも、よろしくお伝えください」
「まあ。貴方――なんてこと。なんだか変わったねえ。どこでそんな、シュメール人みたいな口調を覚えたの」
「はあ、すみません。なんか、緊張してるのかも」
本当を言うと、どんな顔をしたらいいのかわからないのだった。ざっと、四年ぶりの再会――その、何度も指折り数えて待っていた瞬間が、今まさに起こっているのに、そこに、意識がぴたりと重ならない。手放しで喜べない。「会えて嬉しい」と、言った言葉に嘘はない。だが、素直に喜びを表現できなかった。表現の仕方がわからなかった。思いもよらないことである。
二人とは違う生き物になってしまった、というむなしさを、どこかで感じてしまったからだろうか、と少しだけ思った。
「このあと、予定は？」
「ええと。今日はとりあえず、部屋に戻って荷解きして、休んでるわ。明日から、市内見学とか、他の皆さんと一緒に、施設や町の様子をね、いろいろと見せていただけるんだってよ。写真は撮れないけど、しっかり見て、周さんにお伝えしなくちゃ。貴方、一緒に来れるの」
「はい。ご一緒します」
支配人も了解済みだ。家族と過ごす時間は、すべてに優先される。不可止が、母親のハンドバッグを持って立ち上がった。
「じゃ――とにかく、長旅で疲れたし、ちょっと部屋に戻るよ。お前、ここでバイトしてるって言ってたけど、自由時間は？」
「夜なら。その辺で、俺が掃除してるの見ると思うけど、そのときは勘弁してくれよ。夕食は一緒に」
「わかったわ。とにかく――またね。ねえ、部屋に来てよね。はい、

ここ、私とふうちゃんの部屋」
　母親が、ルームナンバーを書いた紙を渡す。リヒトは胸ポケットにしまって、二人をエレベーターまで送る。姿が見えなくなると、深いため息がもれた。
「よ」
　そこへ、ミサビの声が背後からかけられた。白いシャツにギャルソン風の黒エプロン姿で、いっぱしのボーイらしく見える。巾着のようになった白いハンカチを振っている。少年の初インヴィテーションとなると、甘酸っぱい青春だ、涙なしでは見られないだのと、従業員たちも興味しんしんだ。彼らから聞いて、タイミングをみて、厨房から抜け出してきたのだ。隣にならぶと、不思議そうに首をかしげた。
「どうしたの。待ちわびた再会のわりに、浮かない顔だね。見てたよ――あれ、お母上と、弟君でしょう？　二人だけ？」
「そう。父たちは、やっぱり、仕事がね。農業だから、夏は目が離せない。予想はしてたけど」
「そうか、残念だね。でも、こう言ってはなんだけど、二人でも来てくれるのは、多いほうだよ。気にしないほうが――ん？　あれ、そのことで、落ち込んでるんじゃないの」
「違う。思った以上に――すごく緊張したんだよ。型どおりのことしかいえなかった。その――もっと、なんていうのかな。すごく盛り上がるんだろうか、と思っていたんだけどね、むしろ逆。妙にしらけちゃって……なんだか疲れた。そのことが、むしろショックだ」
「そんなもんでしょう――ふうん……にしても、あれがリヒトの、ね。遠目にだったけど、似てたねえ。ラウンジにいたひとたち、すごい注目してたよ。気づいた？　ここで見るのは、特に珍しいもんね、さすが双生児」
「たしかに、似てるんだよね。……見た目はね」
「中身は」
「正反対。名前、逆につけたらよかったって言われてたくらいだけ

ど」
「ふうん？」
ミサビは首をひねったが、それ以上は聞いてこない。ハンカチを広げて「ラウンジで出すスコーンだってよ」と焼き菓子をくれた。心配されてるな、とリヒトは苦笑し、髪に手をあててかきまわす。どうも、友人たちに、食べ物を与えれば機嫌が直る、と思われている節があって、ときどき悔しい。
「今日はどうするって聞こうと思ったんだけど。どうする。やめとく？」
「いや、行くよ」
彼らの鎮守の森探検は、いまだに続いている。アルリシャの片割れは、手がかりすらつかめていない。
「せっかく、危険をおかす必要もなくなったから、もっと時間がとれるといいけどね」
「そうだね。さすがに、夏休みじゅうに見つけてあげたいよね」
友人はいまだに帰ってこない。さすがに、帰国許可が下りない、という状態を、彼らも異常だと思い始めていた。
「いったい、何をしてるんだ、テッセン」
「さあ」
それでも、魔法などというとんでもないものを、彼らは想像しなかった。
意外なところでもたらされた真実を彼らが知るのは、もうすぐのことである。それも、彼らにはまだ知りえないことであったが。

6―2

「魔法……ですか」

リヒトが家族と再会して六日がたったころ。ミューはその日、松岡家の別荘の一室で、マテ研平安支部所属のかかりつけ医と話していた。話題は、蓬莱支部でのハク盗難事件から、やがて完成を見るであろう“新しい力”に及んでいた。医師は、研究所の内部事情に関して守秘義務があるのだが、政治一家として名高い松岡の肩書きと、彼の人生において空前にして絶後であろう美貌の令嬢に、口が緩みがちである。お嬢様の皮を完璧にかぶった、はかなげでいたいけな少女にむかって、オフレコで頼むよ、とあわてて付け加えたが、そのころにはすでに、ミューは、大部分の予想をあらかたつけてしまっていた。

ミューは、平安市でもっとも頻繁に身体検査を受ける人間の、順位をつけるならば確実に五本の指に入るだろう。特異体質と病弱さゆえに、あらゆる部門を回って、長い年月にわたって精密検査を受けつづけてきた。そのため、どの場所がどういった研究をするか、結果を出してくるならどの方向か、高校生ながらなんとなく予想できる。魔法が現実になる日が来る、というのを聞けば、むろん、秀才と名高い彼女なので、その“魔法”というものの持つ現実感と異様な質感に、ぞくりと体を震わせた。

――蓬莱で、魔法が現実になる日が……もうすぐ……

――蓬莱。

さらに、そのキィワードで、どうしても思い出される人物がいる。先月のおわりに、不可解にもずうずうしいお願いをしてきたテッセンである。

医師は鞄を持って、それ以上の漏洩を防ぐためであるかのように、

足早に立ち去って行った。
補充された常備薬を手に、ミューは、誰も居ない別荘で、暖炉の前のロッキングチェアに腰掛け、天井の高いところにあるシーリング・ファンの回転を見つつ、しばらく考え事にふけった。
松岡家の別荘は、欧州風の外観をもつログハウスである。内装も欧州風で、床にはすべて毛足の長いじゅうたんか、細い竹を編んだゴザがしかれ、暖炉にはマントルピースが備わって、車や飛行機の模型が並べられている。室内はひんやりとしていた。さすが避暑地というべきか、夏でも、日が沈むと、暖炉に火をいれるほど気温が下がるときがある。念のために暖炉の脇には薪が積まれているが、昼間はそこまでではなく、むなしく出番を待っている。
「魔法ねえ……」
彼女とて、ファンタジーに類する書物を読んだことはある。呪文を唱えたら、手から、火とか水とか出てくるのか。なんだか、現実感がないなあ、と呟いていると、ひょこりと、ルーが顔を出した。
「ご主人、今日もホテルに様子見にいかないの。リヒトさまが働いているのに」
「考え中」
この別荘の建っている場所とホテルは隣接している。白樺やブナの林を歩いてぬければ、十分とかからず、花盛りのガーデンに出る。リヒトがアルバイトを始めると同時に、彼女も避暑と銘打ってこの別荘にやってきたが、それからは、会いに行くのが日課になっていた。夜の予定を聞くためであるが、彼が一生懸命働いているさまを見るのが、ミューは好きだった。
そんな自分をかえりみるにつけ、不思議な気分になった。
「ねえ、ルー。私って、本当に、昔、男の子だったはずよねえ」
「うーん、そうねえ。確かにご主人、魂は半分そんな感じだけど。でも、やっぱり女の子よ。どうみても」
「そうなのよねえ」
自分の体を見ても、少年だったころの面影はどこにもない。以前

は絶望したが、ここ一年は、ますます想いが強くなる。
女になってよかったのかもしれない、と。
せっかく、学校が夏休みになって、昼も夜もリヒトと二人きりで会える、と思ったところに、思わぬ邪魔が入って、ミューは多少面白くない。
「インヴィテーションか」
それがはじまってから、彼女は昼間にリヒトに会いに行くことをやめていた。リヒトの家族を、彼女はぼんやりとしか覚えていないが、あまり、会いたいとも思わないのだ。というより、怖かった。もし、彼の母親と弟と顔をつきあわせて、彼らに奇跡の第六感が働いてしまったりしたら。自分がかつて、瀬田家の近所の、坂の下の団地の子どもだったことや、虐待の末に町を出て行ったことを思い出されたら――ミューの想像力は、多分に、悪い方向へと傾くものであるが、今回もそうだった。もし、リヒトの家族に、彼女がリヒトのそばにいることを、驚愕の目で見られたり、やめてくれといわれたりしたらどうしよう、というところに、彼女の想像は飛んだ。
もしそうなったら、しばらく、普通にしていられる自信がないミューであった。
さらに、彼らを思い出すことは、自分自身の家族について思い出すことにもなる。垢まみれで汚れた服。何日も洗わないでもつれた髪や肌。彼女にとって、現世の記憶は、消してしまいたい以外のなにものでもない。
せっかく生まれ変わったんだから。名前も捨てたんだから。
リヒトに「ギン」と呼ばれて泣きたくなるほど嬉しいのと、これはまた別種の感情だ。
しかしともかく、六日が過ぎた。あと一日。あと一日で、リヒトに気兼ねなく会いにいける。心が弾んだが、また、今日の一日がとてつもなく長く感じることを決定付けられたも同然で、それがミューを、再び暗い気持ちにさせる。
「嫌だなあ。……お母さんとか、ごめんこうむるなあ。なんでイン

ヴィテーションとかあるわけ。総府も暇だわ。早く、帰ってくれないかなあ」
「でも、ご主人。リヒトさまは、家族に会えて嬉しいのよ。いけないわ、そんなこと言っちゃ」
「わかってるけど……でも、やだなあ。あ、そうだ。そろそろ時間だ」
椅子から降りた瞬間、玄関のベルが鳴る。ドアを開けると、そこには、風呂敷包みを手にサヨラが立っていた。部屋に招き入れ、ゲストルームに荷物を置かせる。いつもの質素な格好に、肩に蝶やら天道虫やらをのせて、申し訳なさそうに少女は首をかしげた。
「お邪魔して、本当にいいんでしょうか。まさか、松岡家の別荘だなんて」
「いいのいいの。あんたんとこの円城寺家だって、どっか、反対側にでっかいのがあるのに、さしおきこっちに招いて悪いとは思うけど。鎮守の森には、こっちのほうが近いもんね。私もひとりじゃ退屈だし。あんたも、夏じゅう毎日かようことになるんなら、こっちにいたほうが便利でしょう。気にしなくていいから、しばらくいてよ」
「そうですか？」
「そうだよ。それに、正直いうと助かるんだ。親が、私が一人きりになるのを嫌がるものだから。あ、最近はリヒトもか。物騒だとかなんとか。まあ、女ひとりだということを考えると、誰かいたほうが、私も安心だよ」
「そう、ですか……なら、いいんですけど」
すでに何度も、ともに夜の森をさまよって、互いに一筋縄ではいかない性格に慣れていた。年は離れているが、友人、といえる関係となって、一月ほどになる。
「で、その。早速で申し訳ないんだけど……私、料理とかまだ、いまいち苦手なのね。それでまさに今、お腹がすいてる」
「あ、はい、わかりました。滞在中のおさんどんはおまかせくださ

い」
　ひとりぐらし歴の長い少女は、ミューよりも家事全般において有能である。包丁を握り締めて、てきぱきと野菜を切り始めたサヨラの背中を見ながら、「そういえば、あんた、魔法って知ってる」と何気なくミューは呟く。
「えっ」
「蓬莱のマテ研でさ、なんだかそういう開発をしてるんだって。さっき、医者に聞いてさあ。蓬莱――ていうと、テッセンのこと思い出してね。あんた、ほら、虫で、そういうの、見たり聞いたりしてないかなって。まさか、テッセン自身がそれに関わってるなんてことないと思うけどさ――え？」
「ミューさん。それ、人前で絶対言わないでください」
　いつのまにか、真剣な顔で、サヨラはミューを見ていた。握り締めたままの包丁がぎらりと光って、なにやら剣呑である。やがて、サヨラは背をむけて、中華なべをゆすりながら、的確な言葉選びで、簡潔にすべてを説明し始めた。ミューは目を丸くした。
「えっ。それって……ねえ。それ、どうしたらいいの。リヒトたちには」
「こうなった以上、説明すべきかもしれませんね。だってミューさん、リヒトさんには黙ってられないでしょう。それに、黙ってたって、リヒトさんにはわかってしまうかもしれませんもの」
　テーブルに並べられた、野菜の煮物と中華風の卵粥、胡瓜とトマトのサラダに箸を伸ばしながら、世界最先端の研究内容について、少女二人は議論をはじめた。スチュアート・チャンも、よもや、遠く平安の、別荘でのブランチの話題に自分がのぼるとは、予想もしなかったに違いない。うっかりした医者のためにか、もしくは、破格の虫愛好家の献身の成果か、重大機密は、食後のお茶のときには丸裸にされていた。
　さすがにサヨラは、平安市始まって以来の才媛とうたわれただけあって、すでに魔法の成り立ちや概念を、ひととおり自分の言葉で

説明するレベルにいる。ミューも、今ではミサビに抜かれることがあるにしろ、元の学年では首席を他に譲ったことはない。打てば響くような言葉の応酬は途切れなかった。

「最初は、かくりよを使わない方式だったのですって。直接、異界から、粒子の操作によって召還するんです。だけど、これはとても危険が大きいの。現れる現象をコントロールするのがとても難しくて。それで、契約した使い魔の粒子のもとに、いったん、炎や水をひきつけて、そこから自分のもとに持ってくる、という保険をかけることにしたんです。いわば、自分の使い魔の能力という制限装置をつけたわけ。すると、危険が減り、かつ、確実に、自分で操れるほどの魔法が使えることがわかった。前者を直接召還方式といって、主に、ロンディニウムやイース、インドが研究していた方法。後者が、間接召還方式といって、蓬莱、平安、崑崙などがとっていた方式です。そして今、実用化に現実味があるのは、スチュアート・チャンさんの、間接方式のほうというわけです」

「だから、使い魔の能力が重要になるわけか。操作できる粒子の絶対数が多いほど、使い魔の階位は上がっていくから――自分も強く、名だたる神を従えるほど、強い魔法が使えるってわけだね。でも、これだと、使い魔の能力差がネックにならない？」

「ええ。でも、彼らの世界は、先に出したもの勝ち、みたいなところがあるから……チャンさんは、とりあえずこの、間接召還方式で魔法を確立してから、使い魔たちの能力差を埋める、装置かなにかを作って、と考えているようです。それに、急いで、魔法を完成せざるを得ない理由も、最近できたの。ほら――あのペトルーシュカですよ」

「なるほど。対抗手段にするつもりか」

「そうなんです。それで――今ちょっと、それに協力することになって、厄介なことになっているみたいです、テッセンさまは」

「あいつが、第三者からどうにかされて黙っておとなしくしているとは、まったく思わないけどねえ」

「私もそう思いますが、とにかく、おけががなければいいと思います。そのためにも、アルリシャさんの片割れを、早くなんとかしないと」
「ふうん。そういうわけだったのか。にしてもあんた、趣味悪いなあ。早く言ってくれればいいのに。というか、その能力、それって、もう完璧なスパイじゃない。本当に大丈夫なの」
「皆さんになら、事情を説明してもテッセン様はお怒りにならないだろうとは思いましたけど、それでテッセンさまに何かあったら、申し訳ないし、元も子もないし。でも、こうなってはもう、しょうがないですね。スパイ行為については、ここだけの話、商売をはじめてすぐ、平安軍の方がいらして、技術協力を要請されたことがあります。とても無理ですってお断りしましたけど。あと、他のゲットーの軍人さんらしい方もいらしたかしら。でも、それもやっぱり断りましたねえ」
「まあ、そんな風に言っちゃうあんたが、軍とかスパイとか殺伐としたものに、絶対的にむかないっていうのは、私にもとてもよくわかるわ。しかし、うっかりとはいえ……蓬莱も、留学生に乗じて、えらい虫を招き入れちゃったものね」
ミューは感心しながらカップに口をつけた。「早く夜にならないかな」と時計を見る。事情がわかってリヒトは喜ぶだろう、と、彼女は単純に考えた。そうですね、とサヨラも応じた。そのまま、十三歳の少女は口元をなごませる。
「でも、いいですね。好きなひとが、現実にそばにいて、決まった時間に会えるのがわかってるって。うらやましいですわ」
「え？　いや、すき――かどうか、よく、わからないけど……」
「だって、リヒトさんしか、ミューさんは無理ですよ」
「そ、そうかな……」
「そうです。見れば分かります。いいですね――私も、後悔してるわけじゃありませんけれども、テッセン様がもしも、ときどきでいいですから、お話したり、お茶をさしあげたりできるような間柄の

ひとだったら、どんなにいいかと思います。あの方ともしもクラスメイトになれていたら、どんなに、学校も楽しかったかしらって」
内容がいくらぶっとんでいるとはいえ、彼女たち二人を含めた別荘のリビング、という光景はのんびりとしたものだ。素朴だが高級な調度品でしつらえられた室内。フルーツが綺麗に盛られた籠や、芳香を放つアールグレイのたっぷりとつまったポット、プチ・ケーキ。夏の午後の光が降り注ぐリビングで語られる“魔法”は、よくあるニュースの域を出ない――どころか、驚くべき滑らかさで、好いた惚れたの話へと変貌を遂げている。
結局、ミューもサヨラも、根本的にはお嬢様なのだ。彼女たちは、実際に敵と戦うことのない人種で、また、自身の才能のすぐれているを自覚するがゆえか、魔法というものに関して、かなりクールである。その証拠に、ミューは、魔法というものが世界に与えるだろう衝撃を予測できていながら、それでも、今もリヒトのことを考えていた。
「だめだっ。夜まで待てない。ひゅうが呼んで、伝言頼もう。ルー！　あんたも行って、様子見てきてよ。たぶん、働いてると思うけど」
「えー、ご主人が直接行けばいいじゃないの。そんな、まわりくどい」
「だって家族とか、無理だから……ね、早く」
「わかったわよう。ひゅうがおねえちゃま！　おねえちゃまいらしてくださいな」
「――なによ、あんたたち」
呼ばれたひゅうがは涙目だったが、二人は気にせず、魔法について詳細を告げてほしいと言い聞かせる。ひゅうがは終始暗い顔――それは、猫の姿を借りているゆえに、表情の変化を読み取るのが難しい、という理由もあったが、少女たちにはまったくうかがい知ることができなかった。しょせんは、他人の使い魔である。心情までは察しきれないとしても仕方がない。さらに、ミューにとっては、

むしろ、リヒトと家族との再会がどうなったかのほうが重大だった。ルーのほうには、それとなく偵察を頼みながら、それでも、瀬田家の鉄壁の絆を、彼女は疑いもしない。

魔法は、こうして、彼らの前に出現を始めた。

6―3

インヴィテーションによって招待された家族の滞在期間は、最大で一週間である。そのうちの五日間を、瀬田家の二人は無事に消化した。リヒトは、市内を見学する彼らについて案内してやり、息子が暮らす場所についてひとまず母親が安心した様子を見て、彼もほっと胸をなでおろした。四年前の修学旅行から、どこの誰とも知らないものによってさらわれて、“死亡”させられた長男の安否もそうだが、彼女は、彼がどんな場所で暮らしているのか、手紙だけではとうてい全貌を知りえず、大いに不満、かつ不安を抱いていたのだ。平安では、カメラなど富豪しか持っていないし、かといって、学生の身で写真館に行くということもない。したがって、母にとって、平安市での息子が成長していく様子を、確実にもたらしてくれるものなどありはしなかった。そういう事情もあって、初日の夜、夕食の席からその日に至るまで、問理可は、リヒトに、不安を何度も口にした。いわく、衣食住に本当に不自由していないか、現世の学校とは、まったく様子の違うらしい平安学園で辛い思いをしていないか。町のひとはよくしてくれるか、噂によくきく軍隊式のスパルタ生活で、体の見えないところに傷など作っていないかどうか。健康面から学業に至るまで、質問は詳細に及んだ。しかもそれが、ときに涙を伴ったので、突然に子どもを連れ去られた母の心中いかばかりだったか、というのを、リヒトはまざまざと思い知らされたかたちである。と同時に、彼は心を入れ替えて、二人に精いっぱい、家族の情愛を示すことを怠らなかった。日がたつにつれ、徐々に、再会のとき感じた疎外感や気まずさも解消していった。

問理可は日程どおり平安市を見学し、多分に総府職員のけなげな努力もあって、どうやら、ゲットーが、想像よりも悪いところでは

ない、と認識を新たにした。さらに、長男の学校生活が順調である、と理解したのは、六日目、軽食をとりにロビーに下りてきて、リヒトとミサビが、モップを手に、タイルの床を磨いている現場を見てのことだった。

「お友達がいるのね、ちゃんと。貴方なら、その点は心配ないと思ったけど、やっぱり不安で」

「彼は人気者ですよ、お母さま」

さわやかな笑顔は、中年の女性にも有効である。ミサビの言葉で、問理可は、ようやく心の底から安心した表情をみせた。

「本当はもう一人、テッセンって奴も居て、まあ、たいてい男三人で仲良くさせてもらってます。彼は今留学中なので、ご紹介できなくて残念です」

「そう。手紙にあったとおりだ。本当だったのね。よかった――まさか、貴方が高校に進むときいたときも、心配したけど。なんだか私の知ってるりいちゃんとは違っちゃったように思えてならなくてねえ」

そういって、問理可は、かたわらの次男を見た。

「ほら、ふうちゃんは、小さい頃から、高校も大学も行く、お母さんのあとをつぐ、って言ってたでしょう。でも、あんたは、お父さんのあとをつぐから、中学出たら、農業ライセンスをとるから高校は行かない、って――いつか手紙にも、ここで農家になるっていってたのに、それなのに、突然、やっぱり高校に行きますなんていうから……なんでなんだろう、と思って、それがずっと心配でね。あんなに、畑とか田んぼとか好きで、いつも周さんについてまわって、収穫時期になると、学校から帰るなり畑にむかって一直線に走っていくような子が――どうしてなんだろう、って、みんな首をかしげてたんだよ。だって、平安では、高校に進むってことは、公務員か軍人さんになるか、どちらかでしょう？　ひょっとしたら、悪い友達にそそのかされたんじゃないかとか、周さんとずいぶん心配したのよう。でも、もう私には、アドバイスっていっても、こちらの実

情はわからないし、なんともしようがない、口出しもできないから……でも、あんたがそうやって、笑ってお友達とアルバイトなんかして、楽しそうにしてるんなら、よかった。自分で本当にそう決めて、みんなとがんばっているんだよね？　大丈夫だね？」
「もちろんです」
「そう。ならいいけど……」
「平安人の人生は長いから、高校に行ってからでも、好きなことはできるってわかったんです。遠回りかもしれないけど、いろいろ経験してみようと思って」
現世では、誰でもが高校や大学に進んだり、就職には、四年制の大学を卒業していなければ不利である、という慣習はすでに存在しない。多くの子どもは、義務教育を終えると同時に就職し、必要があれば専門学校に通う。その職に必要な資格が、大学でしか取得できない、というのでない限り、めったに大学に行くものはいなかった。
リヒトは、不可止を見た。
「でも――それで、高校にすすんだってことは、てことは、ふうはやっぱり？」
「医者になろうと思う」
不可止は、母を横目で見て言った。
「同じく、内科、と思ってたけどね。ちょっと考えが変わって。でも、医者にはなるよ」
「そう。まあ、お前ならきっと大丈夫だろう。がんばれよ」
「せいぜい、世の中の役に立つよ。ひょっとしたら、じいちゃんやばあちゃんの面倒ばっかり見てる、ってことになるかもしれないけどね」
「そうか。うーん、やっぱり――お前はすごいなあ」
昔から、弟を褒めることばかりしてきた不肖の兄である。リヒトは、当時を思い出しながら、しげしげと不可止を見た。
「お前は、昔から頭がよかったからなあ」

「お前が、軍関係ねえ。まあ、元気だけはよかったからなあ」
「本当、俺の双子の弟とは思えないな」
「お前が双子の兄とはねえ」
「……いってることはまるっきり似てるよね。――と……あれ、ひゅうが？」
入り口のドアの回転を器用に入ってくる一匹の猫――それを、ミサビが自分の相棒だと認めた瞬間、エントランスを横切った赤いリボンの三毛猫が弾丸のように走ってきて、いきなりミサビの腕に飛び込んだので、リヒトはびっくりした。問理可も、不可止も、目を丸くする。しかし、次の瞬間、二人の目はもっと丸くなった。ひゅうがが、人の言葉を喋ったからだ。実際に目と耳にしたときの衝撃は、リヒトも覚えがある。
伝言があるのよ、ミューから。そう呟いたひゅうがの背中には、子蛇のルーがくっついていた。こちらは、リヒトとそっくりな不可止を見つけて仰天した様子だったが、リヒトが伸ばした手から肩へと上って、頭を頬にこすりつける挨拶をする。
「どうしたの、急に。仕事中は駄目だって言っただろう」
ミサビは自分の使い魔を叱ったが、ひゅうががしきりと甘えてくっついてくるので、様子が変だと悟ったのか、やがて「失礼」と、エントランスのわきの、観葉植物のほうへ行ってしまった。リヒトは、ルーに尋ねようにも、問理可が興味しんしんの様子で見ているので、口を開くことができなかった。「友達の――ペットみたいなもので」と言葉をにごす。不可止が「じゃあ、俺たちは」と、察した様子で母親を促した。リヒトはほっとして、手をあげる挨拶をした。
「あ、そうだ」
立ち去りかけた不可止が、振り返って、低い声で呟いた。
「話があるんだけど」
「話？」
「大事な話だ。そうだな。明日の昼、空いてるか」

「空いてるも何も、見送るつもりだけど。帰るんでしょう、二人とも。ええと、俺たち二人でってこと？　母さんも一緒？　時間あるのか？」
「こんなこっそり言ってるんだから、俺とお前の二人だけに決まってるだろう。帰る前にどうしても話したいんだ。時間は、そうだな……俺たちのグループの出発は――午後二時にここに迎えがくるんだ。その前、三十分もあればすむ。どこか、誰もいないところ」
「じゃ、一時に、ガーデンの――あずまやは分かるか。小川をわたったところに、別荘地と鎮守の森の誘導看板があって、その手前にある、古い」
「あれか。わかった。じゃあ、そこで、明日」
「ああ、うん……」
　去っていく瞬間、弟の目に、何か形容しがたい色が浮かんだのを見て、リヒトは不思議に思いながら見送った。ルーが「おじゃましてごめんなさい」と、耳元で申し訳なさそうに呟いたので、はっと我にかえる。
「え？　あ、いや、いいんだよ。どうしたの。どうせ今日も夜には会えるのに」
「そうなんだけど、ちょっと――ご主人さまから、様子見てきてっていわれたの。ねえ、ねえ、あのかたがリヒトさまの弟さま？　双子でいらっしゃるっていう？　失礼だけど、ちっとも似ていないのねえ！　本当に、リヒトさまと同じ日の同じ時間に生まれたひと？」
「似てない？……あ、そうか」
　使い魔は、魂の色や形や模様やあり方で、その人間を見ている。きっと、ルーにも、不可止の“中”が見えたのだろう。まったく似ていない双子の弟の魂が。納得しながらリヒトはうなずいた。
「そうだね。中身は、そうだね……、似てないかもね」
「そうよ。似てないわ」
　ルーはしきりにうなずいた。
「よかったわ、リヒトさまで。やっぱり、そうなのよ」

「……？　そうかな――」
そこへ、ミサビが戻ってくる。深刻な表情をしている。ただならない話だった、というのは、ひゅうがが彼の胸に顔をうずめたまま、尻尾すらぴくりとも動かさない様子でわかった。
「どうしたの、いったい」
「テッセンの事情がわかった」
ミサビは、彼にしては珍しい、柔和さのかけらもない声色で言った。
「どうりで、使い魔が――かわいそうに。ひゅうが、大丈夫。何も心配要らないからね」
「どういうこと」
「気付いてやれなかった――くそ、いまいましい」
そのようなセリフをミサビが口にすること自体が、リヒトにとっては事件である。びっくりしていると、ミサビは、表情をいつもの優しげなモードに戻して、リヒトの手に預けていたモップの柄を握った。とっとと掃除を終えて、従業員の控え室に戻る。彼らはそこで、はじめて魔法について共有した。リヒトは、信じられなかった。
「魔法？　魔法って――なんだそれ」
「サヨラもミューも、女の子だよ。こういっちゃ悪いけど、しょせんは、どんなに頭が良かろうと――きっと、淡々と、新しい着物かショールみたいに話したに違いないよ。困ったな……テッセン、想像より悪いよ。相変わらず無茶をする」
「どういうこと。魔法ってのはなんとなく飲み込めたけどさ。いまいちわからないな」
「蓬莱だよ。ハクの盗難にペトルーシュカに、魔法」
「あ……」
リヒトにも、遅れて理解された。
彼らには、映像記憶を共有する、などという、伝達方法はない。言葉がとぎれがちなひゅうがをなだめすかし、回り道をしながら、スチュアート・チャンや、ミシェルやエレナ、スリジエ、軍人たち

――に辿り着く。
「彼、いいように使われたな。たかが学生に、しかも留学生に、世界一といっていい研究者が、最後の実験に協力を要請する時点で、普通じゃないよ。所長がつぶした、というのも、見方を変えれば、魔法がのっぴきならないものだというのの証拠みたいなものじゃないか。きっと、わかったんだ、そのひとは。ヒルガーっていったっけ。僕も新聞で見た覚えがあるな。元ジャーナリストっていう話だからね……魔法のはらんでいる危険、今後の混乱を、彼には予想ができたんだろうな。蓬莱で完成させたくない、と思ったのかな」
「そうか――そういうことだったのか。だから、テッセン……アルリシャが、どうしても生き別れの相手を見つけたいのもそういうわけだったんだ。魔法――そりゃ、現実になったら、その力は魔的粒子の真髄ともいえるだろう。だけど、他の機械で補うまでの間、使い魔たちとゲットー人の関係は崩れてしまうかもしれない。そうだな？」
「そうよ」
ようやく、ひゅうがは答えた。ベンチに座ったミサビの膝の上で、しょんぼりと尻尾と背を丸めている。
「あんたたちが、夜、鎮守の森を探検するたびに、だからあたし、ずっと怖かったわ。上さまがたがお話してる内容を聞かれたりしたら――だってもう、魔法のこと、アルリシャのこと、私たちの間ではずっとずっと、噂のまとなの。蓬莱やイースやアフリカ、いろんなところのかくりよのものたちの間でね、平安は今のところないけど――軍人たちが、自分たちの契約した相手以外の精霊と、こっちが了承しないのに、無理やりに、っていうこともあったりしてね。あたしたちのこと、狩の対象にして、鹿やウサギみたいに思っているなんて、馬鹿にしてるにもほどがあるじゃない。平安のものたちは上のいうことを聞いて、今のところ大人しく様子を見てるけど、ここでまでそんなことが起こったら、どうしたらいいんだって、みんな、影ではずっと言ってる。怖いのよ。上のひとたちも、今、と

つくにのかくりよのひとたちと盛んに行き来して議論してるけど、未だに結論が出ないし。客人も招いて、ご精霊さまの日までには、方針を出すって、昨日、サクヤ姫さまはおっしゃったけど」
「サクヤ姫。そんな高位の神が」
その名前に、リヒトも聞き覚えがあった。
「サクヤヒメって、あれじゃないの――木花の」
「そうだ。そうか――そんなレベルでも、未だに結論が出ないとなると……」
ミサビは、どうしたらいいのかわからない、というように、額に握りこぶしをあてて黙り込んだ。
リヒトは、よくわからないでおろおろしているルーの、滑らかな鱗におおわれた体を撫でる。ひとつだけ、やらなければならないことは決まっていた。
「だからなんだっていうんだ」
呟くと、ミサビが顔を上げる。
「ミサビ。とにかく、俺たちは約束したことを果たそう。一刻も早く、アルリシャの片割れを探すんだ。それと――こちらが事情をわかってるんなら、ひゅうが。俺たちがかくりよのかたがたに話しかけても、もう、べつにかまわないだろう。そして、俺たちは、彼らに協力を頼むと同時に、安心してもらうべきだ。少なくとも俺やミサビやミューは、使い魔のことを能力で選別したり捨てたりなんかしないって。そういうものがいる、と知ることは、彼らにとっても、今、必要なことなんじゃないだろうか。とにかく、今夜からはそうしたほうがいい。ぼさっと、魔法が完成するのを待ってることはない。かくりよには――少なくとも、平安市の鎮守の森には、俺たちがちゃんと向かおう」
「そうだね」
ようやく、ミサビが納得したようにうなずいた。
「そうだ。そのとおりだ。――そうしよう」
と、いうわけで。

6―4

時刻は、夜の八時ごろ。
四人は、新たに集合場所となった、ホテルのすぐそばまで伸びている参道脇に集まると、まっすぐ境内に向かった。その日、リヒトとミサビは遅番を免れていた。捜索以来初めて、午前をまわらない時間帯に参道を歩く。しかし、あたりを見渡して、彼らはそろって首をかしげた。
「誰もいないね。夏といったら、逢引全盛のシーズンじゃなかったっけ？」
「です、ね。あまり品のいい話ではないですけど、その……そこかしこで、話し声がしたりしたものですけれどね。でなくても、深夜に、酔って参拝に来るひととか、結構いた、と思うのですけど。今時分に誰もいないなんて、ありましたかしら」
サヨラが不思議そうに呟いた。
「静かでいいじゃない――あ、いた。かくりよの連中」
ミューの指の先に、大勢、獣の姿をした使い魔が集まっている。ほとんどがレベルの低い精霊や獣精たちで、円座になって話をしていた。「すいません」と、ミサビが声をかける。
「夜分に申し訳ございません。突然話しかける無礼も、不干渉の規も承知の上で、お話したいことがございます」
「なんじゃね、お若いの」
円座になっていた連中のなかで、答えてくれたのは、その場でもっとも年上らしい、猿の形をとったものだった。上座にいて、他のものの話を聞いてやっていた立場のものだ。猿は、開いているのかいないのかわからないほど細い目をいっぱいに開いて、じっと彼らに視線をすえた。
「いきなり話しかけられては、小さいものが怯えるでなあ。あんた

らは知らんだろうが、今、ちいっと、わしらの間では、でりけえとな問題が起きておっての。いくら平安人でも、気安く話したりできる気分ではないのよ、お若いの。おわかりかな」
「すみません、スクナさま。この子たちは、あたしの主の学友なの」
「おお、ひゅうがか。お前の主？　ああ、そこの毛唐みたいな髪のお子だな」
猿の顔が、ミサビのほうを向く。
「そうです。あの――ごめんなさいね、みんな。ちょっと、お話がしたいの。あのね、魔法について……あ、いやだ、逃げないで。違うのよ。スクナさま、あのね、この子たちは、魔法について知っているの。というか、つい、今日知ったばかりなんだけど、心配で来てくれたのよ、私たちのこと」
「嘘。嘘だ。ついに僕たちのこと、追いまわしにきたんだ。上のかたがたの誰かを連れ去りにきたんだ。無理やり契約するなんてひどいこと、僕たちの神さまや女神さまがたには許さないんだからな」
一番幼い印象を与える子猫が、威嚇のポーズで声をあげると、他にも、四人に厳しい視線が向けられる。
「私、知ってる。あんたたちのこと知ってる。わからないとでも思ったら大間違いよ。ここのところ、夜じゅう森の中をうろついている連中でしょう、子どものくせに。言い訳なんかきかないんだから、いいから早く帰りなさいよ。じゃないと、こっちにだって、学園の生徒を主にしてるやつはいっぱいいるんだからね。お役人に仕えているものだっているのよ。通報しちゃうんだからね」
「誰か！　通報！　通報！」
「ちょ――ちょっと待ってください」
サヨラが膝をついて言った。彼らの反応が、予想よりナイーブなものだったので、ミサビもリヒトも眉間にしわを寄せる。事情を話して、アルリシャの片割れに関して協力をとりつけるつもりだったが、そんな段階ではなさそうだった。
「すみませんが、もっと、その――ちゃんと話のできる方はいらっ

しゃいませんか」
今にも飛び掛ってきそうな精霊たちの視線と罵倒に、たまりかねてミサビが言った。
「まず、僕らは、そちらに危害を加えるような連中でないことは誓います。なんだったら、武器もおきますよ」
「悪いが、お前さんたちと話をしてくれそうなかたがたは、今はみんな忙しいでな。その――件の魔法とやらのせいで」
「ちゃんと話したいんですけど。その――とにかく話を聞いてくれませんか」
「お前たちが総府の命を受けてきたというのなら考えないこともないがのう。見たところ、普通の学生であろ。それがなんで魔法について知っておるのか、まずそれがおかしいし、ひゅうが、お前がばらしてしまったというのなら、ちと面倒なことではあるな。お前さんがた、悪いことはいわないから、もう、そっとしておいてくれないかね。今すぐ出て行ってくれるなら、なかったことにしてやらんでもないよ。夜中じゅう、森をうろつくのも――悪いがね、話しかけてきた以上はこの際だから言ってしまうが、もうそろそろ、黙っているのは難しいね」
「え、それも？」
「悪いけどねえ」
彼らが探索をはじめてから、逢引のにんげんを一人も見ない、というのは、どうやら、この、“でりけえと”な連中が、見つけるたびにおどかして追い返してしまうからだ、という事情を、四人はようやく知らされた。と同時に、彼ら四人は、監視されていたことも知った。魔法を使うために、高位の神を拉致するかどうか、と思われていたようだ。アルリシャの片割れ、というもっともらしい理由があるので、容易に、追い出せなかっただけだ。
しかしそれも、もう、やめてくれ、と彼らは訴えた。
「今は、人間に森をうろうろされたくないのよ。特に、夜はね――わしらは話しあっている。どういう形になるにせよ、結論が出るま

では、わしらは今、お前さんがた平安人と心安く語らうことが難しい。おそらく、この夏いっぱいはな」
「上のかたも、それを議論されているのですよね？　魔法について」
「そうじゃ。そして、さような神々であっても、さまざまな意見がおおいに乱れて容易にまとまらぬ。むつかしい、むつかしい問題だよ。だからとにかくお前たちも、その結論が出るまでは、ここに来ないでほしいんじゃよ。悪いが、お子らの肝試しもな、夏になってからよう見るがな、もう、ほほえましく見守る余裕は、わしらには今はないものでなあ」
「そんな――じゃあ、あの、せめて――」
　そのときだった。
　すさまじい怒号とともに、本殿から何か、どかどかという、やはりすさまじい音がして、ばあん、と開き戸が開いた。石段を登った先にある本殿の、境内へと張り出した舞台に、何ものかがやってきて、力任せに扉を開いたのだ。左斜め上で暗闇のなか、ぼんやりとした灯篭に照らされて出てきた人物を見て、四人は息を飲んだ。そこに現れた男――そう、男だった――人間の姿をした彼は、見るからに怒っていた。足をあげて、舞台を囲っている木の、低い位置にある欄干を、腹立たしげに蹴りつける。言葉はなく、ひたすらに蹴ることで怒りを発散していた。やがて、手に持っていた、天狗下駄と呼ばれる形状の、一本歯の下駄に裸足の足をつっこむと、欄干の上に立ち――
　そのとき、リヒトは、彼と目が合った。
「――あのひと、あったことがある。そうだ――草間士郎さんのお屋敷だ」
　思わず呟いた。
「アーベイ！　あのときの坊ちゃんかっ」
　男は、欄干を蹴って今にも空中に飛び出していきそうだったが、方向を変えて、四人のほうへと身を躍らせた。がつ、と確かな重量感のある音で石畳に降り立つと、背筋を伸ばしてその場を見渡す。

赤銅色の筋骨隆々とした肌をあらわに見せ、黒い着流しのだらしない姿に、それを履いては、まともに歩くことができそうにないと思われる高下駄だが、それが威勢よく石畳を叩いて、かっ、かっ、と鳴る。相変わらず、奇矯な格好だった。男は四人をじろじろ見る。

「含めて子ども三人かぃ。こんなときに、なんで」

「えーっと」

リヒトはミサビを見る。

「魔法についてお話があって」

おそるおそる、ミサビ。

「魔法？」

とたん、男の顔色が変わった。彼は、老猿を見て「おまえの客か」と、尋ねるでもなく言い放つ。高圧的だった。しかし、スクナは「用件はすんでおります」とうやうやしく頭を下げる。

「じゃあ、いいな。俺が預かる」

「ご随意に」

「行くぞお前ら。何をぼさっとしてる」

「え？　あ、はい」

助かった、といえるのかどうかはわからなかったが、精霊たちは、もう彼らに敵意を見せなかった。頭をさげられつつ見送られながら、四人は顔を見合わせる。リヒトは、仲間に、二年前、キョウタローの解雇を止めようと訪れた市長の家で、彼と会ったことを説明した。

「本当？　ちょっとちょっと。リヒト――大丈夫なの。この人、かなり、高位の神様だと思うよ。人の形してるし、さっきの精霊がたもぺこぺこしてたでしょ。名前は？　ちゃんと伺ったの？」

「ええと。あの、すみませんがちょっと、お兄さん。貴方のお名前は――」

「名のるほどのもんじゃない。俺ァ、ただの二代目だからな」

「二代目」

「まあ俺のことぁいいんだよ。お前らは。えーと」

四人は名乗った。男について早足で歩くうち、森の中に無数にあ

る泉のほとりに辿り着く。夜露にぬれた草地にめいめいが腰掛けると、男はうろうろとあたりを歩きながら、身振りを交えて、一説ぶちあげはじめた。
「面白いじゃねえかって俺は言ったんだよぉ。魔法、おおいに結構じゃねえかってよ。そしたらあれだ。軽々しくそんなこと言うもんじゃねえ、頭冷やしてこいって、追い出されちまった」
「追い出されたんですか？　ええと、あのお猿のおじいさんが、上のひとたちがずっと会議してるって言ってたけど、ひょっとして貴方もそれに？」
「そうだよ。こっち来てから、もう、毎晩毎晩会議だよ。踊りすぎてもう、目がまわっちまうぜ。老体どもめ、二言目には、悪しき力だ、人の終末だ、世も末だって――何千年も生きててよく言うよ。頭が固いのなんの。エレキテルのときも、核のときも、ダークマタのときもソジのときもそう言ってたんだぜ。ばっからしい、自分たちが生きてた時代のことを忘れてやがるんだ。人が進化をやめるのは死ぬときだぜ。ゲットー人ならなおさらそうだ。魔法くらい作ってくれねえと、生まれてきたかいがねえってもんだろう――だろ？」
「はあ」
「ゲットー人が魔法を作る。俺たちと協力して。すんばらしいことじゃねえか。ようやく、停滞していたかくりよも動くことができるってもんだ。俺たちが傍観者席に陣取って、もう長いこと過ぎた。死ぬほど待ちくたびれたといっていい。魔法で、本当にようやく、俺たちの世界と、お前ら、ゲットー人たちの世界が一つになれるんだ。すばらしいことじゃねえかい。それで、使い魔のあいだにも実力主義が蔓延したからって、俺はべつにかまわねえ。そんなもん、いっときのことで、じきに、俺たちの能力差だって、お前らが埋めてくれるんだろう。ちょっと我慢すればいいだけだ。表立っては言わねえが、そう思ってる若い連中は結構いるんだぜ、俺たちの中にも」
「つまり、かくりよの高位のかたがたのあいだでも、魔法について

は意見が割れてる、ということですね」
「ああ、そうだ」
男はうなずいた。大きな下駄が、草を踏みしだく。
「だから、結論が出ない。俺の親父なんかも、内心、俺とおんなじ意見なんだが、こちらでは、俺と親父は半分よそもんでもあるからな。俺のみてくれで、気付くだろ。俺も親父も、純粋な日本の神さんじゃねえんだよ。大恩人さま、導きの神、なんていわれて大事にされちゃあいるけどよ。でもって、うちはどっちかっていうと――わりと、科学とかそちら方面には結構、理解のあるほうなんだけどよ。もとが、錬金術の元祖みたいな仕事してた一族だからな」
「は。錬金術の元祖、っていうと」
「製鉄だよ。そう――これも、その当時では科学の結晶みたいなものだった。最先端の技術者集団だったんだぜ、俺の一族は。だから、魔法なんて聞くと、いいねえ、わくわくするぜ。新しいもの、俺、大好きさ。俺もやってみたい。もちろん不安はあるが、期待のほうが大きい。ところが、大多数の意見は、そうじゃないんだな」
「な、なるほど」
べらべらと喋りまくられて圧倒された四人だが、顔を見合わせてこれだけはわかった――つまり、男は若いのだった。ひきしまった顔に、ときおり、やんちゃぼうずの面影がうかがえる。
「で？　お前らはなんだ。どうしてここにいる」
やっと聞いてくれたので、四人は説明する。男はうーん、と唸ると「道祖神の片割れねえ」と首をひねった。
「そりゃまた、海に落とした耳輪を探すような話だな。まあ、やってやれねえことはねえだろうが。しかし、本人が来られない、というのが痛いな、それは」
「やっぱり、そうですか」
「使い魔と主の魂はつながってる。そいつに片割れがいるってんなら、そいつとも、多少、繋がりがある、ということになる。アルリシャってえのとそいつとここにいればな。俺たちにとって、気の合

う魂の持ち主は、篝火みたいなもんだ。どこにいようと、かならず光る。どうなろうとひきあう。そんなもんだ」
四人は顔を見合わせた。使い魔と主のあいだにあるという交感について、かくりよのものからはっきりと聞いたのは初めてだったのだ。詳細を説明できるほど高位の神は、めったに、彼らの前に現れてくれない。つまり、この男の存在は、彼らにとってとほうもないチャンスだった。
「あの、ずうずうしいお願いかもしれませんが」
代表でリヒトがきりだした。
「その道祖神探しを、手伝ってもらえませんか」
「はあ？　嫌だね、そんなの」
男はあっさり首を横にふった。
「そういわずに――二代目さん。俺たち、もう、来るなって言われちゃったんです。でも、テッセンは、蓬莱で――会えばわかると思いますが、いい奴なんですよ。でもって、そいつは、そもそも魔法とか、おとぎ話みたいなのが嫌いで……それなのに、今、蓬莱で、魔法にどっぷり首まで漬かって、きっと、必死で取り組もうとしてるんだ。大切な母親の、初めてのご精霊さままで蹴って。アルリシャと二人きりで。約束したんだ――俺たちが何とかしてやらなくちゃならないんです」

6―5

「だったら余計に本人が来て、自分の足で探したり、今ここに何をおいても存在してて、直接そいつが俺に頭を下げるべきだろうがよ。知らんわい、そんなやつ」

男は、け、と呟いてリヒトをにらんだ。ここで、男の協力を得られなかったら、精霊たちから森に出入りさせてもらえなくなるだろう。少なくとも、今年の夏いっぱい、捜索ができないことになる。リヒトは必死でくらいついた。

「貴方、えらい神様なんでしょう。ここでまた会ったのも何かの縁ですよ。協力してくれないまでも、あの精霊がたに、ちょっと一声かけてくだされば、いいんです。俺たちが鎮守の森に出入りするのだけは、どうか、許してほしいんです。お願いしますよ」

「って言われてもなあ。俺ぁ誰かに喋りたかっただけよ。たまたま、知った顔がいたから、おっと思って声かけて、ツレごとつれてきちまったがな。それになぁ、俺ぁ、なっさけねえよ。お前、なんだ？

友達が魔法をいち早く身につけかかってるっていうのによ、お前、悔しくないのかい。魔法だぜ、魔法。最先端の技術の結晶だぜ。何をおいても、誰よりも早く、まず手に入れたくねえのかい。俺ぁ、その、アルリシャってやつの記憶も見せてもらったよ。うむ、蓬莱人、スチュアート・チャン、こいつぁ天晴れなやつだ、よくぞやってくれた、ってなもんよ。他のやつが何と言おうと敬服するね。奴は心に、立派な科学者ダマシイを持ってるよ。魔法の仕組みも、じいさんばあさんや女子どもら、感性で動く連中は、ほけほけっとしてたが、俺はなんとなく飲み込めた。まったく、俺がゲットー人だったら、飛んでって頼んでるね。炎やら水やらじゃなくて、異次元にはさぞかし、良い鋼が眠ってるに違いないんだ、それを召還してくれってね。刀にするのにもっといい未知の金属もあるかもしれん

――と、いけねえ、どうしても、鍛冶のほうに話がいっちまうな。いや、とにかく、なんだ。俺はな、お前のその、お友達のために何とかしますっていう優等生ヅラが気に食わねえ」
「優等生なんていわれたことないけど」
「じゃあ馬鹿か！　魔法だぞ！　魔法！　男子一生の夢じゃねえのかい。粒子という力の列に加わる、人知の及ぶ最後の砦だと俺はみたぜ。究極の科学だろうが。お前――げえむを知らないのかい。げえむだよ、げえむ。あれが現実になるんだぜ！　祭だ、祭！　俺ぁ先頭で踊るぜ。誰よりも先に、そいつを感じてみてえからな」
「俺、ゲームより、どっちかっていうと、山とか川で何か拾ったり魚釣ったり、ぼーっと田畑を見てるほうが好きだったからなあ」
「そらぁ俺だって好きだけどよ――いや、違うよ。そんな話をしてんじゃねえ。調子狂う奴だな。とにかくだ。お前が、そうだな――お前自身が魔法を使いたい、だから相棒を探したい、ってんなら、ここで会ったのも何かの縁だ、協力しないでもねえ。むしろ、俺がお前のツレになってやってもいいよ。けど、その、欲のない感じがどうも腑におちん。魔法についての意識の低さがいけすかんのだ。だから悪いが、協力する気にはなれん」
「そうですか」
うーん、困ったぞ、とリヒトは天をあおぐ。泉の周囲だけ、林がきれて、円い夜空が見えた。
ふと気付くと、ほかの三人が、ぽかんとリヒトを見ていた。
「大丈夫なの、リヒト」
ミューが心配そうに言う。
「え、なにが」
「なんか、結構、あの人相手にざっくばらんすぎないかと思って――位が高いってこと、わかってるよね？」
「ああ、つい。ぜんぜんそんな感じしないから。それに、神域の方角に感じるような、あの、変な威圧感みたいなのも、あの人からは感じないし……」

「そう？　僕は悪いけど……ちょっと、もうそろそろ直視できない」
「私もです」
「私も」
「あたぼうよ。お前がおかしいんだ」
男は、三人の様子を見てかかと笑う。
「だから言ったろう。相棒になってやってもいいってよ。リヒトっつったか。多分、俺とお前、合うと思うぜ。今のところ、かみあわないところも多いけどねえ」
「はあ、そうですか？」
「運命ってやつかもしれんなあ。あの、市長の屋敷であったときから、妙に気になってたんだ。まさか、今夜、このタイミングで再会するとは思いもよらなかったけどな。たしかに、こうして見ると、俺にもお前が違って見える。光が違う。なあ――どうだい。俺と、契約してみねえかい」
男は言った。三人の息を飲む音がきこえたが、リヒトは首をふった。
「すみませんが、俺、相棒は持たないって決めています」
「そうかい。また、なんで」
「だって――俺が死んだら、貴方、どうします」
「お前が死んだら？――そうだなあ。魂を結ぶからなあ。そら、ちっと苦しいかもしれんな。俺はまだ、誰にも仕えたりしてないからわからねえがなあ」
「俺が嫌なのはそこです。どうしても納得がいかない、というか、許せないんだ。二年前、何があったか、貴方がもしご存知なら――俺たちのクラスメイトがたくさん死ぬ事故がありましたが、そのとき、俺によくしてくれた友達も死んだ。友達が死んで、彼の相棒は、悲しくて泣いてた――魂で知り合うぶん、かくりよのもののほうがいっそう純粋な涙を流すんだと、そのとき俺は知りました。この目で見た。悲しい声だった。貴方たちは、現世のくびきを放たれて、何千年という時間を過ごしているけど、そのあいだ、生きて肉体を

持っている、自分と似た魂を持つ存在にめぐりあったとき、どんなに愛しく思うか、大事にしようとするか――まして、貴方たちは、ゲットーの人間というものの中にそれを見つけたとき、どんなに歓喜したかと俺は思うんだ。現世では、巫女さんや神官や霊媒師や、感覚の特に鋭いひととしか触れ合えなかった自分たちなのに、ゲットーの人は、自分たちを見てくれる。喋ることができる。そして、そのゲットー人のなかに、自分とぴったり合う魂のひとを見つけたら、その人と深く知り合えたら。触って、言葉を交わして、抱きしめてもらって、かわいがってもらったら。または、対等に語り合える、生涯をともにする相手になれたら。その人が死ぬまで十分にたっぷりと、お互いの必要なことを確かめあえたなら、どんなにか無上の喜びを感じるだろう。何千年も生きてきた彼らの孤独にとって、この経験は何にも勝る誘惑だ。お菓子みたいに甘くてとろけそうだ。だけど、もし、そうやって寄り添って過ごしていたときに突然引き裂かれたら……どんな風になるか。俺はその光景を見た。そしたら、怖くてたまらなくなった。思い知ったから……彼らになんという思いを、自分たちはさせてしまうのだろう、と。ミサビのひゅうがや、ミューのルー、それに、テッセンのアルリシャを見て、ますます確信した。特に今、アルリシャ――彼女の本当の目的を知って、痛々しくなるくらい献身をテッセンに捧げる彼女に、俺は感心すると同時に、恐ろしさも感じているんだ」

男は、黙って耳を傾けていた。視線は泉の上とリヒトのあいだをふらふらしていたが、耳は、一語も聞き漏らすまいとそばだてられているのがわかる。

「そう……、ええと、俺は、言葉はうまくないけど――そうやって申し出てくれるんなら、貴方にだって、俺の魂がどういうものか見えてるんでしょう。位が高いというなら、なおいっそう、俺の言いたいことを正確にわかるでしょう。俺はこのさき何があるかわからない立場だ。現世の家族が今、ここにいるけど、母や弟は、俺が死んだら悲しむひとたちです。ここにいる三人も、テッセンも。だけ

ど、俺の生に限りがあるように、彼らの生にも、限りがある。悲しみも有限だ。生まれ変わって会うまでの時間、お互い、わずかなあいだのさよならだと思えばいい。もしも俺が魂ごと消滅して生まれ変わることができなくなっても、単なる消滅で済む。彼らの次の人生に、最初から俺がいないだけ。――でも、かくりよの人たちは違う。魂の消滅を永遠に覚えていながら、大好きなひとと二度と会えないことをずっと知りながら、そのあとも何千年も生きていかなければならないんだ。永遠に苦しみが続く。だから俺は、もう、人間以外の、永遠に生きているであろう貴方のようなひとを、けしてそういう、泣いて悲しむものの列に加えてはいけないと思った。どうしても」

「そうやって、はっきり、人間側の意見を聞かせてもらったのは初めてだなぁ」

男は腕組みしたまま、苦笑する。

「なるほどねえ。お前さん、たしかにちょっと、ハクが変わってはいるね。それで余計に、か。しかしなあ、そんなふうにがちがちに思いこんで、拒否される側の気持ちってのも、ちっとは考えてもらいたいね。こちとら、そんなに柔じゃないんだ。ことに、そういう相手の使い魔になるって決まってるやつってのは、やっぱりそれなりに強情で、頑丈で、一途で、頑固なもんだよ。そうは思わねえかい」

話しているうちに、リヒトは、どうしようもなく、この男に親しみを感じるのを止められなかった。気が合う、という言葉は、おそらく本当だ。この男なら、相棒――使い魔、というのとは違う、この男はおそらく、自分に使われてはくれないだろう――神の名にふさわしく、高いプライドを持ち合わせているに違いない、と感じさせる発言やいでたちから、リヒトはそう思った。この男は、自分と視界を共有するものだ、という気がする。

「今日は帰ります」

リヒトは立ち上がった。急激に冷え込んでいた。森は日がささず、

奥に行くにしたがって、夏でも気温が零度近くになることがある。いつのまにか丑三つ時も過ぎているうえに水場の近くとあって、ミューは寒そうに身をすくめていた。彼女の肩に上着をかけて、リヒトは男に一礼した。ミサビとサヨラも、提灯を手に立ち上がる。あらためて確認するまでもなく、今日はもう、捜索は不可能である。

「道祖神については、俺は協力する気はねえけどな。リヒト。お前、また来いよな」

「言われなくても、見つけるまで諦めません。俺たちは」

男の後姿は、リヒトの目にもすでに、独特の光を帯びて見えた。澄んだ強靭な印象は、彼の宝石のように深く濃い青金の瞳によるものだと、リヒトは気付いた。

しかし、彼らの探索は、これで、よりいっそう厳しいものになった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5455y/

ゲットー?　蓬莱幻想

2012年1月10日18時53分発行